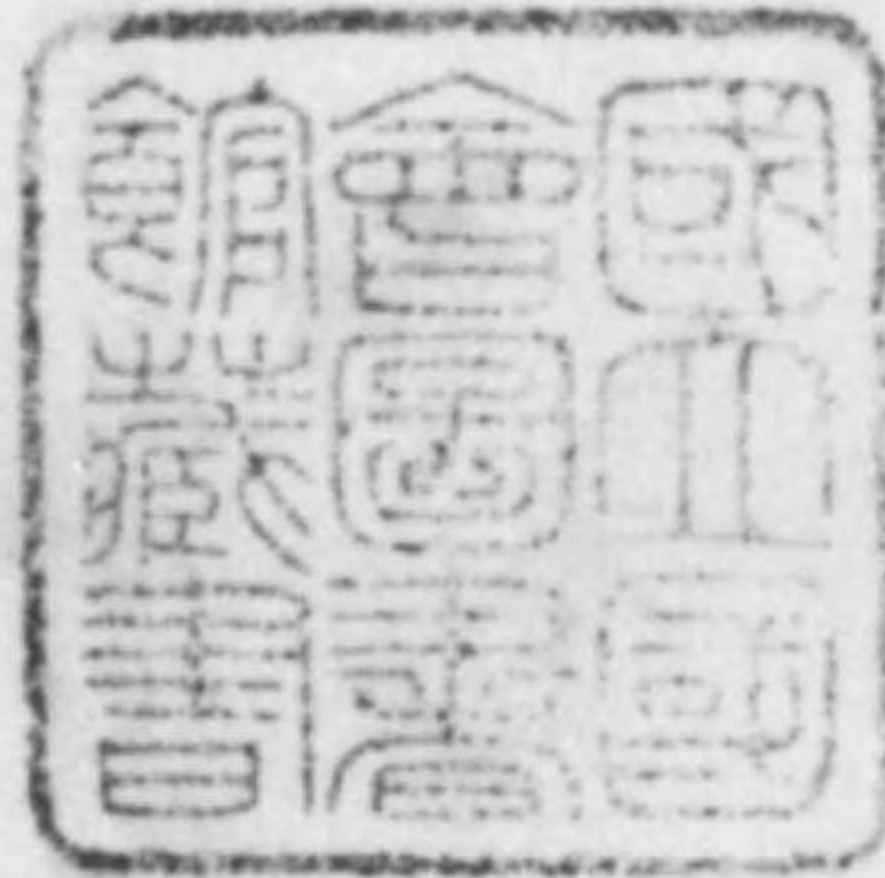


247X66

本  
居  
宣  
長



121.25M958m R



111868

### 序

本書は、著者が我國學問史上の代表的一學者たる本居宣長について、學問的に理解して見むとて、過ぎつゝ二年の間に、ものせし、一小研究にすぎず。傳は、正確を期しつれども、十分に史料を搜索し、使用する、便宜も、時間も、有せざりしこととて、なほ、遺漏、誤謬なきをえざるべし。彼が學問の研究は、もごより、一層重きをおきしところなるも、これとて、概觀をむねとしたれば、個々の部分に於いては、精しからぬふしと、多かりぬべし。切に、各方面の専門家によりて、補ひ正されむことを、俟つ。

序

一



今の學界に、特殊的研究を發表して、何人も覺ゆなる、失望は、著者もまた、豫知せざるにあらざれど、さすがに、草稿のまゝに打すておかむよりは、世に公けになして、自然、人々の眼に觸るゝことならは、一つには、己が蒙るを啓き、あるはまた、少しく學者の參考ともなりなむ、たよりなきに、あらざるべし、この望みを力に、著者はこの試作を、印刷に附することとはなしつ。

明治四十四年一月十三日、校正のこと全く終はり

ける時、東京大森にてあるす。

著者

## 凡例

- 一、本書に用ゐたる紀元は、すべて、西洋基督曆に據れり。
- 二、句讀法は、由來、便宜上のもので、一むきには、定めがたけれども、一般に用ゐる二種だけにては、思想を精確に發表するに、些か、ものたぬことあれば、本書にては、假に、三様に用ゐる試みつ。
- 三、本書に用ゐたる、主なる畧稱は、左の如し。
  - 〔全〕は、本居宣長全集の畧、〔賀全〕は、賀茂眞淵全集の畧、〔記傳〕は、古事記傳の畧、〔鈴〕は、鈴屋集の畧、〔後鈴〕は、後鈴屋集の畧。而して、〔全一〕は、本居宣長全集第一卷の畧にして、他書みな之に準ず。
  - 傳記は、川口常文の本居宣長大人傳記の畧、年譜は、伴信友の鈴屋翁畧年譜の畧、日記は、宣長の自ら記し、本居宣長日記の畧、〔家の昔〕は、家の昔物語の畧とす。

壹は、本書第壹編の畧、貳は、同第貳編の畧、一、二等は、各編、第一章第二



凡例

四

章の畧とす。故に畫二とあるは、第壹編第二章にして、その下に、三、  
等と記せるは、勿論各章内の節を示す。

# 目次

## 第壹編 宣長傳の研究 (自一頁至一八六頁)

序	宣長傳の區劃……………	四
第一章	家系及び傳第一期第二期……………	九
第二章	傳第三期第四期……………	三七
第三章	宣長の講義……………	一〇一
第四章	宣長の學徒及び交友について……………	一三三

## 第貳編 宣長學の研究 (自一八七頁至五四四頁)

序	宣長の學問の概念と研究の精神……………	一八七
第一章	宣長が古典の研究と訓詁註釋……………	二〇〇

目次

五



第二章 宣長學とその區分及び著書の概観……………二四三

第三章 文學説及び語學説……………二六九

第四章 古道説……………三〇一

第五章 宣長學の意義及び關係……………三四四

第六章 近世の古學……………三八八

第七章 宣長學の成立 契沖、眞淵と宣長……………四四〇

第八章 宣長學の根本思想……………四八四

結 論 宣長の人格……………五二七



本

# 居宣長

村岡典嗣著

## 第壹編 宣長傳の研究

註 宣長傳全般に渉る、主な史料で、著者が直接に使用したものは、左の如くである。傳各期、及び、特殊の問題に關するものは、それ〴〵、各案に記す。

一、鈴屋翁畧年譜一卷全集

伴 信友著

こは、信友が、宣長を慕ふあまり、宣長の歿後直ちに、その材料を本居大平から借りて、編成したものである。その編成の次第は、この年譜を刊行するに際して、文政十二年、これに添へた村田春門の序、及び大平の跋文に明らかである。然るに本書について、平田篤胤は、古事本辭經(四の四八)に、信友の學風の創意なきを難じた一例として、信友に先立つて、同じ鈴門の場

第壹編 宣長傳の研究



朝風天保五年、一八〇一が、享和三年（一八〇三）に、同じく本居家から、材料を借りて、編成したのであつた。然るに、信友、朝風の兩人が、「文政六年（一八二三）の頃自分の家で相會した時、信友が朝風から、その稿本を借りた。信友が翌年譜は、この朝風の稿本の功を奪つたものである、と記してゐる。併し、これは豈か、篤胤の例の性癖から、自分の親交のあつた、朝風の爲に、一度は、互ひに深く相許したにも拘らず、當時背いてゐた信友を、殊更に、陥れようとした嫌があるのでは、或は、信友が、その朝風の作つたといふもの、朝風が太平から宣長の年譜に記す材料を奪つたことは、宣長が朝風の作つたといふのは、宣長が朝風の年譜に記す材料を奪つたことである。を見て、参考にしたにせよ、この年譜がまた、信友の、獨立の、研究の結果になつたものであることは、上記の、大平、春門の文に徴して疑はれぬ。この點については、鈴屋祭紀念（明治四十年二月廣島史神祭典會發行）のうちの、鈴屋大人に關しての参考書のうちにも、已に注意された。

この年譜の中には已に、次に出づる川口常文が、宣長の傳記に於いて、修正し、また、本居五鈴氏が、本居全集首卷に於いて、正誤した如く、些細の點に於いて、四五の誤りはあるが、本書は大體に於いて正確で、かつ便利なものである。

## 二、玉樺第九卷（二九—四三）に出でた傳刊本

平田篤胤著

こは、平田篤胤が、古學の四神として祭つた、契沖、東満、眞淵、及び宣長の事蹟を記したものの一つである。宣長の傳として、簡単に要を得てゐる。かつ、所々宣長に對する篤胤自らの考へが述べてあるので、宣長と篤胤との關係を研究する上にも、看却すべからざる好資料である。

## 三、本居宣長大人傳記寫本

川口常文著

常文明治五年、一八七二は三重縣の官吏で、又國學者であつた。宣長を非常に崇拜した人で、同志を語らつて、山室山神社を建て、宣長の靈を祭つた。この傳記も、その宣長に對する敬慕の情から、成つたものであるが、この書の如何なるものであるかは、緒言に記して、「此傳記は、事實の遺漏なく、訛謬なきを主として、大人の自ら書給へる日記、及び本居家譜、家の昔物語、還言書、その他、諸雜錄をはじめ、當時に成りたる種々の書籍、また、その土地の人々、あるは大人の弟子なりし人の家などに遺れる口碑等を、取蒐めて、ものせしにて、些かもその事實に違ひ訛まれることなき、眞正の傳記なり。」と言つたのに知られる如く、全然、根本的史料に基いて、事實の正確を期したものである。記



述も整つて、筆致も謹嚴、毫も獨斷のあてがない。而して、その間に、自ら、宣長に對する欣仰の情が、溢れてゐる。從來の傳記中、最も推奨すべきものである。彼が本書一度現れて、齋藤彦慶の宣長傳、清宮秀堅の古學小傳等の宣長傳に關する從來の諸文獻は、殆んど存在の價値を失つた觀がある。編年體の傳記としては、本書は宣長傳として、殆んど完全に近い。

四、本居宣長日記寫本

宣長には、壯年の頃から歿前に至る迄の日記がある。京都遊學中には、在京日記として別になつてゐる。著者が直接に使用しえたのは、寶曆十二年（一七六二）以後、享和元年（一八〇一）にいたる、七卷である。

序 宣長傳の區劃

一 本居宣長は學者である。彼の一生の活動は、殆んど凡て、學問の研究に限られてゐる。されば、彼の生涯の事蹟を、區劃すべき分岐點は、自ら、彼の學問の變遷發達の上に、求められなければならぬ。併しなが

區劃の標

ら、初めからもし、全然この見地に立つ時は、宣長傳の區劃は、やがて、宣長學の歴史的區劃と同一となるべく、その結果、宣長傳の外的、社會的方面を無視することゝなつて、傳の區劃としては、妥當でない。是に於いてか、もし更に、社會的、外的方面に於ける彼の事蹟に、現はれた區劃の、かくの如き學歴上の區劃と、一致するものがあらば、そは、彼の傳の區劃として、最も適當なものであらねばならぬ。

而して、かくの如き意味に於ける、適當なる區劃點は、宣長傳を通じて、三つある。

二 その第一は、寶曆元年、二年（一七五一、一七五二）彼が二十二歳、二十三歳の交にある。彼は二十二歳の時までに、郷里松坂で、一般の普通教育を終へたが、その年家を續ぎ、二十三歳、上京して儒學醫學を學び、同時に、彼の生涯の目的たる、國典の研究に入るに至つた。彼の京都留學は、彼の傳に一生面を開いた原因である。この寶曆元年を分岐點とし、元年以前を傳の第一期とし、元年を第二期の始めとする。

區劃點  
第一



第二は、寶曆十二年、十三年(一七六二、一七六三)かれが三十三歳、三十四歳の交にある。十二年(一七六二)には、彼結婚し、十三年(一七六三)には長子春庭生れて父となつた。それとともに、十三年(一七六三)には、紫文要領石上私淑言の大著が出来て、彼の中古の歌物語に關する研究が完成し、その年末には、彼は眞淵に入門して、彼の學問上、新たな時機に入る緒をなした。即ちこの十三年(一七六三)を以て、傳第二期の終りとする。

第三は、天明七年、八年(一七八七、一七八八)彼が五十八歳、五十九歳の交にある。天明六年(一七八六)には、大著古事記傳の主要部なる、上卷の傳を完成して、彼の上古學に對する研究殆んど大成し、七年(一七八七)には、領主紀州侯から、治世上の意見を問はれて之に答へ、一家の學を以て、社會に認めらるゝに至つた。而して、八年(一七八八)を経て、九年からは、彼は書齋的生活から出で、盛な社會的活動に入つた。即ちこの八年(一七八八)を以て、第三期の終りとし、九年(一七八九)以後を第四期とする。是に於いてか、出生から歿去に至る(享保十五、一七三〇—享和元、一八〇

一七七十二年間の宣長傳の區劃は、左の如くなる。

第一期 寛延三年(一七五〇)二十一歳まで。

幼時及び普通教育時代。

第二期 寶曆元年(一七五一)二十二歳より、寶曆十三年(一七六三)三十四歳まで。

京都遊學及び歌物語研究大成時代。

第三期 明和元年(一七六四)三十五歳より、天明八年(一七八八)五十九歳まで。

上古學研究及び大成の時代。

第四期 寛政元年(一七八九)六十歳より、享和元年(一八〇一)七十二歳まで。

學問普及時代。

以下、まづ、家系の研究から始め、宣長傳全四期の研究を、前後二章に分けて述べる。而して之に添へて、彼の生涯の活動に重き部分を占めて



る、講義の成績を概観し、また彼の學徒、學友について研究する。彼の著書については、第貳編に譲る。

註

(一) 上田萬年氏は、その本居翁の百年祭に際して記した評傳に於いて、「翁が七十二年の長生涯は、その結婚したる三十三の年、即寶曆十二年(西曆一七六二)を以て、前後の兩期に斷することを得。」(明治三十四年七月稿、「國語のため第二にいつ」)となした。

第一章 家系及び傳第一期第二期

註 特に本章に於ける研究の重要な資料で、同時に、著者が使用したものは、左の如くである。

一、家の昔物語

本居宣長著

歌、二、四参照

二、詩文稿

同上

歌、二、四参照

三、本居宣長日記第一卷

自寶曆十二年(一七六二)至同十三年(一七六三)

血統

一、宣長は、小津氏に本居氏が結合した家系に生れ、初め小津氏を名告つて、後本居氏に改めた。而もその血統は、純然たる小津系であつて、本居系でない。



本居家の祖

本居家は平姓で、平頼盛に出で、その六世の孫本居、縣判官、建郷を祖とした。建郷の三代の後、左馬助直武に至り、南朝の忠臣北畠親房の三男、同顯能の、伊勢の國司であつたのに仕へ、忠勇な家臣として、重用され、直武以後、武基、武久、武貞、武延、武重、武利と傳へて、武連に至つた。武連の時の主君は、具教であつた。具教の時に至り、天正四年（一五七六）十一月、北畠家は織田信長に亡ぼされたので、武連の二子、延連、武秀は、浪人の身となつたが、恰も松坂に在城してゐた、蒲生氏郷に仕へることゝなつた。而して、兄延連は、祖父武利の住した由緒のある、一志郡大阿坂村に、住んだ。これが本居家の宗家で、延連の子を延基といひ、その後が、庄左衛門、新兵衛、新右衛門と傳へて、その地の名家であつたが、新右衛門の子林右衛門、即ち丁度宣長が先代に當る人の世に至り、家産衰へ、その子女二人あつたのも、同時に死んで、この系統は終に斷絶した。

延連の弟武秀は、猛勇の武士で、蒲生家に重んぜられ、氏郷が會津へ國替の時、随つて移り住んだ。天正十九年（一五九二）南部九戸の戰の時、享年

武連

延連

武秀

慶步大姉

三十九歳で戰死した。武秀法號を道觀と云つた。その妻慶步大姉寛永一六三、八、癸、葬於松坂樹敬寺、恰かも懷妊の身であつたが、家臣二人を伴つて、伊勢國へ歸つて來た。落魄の身を愧ぢてか、或は他に所以あつてか、阿坂村の延連の家へは行かず、一志郡小津村の、油屋源右衛門の家に、かゝりうごとなつた。或は何か昔の縁故があつた故であらう。又一説には、旅路に行疲れて、一時の休息を乞うたのを縁で、頼りなき身を寄するに至つたのであるとも云ふ。とに角、この家に世話になつて、こゝでその子を生んだ。後、源右衛門一家と共に、飯高郡松坂に移り住んだ。源右衛門は、松坂に移つて小津氏を名乗り、小津村在住の頃から業としてゐた、松坂木綿の製造を手廣く營業した。源右衛門の次男、清兵衛末友道運が、家を繼いで業を起し、松坂本町に住み、江戸大傳馬町に店を出して、取引が中々盛んであつた。これが小津家の本家である。

小津氏

道印

慶步大師の生んだ子が、後に、源右衛門の長女で、道運の姉に當る、法號榮感寛永十二年、一六三、五、癸、葬於樹敬寺を娶つて、小津姓を名乗り、小津七右衛門道印慶安元年



道休

一六四八、安永五、五十七、松坂魚町四丁目に住し、小津家の別家をたてた。  
七八、葬於樹敬寺と稱し、松坂魚町四丁目に住し、小津家の別家をたてた。  
宣長はこの家に出たので、道印はその五世の祖である。

道印に四男二女があつた。次男三郎右衛門道休元禄元年一六八八又木綿業をなし、始めは外舅道運の江戸の店に世話になつてゐたが、後、大に富み榮え、大傳馬町一丁目に、木綿店三箇所を創置するに至つた。松坂に歸つてから、概して富裕な當地の同業者中にも、勝れたものとなつた。本町に住し、延寶の頃、職人町に隠居した。道休がかく榮えたのに反して、その兄なる道印の長男宗運の業は衰へたので、終に道休が道印家の嫡家の如くなつて、祖先の祭をもした。これ宣長の四世の祖で、本居武秀が血縁の孫である。

唱阿道清

道休は、その家を、弟喜兵衛道仁が、小津本家道運の女を娶つて生ました、長男三四右衛門定治唱阿道清寛永十四年一六三七に嗣がせ、又その職人町の隠居家の跡を、道運の子道方の子道智寛永四年一七〇七に嗣がせた。唱阿に至つて、益々富榮え、江戸の堀留町に煙草店と兩替店とを出した。こ

父道樹定利

れ宣長が三世の祖で、武秀が血縁の曾孫である。小津家は元來淨土宗の信者で、代々信仰が深かつたが、この道休と唱阿とは、殊に熱心であつた。

唱阿は、本家道運の孫に當る榮保大姉かん女を妻とし、四男四女を生んだ。四男は夭死した。四女のうち、長女を榮珠きよ女といひ、四女を榮林きん女と言つた。嗣子がないので、職人町を嗣いだ道智の次男、三四右衛門定利道樹元文五年一七四〇、安永四、分入つて相續した。これが宣長の父である。道樹に至つて、武秀以來の本居家の血縁は絶えた。(道樹の兄を元關洞譽と言ひ、道智の跡を嗣いだ。洞譽死して、その弟で道樹にも弟である道有が、之を嗣いだ。道有の子英昌に至り、家産衰へ、家が斷絶した。道有の弟で、洞譽の末弟にあたる永喜が、江戸に出で、本居姓を名告つたが、その子の代に至つて、全く小津家と音信を斷つた。

註

(一) 永喜については安永三年(一七七四)九月廿八日の日記に、「去十八日夜



江戸永喜公死去之由、行年七十六歳號順永院念譽隨法居士。」とある。

義兄道喜定治

二 道樹は始め、唱阿の長女榮珠を妻とし、榮珠が前に、道樹の長兄で、道智の嗣子であつた、洞譽に嫁いで、生んだ子、道喜定治寶曆元年一七五一を、嗣子と定めた。これ即ち、宣長の義兄で、宣長の先代である。道樹、後に、小津家と全く別の縁故のある、村田氏の女、かつ、法號惠勝を室とした。宣長はこの惠勝を母として生れたのである。

母惠勝

惠勝明和五年一七六八、村田孫兵衛豐商元固の女で、小津氏の本家、道運明和四年一七六八、の女、榮智の女、はつ法號元壽の腹に生れた。村田氏はもと近江の人で、佐々木氏の一族に屬し、小津家と同じく、松坂の舊家である。本居家とは別に血縁の關係がない。宣長の義兄定治は、なほ母榮珠によつて、本居家の血縁を傳へてゐたが、宣長に至つては、全く小津家の血縁である。

母方のを  
ちをば、  
察然

宣長の母勝子には、はらからが六人あつた。そのうち長兄は、幼時から、僧になされ、詳蓮社審譽上人西阿直入察然和尚と稱し、江戸増上寺

の走譽大僧正の弟子となり、文昭院殿の御靈廟の別當、眞乘院の一世の主であつた。明和元年(一七六四)二月廿八日、六十四歳にて失せた。他の一人の兄は、いで、同族村田氏を相續し、五女は、家を繼ぎ、他の二女いづれも、他に嫁き、皆長壽を保つて、幸福な生涯をおくつた。勝子は即ち第四女である。

弟妹

宣長が同腹の弟妹は、第一人、妹二人あつた。長妹は、彼におくれる、二年、即ち享保十七年(一七三二)の十二月七日に生れた。寶曆十一年(一七六一)三十歳で尼となり、智遊と稱し、殆んど彼とともに居住した。弟の親次は、彼におくれること五年、享保二十年(一七三五)二月廿六日に生れた。寛延三年(一七五〇)十三歳の時、外祖父村田元固の嗣子となり、考賢と稱した。寛政九年(一七九七)十月廿六日に六十三歳で歿した。末妹、おや、つ(又おしゆん)は、彼におくると、十歳、元文五年(一七四〇)二月七日に生れた。寶曆六年(一七五六)十六歳で、宮崎氏に嫁いたが、後夫に死別し、寛政七年



出生

(二七九五)五十六歳の正月廿五日に尼となり、壽方と稱して、宣長とともに住んだ。享和元年(一八〇一)五月廿三日に六十二歳で歿した。

註

(一) 家の書物語(全四)の三七〇

三 宣長は、八代將軍吉宗の治世なる享保十五年(一七三〇)五月七日、伊勢國松坂本町の小津家に生れた。父定利時に三十六歳、母かつ子二十六歳であつた。而して、彼の生誕は、父母が兼て子のないのを憂へて、吉野の水、分神社に祈つた結果である、と信せられた。當時家には、宣長の爲には叔父に當る定治(當時二十歳)が、嗣子として定められてゐた。宣長、幼名は富之助と稱せられた。

これから二十一歳まで、即ち傳第一期は、彼が幼時及び普通教育の時代であるが、之を概観して來ると、記すべき主な事件が四つある。父の死、習學、旅行、及び養子行である。

父の死

彼は元文五年(一七四〇)七月廿三日、十一歳(この年字を彌四郎と改めた)で、父に別れた。父定利は、その年の三月から江戸に下つて、大傳馬町の店にあつたのを、病をえて、そこに失せたのである。義兄の定治は、かねて宣長が生れた時、嗣子たることを辭したが、義理堅い定利は、之を許さなかつたので、依然嗣子であつた。彼は元文二年、三年(一七三七、一七三八)宣長が八九歳の頃から、江戸に出て、商業をおこし、まもなく富を致して、別に一家を構へてゐたのであるが、是に至つて、定利の遺言もあつたので、直ちに歸省相續し、再び江戸に歸り、その神田紺屋町の自宅に住んだ。

定利が死んだ翌年、即ち寛保元年(一七四一)、十二歳で彼は實名を榮貞「よしさだ」と附けた。その年五月十四日に、母勝子は、宣長及びその三人の弟妹を連れて、本町の家を引拂ひ、魚町一丁目の宅に移つた。即ち宣長三世の祖、唱阿が、先代道休の職人町の隠居所を移して、隠居した家で、やがて宣長が終生住んだ家である。かくて父に別れた宣長は、その幼時を、母勝子一人の手に育てられるに至つたのである。

移轉



註

(一) この家は、近頃鈴屋遺跡保存會の手に依つて、松坂公園に移され、その屋敷跡は別に保存してある。

幼時の教

四 彼がこの期に受けた普通教育は、當時中流以上の家庭一般の教養として、完全に近かつたものといふべく、かつ、上方風の商家の教養として、尙武的でなく、尙文的のものであつた。

彼は元文二年(一七三七)八歳で、西川三郎兵衛と云ふ人を師として、手習を始めたのを最初として、寛保元年(一七四一)十二歳の正月から齋藤松菊といふ人に就いて、また習字を學び、七月から岸江之中といふ人につき、四書の素讀を學び、別に猿樂、謠曲をも習つた。延享三年(一七四六)十七歳の時から、濱田瑞雪(寶曆十三年、一七六三、歿、八七)について射術を、寛延元年(一七四八)十九歳の十月から、山村吉右衛門といふ人について、茶湯を、同二年(一七四九)二十歳同年九月十六日名を榮真ながさだと改めたの十月から、正住

師

瑞雪

讀書  
作歌

院の住持について、五經の素讀を習ひ、易經、詩經、書經を讀んだ。又彼は、幼少から、讀書を好んで、和漢の書を得るに任せて雜然と讀んだ。殊に歌文には志ふかく、十七八歳の頃からは、歌を詠まうとの志を生じ、初めは何人を師とするでもなかつたが、寛延元年(一七四八)十九歳の時、愈志をたて、同二年(一七四九)二十歳の時から、その養子に行つた地なる山田の宗安寺の住を師とした。即ちこの時代に、已に、次期に於ける歌物語の研究の素地が作られたのである。

註

(一) 彼が幼時の師については、多くその名のみ傳つてゐて、その人爲はもとより、その生死年月も未だ明らかでない。たゞ濱田瑞雪については、彼の日記、寶曆十三年五月廿六日(真淵に會つた翌日)の條に、「濱田瑞雪死八十七歳」とあり、また、翌廿七日の條に、「己刻瑞雪土御樹敬寺」とある。

(二) 玉勝間二卷あのが物學びのありしやうに、「十七八なりしほごより、歌詠まゝほしく思ふ心いできて」〔全四〕の四七とある。また、寛延二年の日記に、去辰の年(寛延元年)より和歌道に志し、今年己の年より専ら歌道に心を贅す。



と記した。この兩種の記載は、五鈴氏が全集首巻に正誤した如く、互ひに矛盾するもの、を解するに及ばない。

旅行

五 少年期に於いて、以上の習學とともに、彼の教養の重要な要素となつたものは、旅行である。而してそれは、本期に於いて、十三歳の時を始めてとして、四回に及んでゐる。

吉野詣

第一回の旅行は、寛保二年(一七四一)即ち十三歳の七月、吉野水分神社に詣でたことである。こは、父母が宣長の出生を祈願した折に誓つた所を、果さうとの、母の心しらひに出でたのである。手代二人に伴はれて出立つたのは、七月十四日である。水分社に詣で、歸途には、御岳にも上り、旅程九日間、廿二日無事に歸つた。

上京

第二回は、彼が半元服をした翌年、即ち延享二年(一七四五)十六歳の春の旅である。二月廿一日に出立し、京師に上り、滞在八日、北野天満宮に詣で洛中の名所を見めぐつて、三月三日歸宅した。

江戸行

第三回は、同年四月の江戸行である。十七日出立、翌三年(一七四六)十七歳の三月下旬まで、伯父小津源四郎の家に滞在し、一年餘りゐて、四月九日歸宅した。この滞在は、或は商賣の道など見習ひの爲であつたのであらう。當時は江戸の學界では、加茂真淵の名聲が漸う盛んで、この三年は恰かも、田安侯に仕へた年である。或はその盛名は、この好學の青年の耳にも入つたかも知れぬ。

上京

第四回の旅行は、それから二年を隔てた寛延元年(一七四八)十九歳の四月に爲された。即ち五日出立して、先近江の多賀神社に詣で、上京して朝廷を拜し、又大阪に下り、伏見、宇治を経て再び京にもどり、恰かも入貢してゐた朝鮮人が京を出立するのを觀、旅程約一箇月で、五月六日歸宅した。

彼が、京、大阪、江戸をはじめ、近畿諸地方にわたつた以上、數回の旅行に於いて、少からず見聞を擴め、また幾多の後の研究上に、有益なる知識経験をえたことは、疑ふをえぬ。



この第四回の旅行を了へた年の秋、彼は山田なる紙商今井田某の養子となつて、養家にやられた。これ、本居家には已に義兄定治が後嗣としてあつたからである。然るに彼は翌寛延三年(一七五〇)二十一歳の冬、今井田家を離縁して家に復つた。けだし、商賣の道の到底、彼の堪へうる所でなかつたからである。而してこの離縁を機として、彼の學問に對する熱心は、益々深くなり、日夜學事にいそしんだ。以上を以て、傳第一期は了る。

註

(一) この江戸行のことは、彼は何故か、家の昔物語に記してをらぬ。

(二) 彼はこれについて、家の昔物語「全四」の三七三に一句、「願ふ心に協はぬことありしに、いりて、同三年離縁して歸りぬ。」と記した。

六 傳第二期は、寶曆元年(一七五二)二十二歳から、寶曆十三年(一七六三)三十四歳に至る、十三年間である。この間に彼は、一家の主人となり、

市民となり、夫となり、父となり、また一家の學者となつた。この期における主な事件は、家督相續、京都遊學、歌物語研究及び大成、結婚、及び眞淵との面會である。

寶曆元年(一七五二)二十二歳の二月廿八日、義兄定治が江戸紺屋町に病死した。こゝで彼は、手代佐七を連れて、江戸に下り、兄の跡を整理し、妻子の始末をもつて、七月十日歸途につき、富士に登山し、廿日歸宅した。同時に家督を相續した。

この時に當つて、小津家の資産漸う衰へ、大傳馬町堀留町の二店も已になくなり、わづかに定治が遺産、四百兩の金を、隱居屋孫右衛門の家に預け入れて、その利子で生計を営まなければならなかつた。かつその金子を托してあつた隱居家の將來も、殆むべきものがあつたから、それを見て取つた宣長の母は、將來を慮かり、宣長の到底商人たるに適當でないのを見ぬき、彼を醫師にしよう、と決心した。勝子がその子を知つ



た明は言はずもあれ、隠居屋の將來、果して彼が豫言した通りであつた。偉人の母の例に洩れず、勝子は賢明な婦人であつた。

註

(一) 守貞漫稿に、「三都とも、貸せずして金を貸し借るをすがれといふ。素金の事なり。素金の利息、京阪にては、元金一貫目に一箇月息若干といふ。元銀一貫目に、月息銀十匁を一分の利と云ふ。一分は乃ち百分の一也。元銀一貫に、九匁、八匁を九朱の利、八朱の利と云ふ。……素銀月息、多くは七八朱也。江戸にては、素銀の月息元金廿五兩に若干と云ふ。元金二十五兩に月息金一分を普通とす。乃ち京阪一分の息に當る。」とある。即ち四百兩の利子としては、京阪の率によれば、約三兩餘である。

(二) 宣長が、後年當時を回想して記した文に、「凡て此惠勝大姉は、女ながら男には勝りて、心はかばかしくささく、かゝる筋のことも、いと賢くぞあるしける。かく覺しおきてたるも、しるく、慶程もなく、明和元年に隠居屋の店なくなりて、遣れる資も、皆あづかれる手代が私に引こめてしかば、かのわが家の資も、朝の露さぞ消え失せぬる。我もし、醫師の業を始めざらましかば、

家の産絶はてなました。惠勝大姉の計ひはかへすくも有難く覺ゆる。」

『家の昔』全四の三七三とある。

遊學 堀景山

字次友

七 かくて彼は、母の志によつて、寶曆二年(一七五二)二十三歳の三月、遊學の爲上京した。まづ、醫學の準備として、儒學を修める爲に、堀景山寶曆七年(一七五七)九の門に入り、景山が綾小路室町西の家に寄宿した。景月十日歿於京都六九山は名は正超、字は君燕、また禎助と稱した。朱子派の學者で、藤原惺窩寛永十九年(一六四二)歿、五八の高弟杏庵寛永十九年(一六四二)歿、五八の四世の裔で、安藝侯に仕へ、専ら京都に在住し、折々、廣島(三)に行つた。名家の後として、資性温和、研究の念に富んでゐた學者として、世間からも尊ばれ、かつて徂徠(四)に書をおくつて、古文辭論をたいかばいてから、徂徠(五)とも交りがあつた。彼は儒學に於いて、一代の名家であつたのみならず、また、國文、和歌にも造詣があつて、契沖の學統を引いた樋口宗武と友であつた。宣長は景山のもとに、寶曆二年一七五二三月から、同四年(一七五四)五月まで、即ち二年二箇月、寄宿



堀元厚

して、教を受けた。而して同三年(一七五三)七月から、暫く堀元厚といふ人について、醫書の講義を聞いたが、その元厚は寶曆四年(一七五四)正月歿した。

武川幸順

そこで、同四年五月一日から、典藥武川幸順安永九年、一七の門弟となり、八月、歿五十六の門弟となり、十月十日から、その室町南の家に寄宿した。(五月から十月までは、なほ景山のもとに寄宿してゐたものらしい。)幸順は建徳といひ、南山と號して、京都の人で、小兒科の一名醫であつた。宣長入門の當時は、三十歳の壯年であつた。かくて、幸順のもとに七年(一七五七)十月まで學んだ。要するに、滯京凡て五年八箇月で、前二年二箇月は景山につき、後三年六箇月は幸順についたのである。幸順に寄宿して後も、景山にも學んでゐたらしい。

在京中の漢學

彼が、この在京遊學中に學んだ漢學は、固より一般的普通教育の程度で、讀書力の養成を主としたのであるが、中々堅い基礎を造りえたものと思はれる。その在京中習つた漢籍の、日記中に見えたものを挙げると、

次の如くである。

寶曆二年の條

易經、詩經、書經、史記、晉書、禮記、左傳、五經素讀了(十一月)

同 三年

靈樞及局方發揮 運氣論 脈瀾集 蒙求

同 四年

袁了凡歴史綱鑑 揚子法言 易學啓蒙 李時珍本草綱目

同 五年

前漢書 莊子

同 六年

嬰童百問 千金方 南史 荀子 列子 武經七書

思ふにこれらは彼が教科書として學んだもので、その外に殊に留學の末期に於いては、當時の漢學者の著書なども、多く讀み耽けつた、と察せられる。また、彼が當時の作にかゝる詩文稿詩二十三編、文五編を含むによれば、彼が漢文學における素養の程度も伺はれる。勿論それは未だ幼稚のもの



## 儒生生活

であつた。かつその文章のうちの再復文與藤君の一編を見ると、彼が當時青年血氣時代の儒生生活の如何も、忍ばれる。又これらの詩文を、寶曆三年(一七五三)二十四歳の八月に作られた「尾花が下」といふ六樹園めいた雅文の一編と比して來ると、彼が當時獨學の間に成しえた國文の伎倆の、はるかに漢文のそれに超えてゐたことが知れる。

京都遊學が宣長の學問に於ける意義は、單に儒學、醫學の修得に盡きてをらぬ。否その以上に、一層重要なものがある。それは即ち、彼が愈々生涯の學問に入る端緒を得たのが、實にこの間に爲されたことである。而してそれは、彼がある時機に於いて、契沖の著書を読むをえたことに原因するので、彼が契沖の著書に接するをえたのは、又堀景山によつていある。この點を始め、凡て彼の學歴に關することについては、更に宣長學の研究に於いて詳しく述べる。

また、宣長が京都遊學を研究するについて、吾人の看却すべからざる一事は、丁度その時、京都を騒がした竹内式部の事件である。仁齋が古學の盛時を去る約四十年、東涯已に歿して約二十年、堀河學派の勢力漸

## 京都遊學の他の意義

う衰へた當時、京都學界の一活現象は、開齋學派の流れを吸んで、堂上公家の間に大義名分の説を説き、尊王の思想を鼓吹した、式部の運動であつた。宣長が滯京の頃は、漸うその運動が幕府の注意を惹くに至つた時で、寶曆六年(一七五六)には、式部は第一回の糺門を受けて、獄に座した。宣長は果して思想上この運動に何等の影響を受くることがなかつたであらうか。この問題もまた、吾人が宣長學の研究に於ける一問題である。

## 改姓改名

終りに、この遊學中の事實として、彼の改姓、改名について記さねばならぬ。即ち彼は、寶曆二年(一七五二)堀氏入門と同時に、小津姓を改め、本居姓とした。併し吾人が家系のところに研究した如く、彼は血統に於いて、全然小津氏の出で、本居氏の出でない。かつ本居家は、已に彼の伯父永喜によつて復興せられてゐた。彼が本居姓を名告つたのは、復姓とは言ふものゝ、血統上の意義はない。思ふに彼の好む所にいたのであらう。また三年(一七五三)八月、通稱彌四郎を健藏と改め、五年(一七



五五三月、通稱を舜庵(或は春庵)名を宣長と改めた。彼を眞に本居宣長と呼びうるのは、上京遊學期の末からである。

註

- (一) 「詩文稿」中にも、「奉送景山先生赴藝州」が出てゐる。(全五の一〇一)
- (二) 室鳩巢の先哲叢談中にも、「風景山京師人也。自其先杏庵先生。以儒聞於當時。異子賢孫不墮家聲。至君大振。前烈恢祖業。旁求師友之益。不日。觀其志。將有大成。其德與古人頡頏。於千載之上。視夫世之得小自足。耻下問者。其所見之高下懸絕。爲何如哉。」(卷二)とある。
- (三) 徂徠集卷之廿七に、「答風景山」及びついで一編が出てゐる。
- (四) 徂徠集卷之一に、「風氏在洛爲名家。自其曾祖杏庵先生。受經于欽夫陳公。四世今箕裘。百年弗墜其緒。書香馥郁。吁亦成矣。……予幼聞。杏庵先生于先大夫。遠見君燕。溫恭謙抑。一如所聞。何其流風餘韻。猶尙弗渝乃爾。」(斗之魁序)とある。
- (五) 貳七の二参照。
- (六) こは在京日記に出てゐる。堀元厚といふ人の、如何なる人かは、未だ

- 吾人の知りえぬ所である。景山の縁故の人であることは、推察される。景山と同人でないことは、瘦年月の述ふに徴して勿論明瞭である。
- (七) 幸順の死については、彼が安永九年四月十四日の日記に、「自京都畑柳敬書狀到來、赴曰、武川幸順先生自二月癸丑、三月廿七日物故之由也。柳敬者先生次男、出爲畑柳安養子也。」とある。
- (八) 宣長が在京中の漢學の學習については、鈴屋祭記念(前出)中に、中村久四郎氏の「堀景山傳及鈴屋大人の漢學について」といふ特殊の研究がある。著者がこゝに掲げた日記中の書名は、同論文の引用せる所に由つた。
- (九) 貳七、二の(五)参照
- (十) 詩文稿(全五の一〇六)
- (十一) 堀氏とは、京都留學から歸つて後も、引續いて交際してゐた。日記寶曆十三年、五月九日の條には、京都堀正大大夫の來訪を記し、明和六年、五月十一日には、友人山田氏の死を堀氏より報ぜられたことが見え、天明九年、十一月九日には、「京堀讀助號間澤(景山の嗣)死去」と記してゐる。これらいづれもその證である。



八 彼は寶曆七年(一七五七)二十八歳の十月六日に京都から松坂に歸り、直ちに小兒科醫を開業した。この年、加茂真淵の著、冠辭考(刊行後六年)を得讀して、大に得る所があつた。その後、益々國典の研究に心を潜めた。(而して寶曆八年、一七五八の夏には、一寸上京した。即ち五月廿九日立つて、六月九日に歸つた。如何なる用向であつたかは、審かでない。)家業の傍には、彼は門弟を教へ、自宅に講義を開いた。彼の講義については、後章に詳しく述べる。彼が、歸宅後七八年間の間は、實に彼の歌物語研究の蘊蓄時代と思はれる。

結婚

寶曆十二年(一七六二)三十三歳の一月十七日、彼は同國安濃津の人草深氏の女二民子を娶つて、人の夫となつた。この以前に、松坂魚町村田氏の女を娶つて、離別したと言ふ。同年四月十七日には、母勝子及び妹智遊が善光寺參詣に出立し、剃髮して、六月四日に歸つて來た。

春庭出生

十三年(一七六三)二月三日には、長子春庭三が生れて、彼は人の親となつた。而して彼がその學問の一部を傳へた春庭が生れたと同年に、彼が

真淵との  
會見

この期の學問を大成した、紫文要領、石上私淑言の二名著は成つた。けれど彼が、歸國後八年間の研究の結果である。  
丁度この頃に、彼の學問上注意すべき一事件は生じた。即ち寶曆十三年(一七六三)五月廿五日に於ける、真淵との會合である。  
真淵は、恰かも田安侯の命をうけて、近畿の名勝を探り、途次松坂に泊した。その往路、松坂を過つた時には、宣長は逢ふを得なかつたので、こゝに歸途を待ち受けて、終にこの二十五日の夜、旅宿を訪ひ、かねて著書によつて、思慕の情を捧げてゐた先輩と會談することを得たのである。當時真淵は已に六十七歳、學は老熟の境に入つて、盛名藉甚たるものがあつた。この老大家と、當年小壯の新進氣鋭の學者たる宣長とが相會して、一夜の物語に、互ひに相許し相投するに至つたのである。燈火暗き旅館の一室に演せられた、その一夜の光景は、思ふに國文學史上、他に比類なき光彩ある一幕であらう。その夜宣長は、かねて心中に抱いた計畫を打明けて、古事記研究の志あることを語つた所、真淵は大



にそれを壯んなりとし、そは自分もかねて志した所であつたけれども、その階程として、とりかゝつた萬葉の研究の爲に、手間どつて、今や齡も傾き、日暮れて途遠き有様である、と言つて、宣長によつて、自分の志の大成されむことを喜び、かつ學問には秩序あり次第がある、先初めから究めて行かねばならぬよしを言つて、宣長が年少氣鋭、餘りに才ばしつた傾きのあるのを警めた。宣長は、真淵があつき教に感激して、いよく志を堅くした。真淵は、はからずもこの旅路に、自分の學問を傳ふべき有望の學者をえたことを喜んで、歸京後、門弟を集めてその祝賀の宴を催したと言はれる。宣長の學問上重大な意義のある、真淵との關係はこゝに初つたのである。

入門

而して宣長はこの年の末、終に名簿を送つて、真淵に入門した。この縣門入門を以て、傳第二期は終る。

註

(一) 宣長の妻勝子は、寛保元年(一七四一)十二月十二日に生れた。始めの

勝子の母  
氏子かあや  
32P  
筆

名はたみ、阿漣津の人で、藤堂侯の七醫であつた草深玄弘弘保元年(一七七一)六月六日歿、七十三の女で、最初阿漣津の人藤枝某の妻となつたが、夫に死別し、寶曆十二年(一七六二)正月十七日二十二歳で、宣長に再嫁した。勝子については、多く傳はらないので、その如何なる人であつたかも詳らかでないが、嫁後宣長の日記に兒女を携へては、瀬繁に、或は一週二週、時には一月の長きに涉つて(自分の出産さか實家の吉凶さかの時は固よりその他の時でも)、實家に行つたことが現はれてゐる。宣長の歿後も暫く長らへて(後鈴「前下」全六の一四八、後下「全六」の一八一、稻葉集下「全六」の二七七等にその七十賀、八十賀を祝つた歌が出てゐる)、文政四年(一八二二)三月廿一日、八十一歳の高齡で歿した。圓明院清室惠鏡大姉と戒名を名付け、樹敬寺に、宣長と同じ墓に葬つた。宣長の子女二男三女は、この勝子の生んだ所である。

(二) 臺四の二

(三) 日記に曰く、「廿五日、曇天○嶺松院會也○岡部衛士當所新上屋一泊始對面。」

(四) 真淵がこの時の訓言は、玉時問二の卷に「縣居の大人の御さとしこと」  
として記された。(全四の四九)



(五) このことは、川口常文の傳記に、師岡正胤明治三十二年、一八九九が記した  
ものにあるとして、出てゐる。これは正胤が千隆の門人江口忠房に聞いた  
ので、江口某は千隆の日記によつて之を見た。而して千隆はその祝宴の  
席に列して、眞淵から親しく、宣長を讃ふる言を聞いたので、正胤がこ  
れを聞いたのは、安政三年(一八五六)の頃だ、とある。

(六) 當時の宣長の日記に曰く、「廿八日 朝曇雨天○去五月江戸岡部衛士  
賀茂縣主眞淵當所一宿之節始對面。其後狀通入門。今日有許諾之返事。」

## 第二章 傳第三期第四期

註 本期の研究に於いて、著者の使用したものは左の如くである。

### 一、本居宣長日記

自明和元年(一七六四)至享和元年(一八〇一)

### 二、自撰歌

自明和四年(一七六七)至寛政七年(一七九五)

### 三、鈴屋集

### 四、菅笠日記

### 五、結び捨たる枕の草葉

### 六、紀見の惠

### 七、名草の濱づと

三以下七にいたる貳二の三参照。

### 八、藤のども花

寛政元年(一七八九)名古屋行の紀行。

宣長 自撰

自 著

全 上

全 上

全 上

全 上

本居 大平 著



九、鈴屋大人都日記

石塚龍麿著

宣長が晩年上京の折の日記で、文政二年(一八一九)に刊行された。

十、四條舍記 (帝國圖書館藏)

同じく晩年上京の折、四條で催した歌會、その他の記事。

十一、なげきの下露

宣長が死及び葬儀について、詳しく記し、追悼の歌文をつごへたもの。

十二、山室山日記

植松有信著

宣長の遺骸を山室山にむくりて一週日、墓をもしし間の日記、嘉永三年(一八五〇)刊。

十三、鈴屋翁門人録 (全集首巻に收む)

安永二年(一七七三)宣長四十四歳以後、歿年に至るまでの入門者の氏名を記したもの。

第三期、  
研究時代

一 第三期は、明和元年(一七六四)寶曆十四年(六月廿八日)改元(三十五歳から)天明八年(二七八八)五十九歳まで、滿廿四年間、四期中最も長期である。而も

こは、彼の古學の研究が濫著され、成熟され、數多の著書が發表され、又第四期に於ける發表の基礎が築かれた時代で、全生涯中、最も學事に専心、一意した時代、随つて、しかく長年月ながら、著述講義等の學事以外に於いては、記すべき事件は極めて少いのである。本期に於ける重なる事件は、真淵との交際、及び真淵の死、吉野行、古事記上卷傳の完成、紀州侯の下問に答へたこと、等である。

真淵との  
交際

二 宣長が真淵に會つたのは、新上屋の一夜のみであつたが、その後、真淵が死するまで六年間、絶えず書翰を以て教を受け、或は和歌の添削を乞ひ、或は萬葉はじめ古書の質疑をなし、真淵によつて指導され、啓發されてその研究を進めてゐた。(萬葉の研究については、貳一の三参照)その研究心の熱心に盛んな餘り、時には無遠慮に異見を述べて真淵を苦めた。

真淵も一度宣長を見て、深く許してから、自分の學問を傳ふべき學者として十分敬重しつゝ、少しも惜む所なく、啓導して、或は一方には、



宣長が才氣にまかせて先ばしらうとするのを抑制し、彼をして大成せしむるを忘れなかつた。されば時には、随分手きびしい攻撃をしたこともあつた。ある時宣長が詠草を添削した折の如き、その歌風が宣長本来の新古今風の優麗をむねとしたもので、真淵が萬葉風の理想と全然ちがふので、かゝる邪道に迷つてゐるうちは、到底古學は覺束ないと叱つたりした。要するに、吾人は、この兩學者の間に於いて、ともに高い學問の理想に燃えた二つの精神が、互ひに勵みあつた、美しき貴き友情を認めるのである。新上屋の夜の光彩ある一幕は、決して一時の現象として消えて了はなかつた。

真淵の死

交友六年、真淵は明和六年(一七六九)宣長四十歳の十月晦日、七十三歳を以て江戸に歿した。彼はその訃を、約二箇月を隔てた十二月四日に、楫取魚彦から聞いた。彼の終始簡單なる日常生活の記載のみで、殆んど些かの主觀的感情の言を交へないのを例としてゐる日記は、一句「不堪哀惜」と記した。真淵歿後は、彼は「縣居大人靈位」と自書した掛地を作つて、

忌日ごとに自分の書齋の床に祭つた。或時魚彦が師を慕つた長歌を寄せた時に、彼は返歌に添へて、真淵を忍んで尙長しへに教を受けようと思つてゐた師を失つた哀悼の意を、真淵振の萬葉風の長歌に詠じた。又、天明元年(一七八一)五十二歳の十一月九日には、師が十三回追悼の歌會を催して、手向草一卷をもつし、真淵が學問上に於ける偉大なる功績を讃へた詞書を序に、彼を白玉の光によそへた追慕の長歌を詠じた。

註

(一) 玉勝間二の巻「おのれ縣居の大人の御教をうけしやう」の中に、「そのたび賜へりし御答への書ども、いさ多くつもりにたりしを、一つも散らさでいつきもたりけるを、せちに人のこひ求るまゝに、一つ二つさらせけるほどに、今は残り少くなむなりぬる。」(全四)の五〇)とある。

(二) この真淵宣長の關係は、宣長がその萬葉十三卷條の終に、當時を回想して告白した、「賀茂大人の御前にのみ申す詞」に明瞭に現れてゐる。その文に曰く、「さきく、萬葉集にいぶかしきくさく、書運れて、次々に問明らめつ。やつこが拙き心に、おほけなく思ひ得たる事も、かつく書き交へて、



よき惡しき断り給へど乞ひ申す條の中に、いさ横さまに強ひたる事もこれ  
 かれ交れるによりてなむ、今や後、かくさまのことは謹しみてよき、深く諫め  
 給ふ命をいふりて、いさもくかしこみはぢ思ふが中にも、かの集の巻の  
 つきぐ、かりごもの乱れりしを、淺茅原つばらくにわきまへ給へる大人  
 の、御心に違ひて、これはた、おのが思いたるまに、あだし様に論ひ定めて、  
 試みに見せまつりし事をしも今思へば、いさあやなく、かしこきわざになむ  
 ありけらし。かれ、この詞を捧げて、かしこまり申すことを、平らげくきこし  
 めさむ。かつ疑はしき事は、猶ほらぬちに積蓄へおきて、開く時を待つべ  
 きものぞと教へ給へる、まことに然侍れども、しき疑ひついでのみあらむに、思  
 かなる心はいつか晴るゝ時あらまし。然るに今、大人のみ盛りによつ世の  
 道を唱へ申す世に生れあひて、雲離れそきをる身は、御むしるの端つまに候  
 ひえぬものから、その人数には數へられ奉りて、心ばかりは朝よひ去らず御  
 もとに行きかひつる、百重山重る道の長にはあれど、玉草の便につけて、御訪  
 ひ申す事どもを些かも隠さうこそなく、背の根のねもごろに教へ給ひ覺し  
 給へば、忍ばしき古への事は、増みの鏡に迎へらむ如くに、千早振神の御代ま  
 で、残る限なくなむありける。かゝる幸をしも得てしあれば、愚かなる心に

積る疑は、中々に自らに開けむ折を待つべきにしもあらずと思へば、かつか  
 つも思ひよれる筋は、更に心に殘しおか、おぼしきまにまに論ひ侍るにな  
 む。そが中に、いたく強ひたるさひがめるも多かりぬべけれど、もさより墨  
 染の暗き心には、それはた、えしも辨へ知らねば、よきもあしきも明らけき大  
 人の理りを待て、ひたふるに打まかせてなむ。かれ今行先もなほさるこそ  
 のあらむには、しき思ほしなだめて、罪をかし誤てらむをも、神直日大直日に  
 見なほしました聞なほし給へど、かしこみかしこみ申す。〔賀全四〕の三二九一  
 (三) 沼波瓊音氏著、三紀行(明治四十三年三月刊)中の「御伊勢詣で」に、その詠  
 草が寫し載せてある。眞淵が終に記した評詞に曰く、「是は新古今のよき  
 歌はあきて、中にわるきを眞似むとして、終に後世の連歌よりも、わるくなり  
 しなり。右の歌ども一つも、おのがさるべきなし。これを好み給ふならば、  
 萬葉の御問もやめ給へ。かくては萬葉は何の用にたゝぬ事なり。」と。  
 (四) 彼が明和六年(一七六九)十二月十四日の日記に曰く、「師賀茂縣主去十  
 月晦日酉刻卒去之由、自同門楯取魚彦告之。其狀今日到來不堪哀惜。」と。  
 (五) 宣長が眞淵を忍んだ歌に曰く、「神風の伊勢の海に、よる波の、さこしへ  
 にかくしもがさ、はるくになるがみて、わがたのみ仕へまつりし、賀茂のう



しそのうしはや。」(鈴五「全五」の九八一)

(六) 天明元年十一月九日の日記に「今年十月三十日、岡部大人十三回忌也。

當日者因有障、今夕追慕歌會於當家與行之。」とある。

(七) その長歌に曰く、「眞鴨はかものうしは、玉ならばあはび白玉、うま人のうなげるたまの、眞白玉あやに尊さみ、久方の天みる如く、仰ぎしその白玉の、光はやけにし光はや。新玉のつきかきふれば、今日はもうの月日を、新玉のさしも今年は、小車のめぐりきへゆき、その年に歸りきへゆき、あやにく尊さくありける。まら玉のひかりはや。けにしその光はや。」と。

吉野行

三 此期は前にも述べたように、専心學事に勉めた時代、前後廿五年間わづかに、八回ほど、吉凶の事の爲に津の親族を訪うたこと、四回ほど参宮したこと、二回ほど山田に花見に行つたこと等で、旅行といふ旅行もせず、殆んど足松坂の地を出でなかつたのであるが、この間に、唯一回の、而も彼が生涯の旅行中、最も注意すべき旅行が爲された。即ち安永元年(一七七二)四十三歳の吉野行で、同伴は、覺性院戒言、小泉見

吉野行記

庵<sup>三</sup>稻垣十助、同常松(大平)、中里新次郎の五人で、出立は三月五日、その十四日に歸郷した。彼のこの時の記行が菅笠日記二卷である。

同伴の五人は、いづれも彼の親しい門弟で、まだ幼年であつた大平を除いては、歌文の嗜み深かつた人々であつた。行き廻つた地は、名だゝる古名所、時節は、陽春三月の好時節である。その行遊の興趣、いかに深かつたかは、菅笠日記の温雅な文章を読むものゝ、容易に想像しうる所である。

彼等は五日の朝松坂をたち、春雨のふりそゞ中を阿保山を踏みわけて、伊勢路にいで、その夜をそこに泊した。六日、「沖つもの」名張山を越えて萩原に宿り、初瀬、多武峯を経て、八日、吉野に着いた。花はやゝ遅かつたが、吉水院、寶城寺、藏王堂等、南朝の故跡は若葉にこもつて、彼等が懐古の情はまげかつた。宣長の身にとつては、ゆかりの深い水分神社にも、彼は三十年ぶりで詣でた。その神の恵みによつて世に生れ、人となつた自分の身を思ひ、已になき人となつた父及び母を忍んでは、



敬虔なる彼の心は、切なる感を覺えざるをえなかつた。吉野にとゞまること二日、山深くわけ入つて、西河、大瀧を見めぐり、瀧の上の御船の山をはじめ、幾多萬葉歌人が吟詠の跡をたづねた。十日吉野を立ち、六田を經、壺坂に詣で、見瀬の渡から、三山の間に出た。それから弘福寺、橘寺を訪うて、その日は岡の里に宿つた。十一日、まづ岡寺に詣で、飛鳥の里の田畑の片隅に、荒れ果てた堂して安置された飛鳥大佛を訪ねて、古佛師の鑿のあとを忍び、文武、欽明等の諸帝陵、岡本の宮跡、大原寺等を経て天香具山に上り、その北麓なる高殿村に、持統帝の宮跡を探り、淵瀬常ならぬ飛鳥川に添うて、豊浦の里、向原寺の故地に佛教渡來の昔を思ひ、雷岡の跡を考へ、大輕を過ぎて、三瀬に泊つた。あけて十二日、久米寺から榎原宮の跡、畝火山を過ぎて、四條村に、當時言ひ傳へられた神武陵の信すべからぬことを考証し、それから今井、八木を經、耳無山の麓を歩き、三山の歌、鬘兒の古傳説を思ひ、再び初瀬道に出で、萩原に宿つた。翌十三日、赤羽越を越えて石な原に出で、多氣では多氣御所

の昔を忍んで、古文書を調べて自分の祖先の事跡を考へ、十四日、日程四日で歸り着いた。

彼がこの旅行は、吉野の花見が目的であつたが、その結果は、優に一つの研究旅行であつた。彼がこの旅行によつて、古文明の故地を訪ひ、古典の實跡を踏査して、學問上に幾多の功果をえ、思想上に幾多の影響を得たことは、言ふを俟たぬ。

註

(一) 十助は棟隆と言つて、松坂の豆腐屋で、鈴屋入門録巻頭に出でた故參の門弟で、宣長とは特別に親しかつた。宣長が初期の著、草庵集玉は、きにも序を記してゐる。寛政十二年(一八〇〇)に七十一歳で歿した。(「鈴六」全五の一〇〇三、全上一〇〇四、全上一〇〇五、等参照。)

(二) すが笠日記上に曰く、「漸う人々爲りて、物の心もわきまへ知るにつけては、昔の物語をきゝて、神の御惠のあるかならざりしことをし思へば、心にかけて、朝ごきにはこなたにむきて、ながみつゝ又ふりはへて詣でまほしく思ひ渡りしことなれど、何くれと紛れつゝ過ぎこしに、三十年を経て、今年又

宣長傳、伝トハ一五  
府内ヲ生シテ、路實  
セシ、家トモフミニア  
ザリケシ



四十三にてかく附でつるも、契あまからず。年頃の本意かなひつる心地して、いと嬉しきにも、ちちそふ涙は一つなり。〔全四〕の四四九

(三) この考證は、古事記傳第廿卷の末(全二)の一(二三四)に在り。

鈴屋新築

四 吉野行から歸つて、彼は依然、研究と著述とに心を専らにした。その間、天明二年(一七八二)五十三歳の十月十三日には、二階に書齋の一間を増築はじめ、同十二月上旬に工を終つた。これが有名な鈴屋の名を負うた間で、四疊半の茶室風の小部屋である。その鈴屋と稱せられた故は、床の柱から糸を机の傍へわたし、その糸に、かねて愛玩した鈴を掛けて、仕事に倦んだ折は、その糸をひき鈴をならして慰んだからである。翌天明三年(一七八三)三月九日には、その新しい二階で、臨時歌會を初めて開いた。

研究著述

本期に入つて、彼の研究は、専ら上古の文献にうつり、先寶曆十四年(一七六四)正月十八日の夜から神代紀の講義を開いたのを初めに、その頃

天明四年  
古事記傳

から古事記の研究に志し、明和四年(一七六七)三十八歳の時、彼の大著古事記傳の稿をおこしたのであるが、本期の末、即ち天明六年(一七八六)五十七歳に至つて、その最も主要な神代卷の傳を終つた。本書の完成は、即ち、彼が傳第三期を代表すべき生涯の最大事業である。而して、この著を中心として、前後にその餘材と稱すべき多くの著はなされた。その主なものは、古道に關しては、直毘靈、馭我慨言等、語學その他に關しては、紐鏡、字音假字遺、詞王緒等で、凡て、二十部四十五卷に及び、その間に自宅で門弟の爲に試みた講釋は、殆んど隔夜に涉つてゐた。精勵見るべきである。

彼の學問の成熟とともに、門弟は増加して來た。彼が吉野行の翌年、安永二年には、總數四十三人、而して凡て伊勢の國人であつたのが、この期に終には、百四十餘人に及び、ひとり國內にとゞまらず、近隣諸國に及んだ。

註



(一)「鈴の屋さは、三十六の小鈴を赤き緒にぬきたれて、柱などにかけるきて、物むづかしき折々、引なしてそれが音を聞けば、こゝちもすがくしくおもほゆ。その鈴の歌は、『このへにわがかけて、古へしぬぶ鈴かれの、さやく』かくて此屋の名にもおほせつかし。」(鈴五「全五」の九八二)

(二)「鈴五」全五の九八一にその夜の歌いづ。

紀州侯の  
下問

五 この期の晩年天明四年(一七八四)五十五歳の頃から、會ま凶作が打續いて、諸國の人民が困窮し、彼が所屬した紀伊藩でも、その災を蒙ることが甚しかつた。その漸う回復しかけて來た天明七年(一七八七)五十八歳の暮にあつて、宣長は、紀州侯治貞から、治道經濟の意見を徴せられた。乃ち彼は、秘本玉くしげを著して、之に答へ、添ふるに前年の著玉くしげを以てした。

玉櫛笥は古道の根本を説いたもので、秘本に於いて、その古道に基いた自分の經世説を述べ、當面の下問に答へた。蓋し、治貞の志は、近年の窮災に鑑みて、治道に關する根本の意見を問ふにあつたのである。

領主が、治下もしくは天下の學者に、治道の意見を徴すると言ふようなことは、徳川時代に於いて、儒者にはしばしば見た場合であるが、宣長の如き國學者側の學者に於いては、殊に宣長の前には、殆んどその例を見なかつた。これは、國學者と言へば、たゞ歌文を作るとか古語を註釋することを能事として、政治經濟上の問題などは解らないものゝさされてゐたからである。然るに宣長に至つて、斯くの如きことのおつたのは、宣長の學問が所謂古道として、認められて來た結果で、やがて宣長が社會的に認識されて來たことを示すのである。

註

(一) 當時の紀伊侯、徳川治貞寛政九年一七九七の治績を記した、麟徳記には、「天明四年のころより、凶作打續き、米の價涌貴し、同六丙午年より、ことに甚しく、關東大いに饑饉し、翌七年は、東都にては、金一兩に米二斗を商ひしほどなりとや。凡そ、一石の價、三百八九十匁にもあたることもありしかば、諸國共に困窮し、強暴暴戾の徒諸所に蜂起し、屋をこぼち、倉庫を破却し、米鈴をまきちらしなどするゆゑ、商家大にさわがしかりしかば、和歌山にては、富家毀るゝも



の五六箇所のよし、餘國に比べては穩なりし方なり。」

(二) 又毎年の終りに、米價を記すのを、常とした彼の日記によつて、その前後を見ること、

天明六年十二月

今冬甚暖氣如春、米價次第高直、至十二俵半位、錢五貫七八百文、諸色悉大高直、世上甚困窮。

天明七年正月

舊冬以來米甚高直、當月至十一俵半位、後十二俵餘。

全 四月

去年以來米價次第高直、至今月下旬、金十兩九俵餘位也。麥大抵同直、其外諸色甚高直、世上大困窮。

全 五月

米次第高直、諸國大困窮、但し在々には左ほごにもあらず、町方甚困窮、十日比、大阪大騒動、其外南部若山兵庫尼崎等所々騒動、不遠枚舉、廿日より廿三四日比まで、江戸大騒動、江戸中前代未聞の騒動也。江戸米價一兩に一斗二三升に至る。

全 六月

米價彌高直、至今月末金十兩六俵半位まで上る。一升に付二百三十文位也。前代未聞之高直也。自廿七八日比少々下る。

全 七月

米價十俵位、自下旬新米少々づゝ出。

全 八月

米價至今月段々下る、至下旬廿俵餘也。今年諸國皆豐年、新米追出故也。

全 九月

今月米價十八九俵。

全 十二月

當冬寒氣強、米價次第高直、十六七俵位に至る。錢五貫八九百文。とある。翌年からは、追々順調に復してゐる。

その他の事件

六 終りに、本期廿六年間に於ける宣長が一家の吉凶、その他彼の日記に記された、上記の外の注意すべき事件について記せば、次の如く



である。

明和四年(一七六七)三十八歳の一月には、次男春村が生まれた。同五年(一七六八)三十九歳の一月一日には、母が六十四歳で歿した。同七年(一七七〇)の一月には、長女飛彈が生まれた。安永二年(一七七三)四十四歳の一月には、次女美濃が生まれた。同五年(一七七六)四十七歳の一月には、三女能登が生れ、宣長の子女の凡ては生れた。天明六年(一七八六)五十七歳の十一月には、長女飛彈、草深玄鑑に嫁ぎ、同七年(一七八七)五十八歳の十二月廿七日には、飛彈が男子俊藏を生んで、宣長は人の祖父となつた。その他伯父察然和尚を始め、京都の親友山田周藏、學友谷川士清、舊師武川幸順、親交のある門弟須賀直見、田中道麿、荒木田尚賢等の死の前後して記されたのもこの期である。また田安宗武の薨去を記し、松平定信の參宮に來り、松坂に泊したのを、記したのも、注意される。

歌會

またこの期の間、門弟の家その他で歌會が瀬繁に催されてゐる。嶺松院の會は、前期以來續いてゐた。その外遍照寺の會は、明和元年

(一七六四)に始まり、十七日、二十一日兩日を式日として、第三期前期を通じて催された。門弟須賀直見の家の會は、三日を式日とし、翌明和二年十月から始まり、安永五年(一七七六)十月八日直見が死ぬ前まで續いた。密藏院の會は、直見の家の會を繼いで、安永六年(一七七七)正月から始つた。また稻垣茂穂の家の會は、同六年正月から始つて、十五日を式日として、規則正しく續いてゐた。鈴屋においては、新築當時の會の後、天明八年(一七八八)十一月廿一日に臨時歌會が催されてゐる。

註

- (一) 春村、幼名は春次郎、天明四年(一七八四)九月十五日、十八歳で、津堅町小四氏の養子に行き、名を榮次郎と改めた。詠歌をよくしたと言ふ。天保七年(一八三六)十二月十八日、七十歳で歿した。
- (二) 長女飛彈子は天明六年(一七八六)十一月三日、母の兄の子即ち従兄なる草深玄鑑に嫁いだ。後離縁して、寛政九年(一七九七)正月廿五日、四日市の高尾九兵衛に嫁いだ。
- (三) 美濃子は、寛政三年(一七九一)二月十九日、十九歳で、松坂の縁家、長井尚



明に嫁いだ。天保九年(一八三八)五月十一日、六十六歳で歿した。彼は和歌をよくし、また、書に巧みで、古事記傳のうち、五卷の清書をいした。また、兄春庭の失明後は、その代筆をした。

(四) 能登子は、寛政七年(一七九五)十二月十五日、二十歳で、宣長の門人、山田の人、安田廣津に嫁いだ。享和三年(一八〇三)正月十一日、二十八歳で歿した。

(五) 日記、明和元年三月七日の條に、「去二月廿八日夜戌刻、江戸、察然和尚遷化、六十四歳、母人之兄也。舊冬以來病氣隔症也。曰詳蓮社審譽上人西阿直入察然大和尚。」とある。

(六) (七) (十) (十一) いづれも後出。

(八) 前出。

(九) 直見は鈴門故參の一人で、草庵集玉は、きにも、敗文を記してゐる。宣長の殊に熱心な門弟で、宣長も、深く將來に望を屬してゐたが、學大成するにいたらないで、天死した。彼の歿後、彼の女は、入つて大平の妻となつた。彼の死は、日記、安永五年十月八日の條に、「須賀正藏直見死三十五歳、號本量嘉觀信士」と出でゝゐる。(その他「鈴三」全五の九五六、「全」全九五七、「鈴八」全二〇四六、「鈴九」全二〇五四、玉勝間一卷全四の一六、全二卷全四)

の三九等に出づ。又安永四年(一七七五)、字音假字遣の序を記した。

(三) 明和八年、六月十日の條に、「田安中納言殿右衛門督御逝去之由、自今御停止限不知。

(三) 天明八年六月九日の條に、「今夕御老中松平越中守殿當所御泊也。此殿者、田安中納言殿御子也。因御三家御頼、去年以來御老中ニテ、上座御補佐ハ、當所御泊也。ト被行善政、天下萬民仰其仁風。今度御上京、大阪奈瓦等御巡御參宮也。」又「十一日、今日越中守殿御下向當所御休也。御巡見衆亦當所休與越中守殿同時計會。」

七 第四期は寛政元年(一七八九)六十歳から、享和元年(一八〇一)七十二歳の歿年に至る、十二年間である。これを更に前後の二期に分つ。前期は、古事記傳の完成された寛政十年(一七九八)六十九歳までの九年間で、後期は七十歳後の三年間である。

この期の特色は、社會的活動で、第三期の間に蘊蓄された學問が、益々成熟して、愈々普及せらるゝに至つた。随つて、この期の重なる事件は、



前期  
旅行  
名古屋行

學問普及の爲に、主としてなされた旅行出遊である。またその間に、第三期を引續いて、多くの著作は爲された。まづ前期から述べる。

前期の重要な事件を、前後七回の旅行とする。第一回は、寛政元年（一七八九）六十歳の春の名古屋行である。當時已に名古屋には、横井千秋、渡邊直麿を始め、數人の門弟があつた。この旅行は、これらの門弟の招待によつて、又一つには古事記傳の刊行について、千秋に托する所があらう爲であつた。子息健亭（春庭）門弟稻掛大平を同伴して、三月十九日出立、白子、桑名を経て、廿一日名古屋に着。本町四丁目の書林藤屋吉兵衛に滞在。止ること七日、廿七日歸途につき、名古屋を發して、その日は木田村なる門人大館高門方に泊し、四日市を經、能煩野陵、山邊御井を拜して、四月二日に歸宅した。この旅行は、名古屋に古學の勢力を布くに、大なる効果があつた。即ち、名古屋はじめ近在に、門弟廿餘名を得た。そのうちには、植松有信、加藤磯足等もあつた。

自畫像

寛政二年（一七九〇）六十一歳の八月、自ら畫像を寫して、それに、「まき

上京還幸拜  
觀

鳥の大和心を人とは、朝日に匂ふ山櫻花の歌を題した。その年の十一月、本期第二回の旅行として上京した。即ち、前回の様に健亭、大平を連れ、また荒木田末耦以下の門弟數人同伴、十四日晚發足、關石部を経て十六日入京、三條大橋の伊賀屋に逗留した。廿二日に、丁度去る天明八年（一七八八）に炎上した皇居の新たに造營されて、時の主上の光格天皇が御遷幸されたのを拜觀した。けだしこの度の旅行は、主としてこの盛儀を拜觀するのを目的としたので、かねてより思ひかまへたのであつた。

いよいよ、還幸の盛儀を拜しては、皇室に對して敬虔の志の厚い彼は、感激の情に禁せず、その思ひを一編の長歌に托して詠じた。廿三日、洛東双林寺文阿彌坊に、京都及び諸國の人廿七八人を集へて、歌會を催し、廿五日、京を立つて歸途についた。廿六日、仙洞御所が青蓮院から新造御所に移るのを拜し、廿七日、津に泊し、廿八日、歸つた。旅程凡て半月、京都は先に遊學から歸つて後、寶曆八年（一七五八）二十九歳の折訪うた以



尾張行

名古屋行

來、こゝに卅年ぶりで訪うたのである。正徳八年二月、大津の藩邸に於て、  
 第三回は、翌寛政三年(一七九二)六十二歳の八月十日、健亭眼病の爲、  
 伴つて尾張の馬島氏に治療に行つたことである。第四回は、翌寛政四年  
 一七九二六十三歳の三月に於ける名古屋行である。健亭を連れて、五  
 日に出發した。その夜は神戸に泊して、七日名古屋に着し、  
 廣小路植松忠兵衛宅に止宿した。廿四日まで滞在し、同日午刻發、その夜  
 は木田村の大館氏に泊し、廿五日四日市、廿六日白子に泊し、廿七日歸  
 着した。その名古屋行の結果、名古屋に廿七人の門弟をえた。中に鈴  
 木朗、石原正明等がある。

註

- (一) この時の紀行が、大平の藤のこも花である。  
 (二) 千秋(名古屋の人<sup>和元六年一</sup>)は尾張侯の家老で、古事記傳の出版をもた  
 すけ、宣長の爲には、一面保護者たる人であつた。玉鉦百首解、詩歌論の著  
 もあり、また宣長の古今集遠鏡のうちには、「千秋曰」としてその説が載せ

られてゐる。寛政元年(一七八九)には玉くしげの序を書き、その外神代正  
 韻の跋をかき又古今集遠鏡の序をも記した。

(三) 「鈴三」に曰く「一年、内裏新たに造り出られて移るはせ給ふ御よそひ見奉  
 りに、霜月の頭上りける時、國を出立ける日、日れもすに空の曇りて晴れぬこ  
 とを、伴ひける人のいぶせがりて、しばく言ひあへりければ、『曇るまでかこ  
 つもあやなふりはへて御幸見にゆく冬の旅路を』(全五)の九五五)

(四) 「橋經亮に答へたる書」(鈴七「全五」の一〇二五)

(五) その長歌は、精しくかつ壯麗な叙事の間に、皇室に對する尊敬の至情  
 が溢れて、彼が長歌中の秀逸をなしてゐる。即ち左の如くである。(鈴三「  
 全五」の九八八)

「掛まくもあやに長こき、天皇の神の尊、うつそみの世のこさなれば、わかこ  
 もを假なる宮に、しましくはたましくぬ、然れどもまそみの鏡、明らけき  
 大御心は、天地に照たらはして、咲花の匂ふが如く、盛なる大御代なれば、もの  
 ごさに榮ゆく時に、もろしきの大宮すらを、あふさわに思ひてあらめや、古  
 へのかたち奪れて、まくはしく遣りなさまむき、神なからおもほしめして、大命  
 おほせ給へば、天地の神あひうつなひもろくのよさしの司、手人ども大た



くみらも、大君の勅かしこみ、家忘れ身もたなしらす、ぬば玉の夜霊と言はず、  
いそしみて仕へまつれば、新玉の年だに經すて、玉敷のたひらの宮は、又さら  
に光り照りそひ、玉のごさ遣り磨けれ、玉のごさ照りたる宮の、瑞宮のこの新  
宮に、むくさかにうつりいますと、みまさきのみ供あさもひ、馬車きものさり  
物、まつふさいいさりよろひて、冬ごもり春かたまけし、霜月の今日のたり日  
に、天の原豊さか上る、朝日影匂ひ輝き、大御鳳堂よそひたうして、いやさきに  
いたし車の、その屋形道もてるかに、百たらす八十件の緒は、ゆく服のひきつ  
らなみて、かきかぞふ八くらの用、物申すつかさずきたち、もさしげく春曉花  
の、桃の花名に負ふまちの、其殿の大まへつ君、雲の上ちかきまもりの、まへつ  
君左みざりさ、馬なべて弓さりしたし、二つらに分れ連り、大みさき仕へまつ  
らし、久方のみ空高行く、鷹司殿の命は、食國の事さり持て、天の下申し給ふさ、  
ゆくちかにのらし給へる、を車の牛の歩みの、のどかなる御代の堅めさ、御し  
りへにたし給ひて、玉録の道の長手をたもとほり、大路に出て、鳥がなく東  
に通ふ、白雲の粟田の山を、さき竹のそがひに見つ、たくふすま白川わたり、  
沖にすむ青羽の鳥の、鴨河の清き河瀬に、さす竹の大宮人の、花衣きそなふ袖  
の、色々の影もうつりて、空かぞふ大橋小橋、馬の爪ふみさるこし、つぎく

八 第五回は、翌寛政五年(一七九三)六十四歳の上京である。三月十

にいゆき渡らし、大御城の内に入ち、日の壘の大踏を折れて、日のもとこの道  
ゆきす、み、九重の外の重を過て、中の重に入ますはしに、打あぐるつ、みの  
響、吹なすや笛の調は、み雪ふる冬さも言はず、春日なす空もうちらに、はるく  
にきよのよろしく、水垣の久しく絶し、遠御代の路をたづねて、古に又立かへ  
り、望月のたらはし立てる、大殿を萬世までに、いや高にたかしきますと、新た  
なるその内の重の、大御かご措て入ます、今日の此大行幸をし、天さかるひな  
の圖への、いやしきや御民われらも、風のことほさに聞て、さもしみことのほ  
りまぬ燕て、しよしものいはひをろかみ、天津空仰き見奉ることのたふささ。

反歌

いや高にみつの新宮あきそめて御代は榮えむ萬代までに

(六) 「鈴三」「全五」の九五七

(七) 日記に、儲亭因眼病爲療治行尾張馬島、今日發足。

(八) 「鈴三」「全五」の九五三、「鈴四」「全五」の九七一



日出立して、四月廿九日歸着、旅程凡て四十日に涉つた。今回の上京は、四年前、遷幸拜觀の時に比すれば、已に彼の名聲も一層聞え渡つた事であるから、その在京中の活動も、往時に比して一層盛なものがあつた。彼は三月十日、例の如く健亭を携へて發足した(大平は後から一行に加はつた)。京に上り、まづかねて交のあつた橋、經亮をはじめ、その他門弟に會つた。一兩日滞在の後、十九日、伏見から船で淀川を下り、大阪に行つた。住吉神社、水無瀬の宮跡を見て、廿一日再び京に歸り、門弟澤真風が中長者町油小路東の家に宿つた。四月十二日まで在京、同家に滞在した。その間に、彼は、當時京都の歌壇に盛名のあつた、加茂季鷹、小澤蘆庵、伴蒿蹊等ともあひ、又芝山持豊、真仁親王にも見えた。

季鷹天保十三年一は、當時四十歳であつた。四月廿五日、宣長が加茂社へ詣でた途上で遭ひ、互ひに和歌を詠じあつた。

蘆庵は、一日之を、道の序に、その岡崎の住家に訪うた。「軒近くたてたる松の、一本は 和歌の浦より移した」と聞きて、主人の風流を思ひよせ

蘆庵

松の浦より移した  
和歌の浦より移した  
九十三頁

ニアリ

思はずも都ながらに和歌の浦のけだかき松を今日見つるかも  
又その庵の南の方に向つて、東山の見渡された景色の美しさに、  
見るか君ひんがし山の花の春月の秋をもわがものにして  
と詠んでおくつたのに、蘆庵は、「本居翁の言葉は松の面おこしなめれば、この庵に残してむと思ふ序に」とて、  
春ごとに松は縁も添へてけり年のみ高きわれや何なり  
と答へた。宣長また、  
年のみを何かは言はむ君が名は松より高く聞えける世に  
と詠んだ。けだし蘆庵時に年已に六十五歳。宣長より長すること一歳で、當時京都に於ける新派歌人の棟梁であつたのである。宣長は逗留中、彼に贈るに花橘といふ茶を以てした。又その愈々都を立たうとする折にも、暇乞に行つた時に、蘆庵たちいで、見おこつて、  
來む年を契りおけども老いぬれば今日の別を暫しとぞ思ふ



高 四

宣長は答へて、

暫しとてたちもどまらば松かげに千世も経なましあかぬ心は  
千代八千代長らへ待ちてながらへて我もとひこひ來む年毎に  
と詠んだ。松蔭の契りは終に空しくなく、彼等は後年再び相會した。  
又宣長は所々見物した途に、大佛の近傍に住んでゐた、伴蒿蹊を訪う  
た。蒿蹊時に六十一歳、蘆庵と並稱された京都歌壇の大家であつた。  
宣長歌を詠んで曰く、

ふりはへて訪ひこし我をかきつばた花のたよりと心隔つな

立よりて里の名に負ふ老松の元の心は今日ぞ知りぬる

老松とは蒿蹊のをばなる尼の、七十餘りで蒿蹊とともに住んでゐた  
のに擬したのである。蒿蹊の返歌に、

かきつばた花のたよりと訪はるゝも本のゆかりの色はむつまじ

諸共に長らふればぞ老松の本の根ざしもとひとはれける

宣長とこの老婆とは縁故のあつた間柄で、前の歌の「里の名に負ふ」と

持 豊

は、松坂に擬へたのである。

芝山持豊文化十二年一八一五、歿七四は、當時播磨家中、有名の歌人である。宣長は一  
日之を訪うた。宣長の歌に、

高くとも富士の芝山しばく／＼に仰ぎも見ばや峯の白雲

持豊の返しに、

仰がれむものにもあらぬわが爲は富士の芝山名さへはづかし

これは四月二日のことであつた。又八日には、桃園天皇の養子で、  
寛政二年（一七九〇）の時迄、天台座主であつた、妙法院宮眞仁親王文化二年一八一〇、歿  
八三に召された。この時、

伊勢の海士の思ひかけきや空の海照る日に近き光見むとは

と詠んだ。庭園を拜觀し、その十二景の歌を詠む命を蒙り、種々の  
優遇を受けた。かくの如きは、當時布衣の一學者が、無上の光榮とした  
ところで、この度、芝山持豊及び眞仁親王に見えたのは、彼が學問を以  
て、堂上家に近づく第一歩をなしたのである。而して、彼の爲にその端

妙法院宮



經亮

を開いたのは持豊で、持豊は當時の頑なる公卿中、最も進歩的意見に富んだ人で、學識も勝れてゐた。持豊と彼との交際は、後年まで續いたので、晩年宣長の學問を堂上に普及させるにつけても、持豊の力は、與つて大きかつた。持豊は、彼に對して、保護者たる一人であつた。而して彼と持豊とを近づけさせるのにつけては、橋本經亮がその中介をした。經亮は洛梅宮の祠官で、伴蒿蹊等とも親交あり、有職故實に通じた學者であつた。

かくて、十二日歸途に着いた。彦根、大垣、起、名古屋、木田村、白子、津等を經、いづれも門弟の家に泊し、夜毎に歌會を催して、廿九日歸着した。

當時、京都の學問界は、未だ古學の流行を見るに至らなかつたが、歌壇には、已に、蘆庵及びその一派の清新なる歌風が唱へられ、新機運が動いて來て、堂上歌學の舊壘、漸う崩れようとする時であつた。宣長のこの上京は、未だ旗幟をたて、その學問を主張するには至らなかつたが、その學風が自ら一般の學界に影響感化を與へ、後年のめざましい活動

上京の功  
果

真風

の準備をなしたことは、明らかで、已にその影響の一端は、持豊の如きに現れた。而して彼自らまた、大いに後年の活動の心構をなした。彼が逗留中宿つた門弟、澤真風に一編の長歌を與へて、京都の地が真先に古學の榮ゆべき地でありながら、しかも京人の間に古學の道の開けないのを、慨嘆したのは、やがてその後年の活動の動機を語つてゐる。かつ宣長がこの旅行の結果として、京人の入門九人を數へた。外に伏見、名古屋、大垣等の通過の地にも、入門者が少くなかつた。

註

(一) この時の紀行が、結び捨たる枕の草葉である。その他、この時の記事は、「鈴三」[全五]の九四九、九五一、九五三、九五五、九七二等に出でゐる。

(二) 「橋經亮に答へたる書」[鈴七]「全五」の一〇二五。

(三) 彼の談話を記した歌道御答書中に、門者深田正嗣が、「近來本居宣長が歌を論じ候書ども御座候、右は一覽仕候ても不苦候哉。」の間に答へて、「無遠慮見らるべく候。右講席へ出られ候事も不苦候」とある。

(四) 結び捨たる枕の草葉のうち「全五」の一〇八八にいづ。



九 第六回の旅行は、翌寛政六年(一七九四)六十五歳、三月末の名古屋行である。この度は例の健亭、大平は同伴しなかつた。廿九日出立、神戸、佐屋を経、四月一日名古屋着、逗留廿二日、その間は、大傳馬町通大津町の旅宿で、晝夜講釋し、また、隔日西志賀村の神職、森筑後の宅に出張して、近郷の神職等の爲に、講義をした。廿二日、名古屋を立ち、木田村大館高門の宅に二泊し、四日市津を経て、廿六日、歸つた。

第七回の旅行は、同年十月、紀伊侯治寶(治貞の嗣)の召によつて、和歌山に行つたものである。十二月半に歸着したので、旅程約滿三箇月十一月十一日に及んだ。即ち松坂を立つたのは十日、大和路から吉野川を下つて、和歌山に行き、十一月三日侯に謁し、五日、先大政を講じ、六日に詠歌大概を講じ、翌閏十一月十二日には、八世の主、重倫の母なる清信院殿の吹上の御所に、源氏若菜巻を、又十六日に同處で古今集眞名序を講じた。その間に、こゝかしこの門人の家で、歌會を催した。彼の講義は、その明晰熱達、の故に、いたく上下の感嘆する所となり、侯からは、様々のも

のを下賜され、その功によつて、奥醫師の例に召加へられ加俸された。かくて、閏十一月廿三日和歌山を立ち、和泉の海岸を沿うて、堺から大阪に出で、廿六日上京し、再び芝山芝山に會つた。兩者の間は、先年來その交が親密となり、和歌山滞在中も、持豊は使して旅情を訪うた。されば持豊は、宣長の上京を待つて逢つて、師としてむかへた。

その日、宣長が芝山家を訪うて、おくつた歌に、

世の人も君が言葉をしをりにて踏みは迷はじしき島の道

光見て君が言葉の花の露散れば玉とぞ世にはおどろく

また、學問の精神を示すとて詠んだ歌に、

道とはやたい古へによる波の跡をたづねよ和歌の浦人

あしの葉の近きしをりに違ふなよ古きあどある和歌の浦路を

かくて、十二月一日再び京都を立ち、四日紀州侯が種々の贈物を、光り

ある土産として、

夜光る玉にも勝るたまものをひるの飾とかつぎてぞゆく



と歌つて歸へつた。十日の夜に、門弟をつごへて、その祝賀の會を催し、君恩如海、寄道祝を當座の題として、互ひに歌を詠んだ。

第六回第七回の旅行の結果は、殊に名古屋、紀伊はじめ各通過地の入門者をいだし、その總數が四十餘人に及んだ。第三期以來の門弟を計算すると、四百十餘人ほどに至つた。即ち、第三期末に於ける百四十餘人に比すると、倍加以上である。

註

- (一) 「鈴四」全五の九七一
- (二) この時の紀行が「紀見の裏」(宣長)及び名草の濱づま(大平)である。
- (三) 經亮から宣長の上京を聞いた時の持豐の返事に、「抑春庵翁、昨日上京の由承候。近頃老人の苦勞の儀、殊に失敬の事に候へども、何ぞぞ入來之儀待入候。廿九日午刻後に、入來待入候。萬々面會可申承候。宜々御傳願入候。よくぞく御知らせ忝く存候。仍草々如此候也」
- 又愈宣長訪問の通知を經亮からうけた時、「扱、今日老先生彌御來臨之由、宜々御申入希入存候。自此方こそ參候はづな、先生へ對し近頃失敬之段、宜々

御申入希候。愚昧赤面に候へども、先生に進可給希入候。 摺紙粗吟、拙筆赤面に候へども希入候。宜々願入候」

(四) 「鈴入」全五の一〇四七

十 第七回の旅行を以て、彼の本期初年以來、引續いての旅行は了り、爾後寛政十年(一七九八)に至る四年間は、再び彼の書齋時代であつた。而してこの間に記すべきことは、學校設立の計畫、松平康定との交際、古事記傳終了等を重なるものとなす。

宣長の學問も益々廣まり、諸國から留學に來るものも多くなつたので、宣長は一つには時の國法上、私塾としてはそれらの留學者を長く止めておくことが困難であるから、その不便を救はうとの考へから、また一つには、土地の一般の教育を興さうとの考へから、松坂鈴森の少名彦名神社の地を卜して、學校設立のことを思ひたち、寛政六年(一七九四)六

學校設立の計畫



十五歳の十二月、その願書を奉行に奉つた。その願書の主意によれば、彼はこゝで、單に古學に關する専門的の教授をしようとのみではなくて、儒學、醫學等をはじめ、有益な諸藝を稽古させようとしたので、凡そ一般の市民としての教養を施さうと欲したのである。而してそこに一文庫を附設して、自分の藏書を始め、各家所藏の書籍、石刻の類をも集め、好學の士の研究に資せむとしたのであるが、併し、惜むべし、此舉は成立を見るに至らなかつた。

康定との  
交際

寛政七年六十八歳の八月十三日、松平周防守康定が參宮の途に松坂に泊した。康定は夙に、その臣小篠敏を宣長のもとに、遊學に遣したりして、國學に熱心な人で、宣長は、かねてその名は知つてゐたので、旅宿を訪うて、物語つた。こえて十六日、康定が參宮をへてまた松坂に宿つたのを再び訪うて源氏を講じた。康定はそれからすぐ江戸に行つたが、翌八年七月康定が江戸からの歸途、桑名へ立よつた時、宣長は出むい

て對面した。九日の事である。康定と宣長との交りは、かの持豊に於けると同様に、中々親密であつた。康定が江戸滞在中も、宣長は消息をおくつて、過ぎし松坂での面會を喜ぶよしを述べた。

古事記傳  
終了

彼の大著たる古事記傳は、第三回の旅行と第四回の旅行との間の寛政四年(一七九二)六十三歳の十二月二十日に中卷の傳がなつた。その後六年、即ち寛政十年(一七九八)六十九歳の六月十三日に、下卷の傳成り、起稿以來三十二年を経て、こゝに全部全く終了した。彼は一生の目的を首尾よく成就して、悦びに堪へず、知友にも報じて、互ひに祝つた。而してまた、その年の九月十三夜には、記傳卒業を祝して、鈴屋樓上に歌會を催した。その時、古事記中所載の神人を願つて、題とし、師弟ともに之を詠じたのみならず、その題を諸國の門弟友人にも願つて、その詠を募つた。春海、千蔭その他縣門諸歌人の間にも募られた。

その他の著  
述

第四期に於ける著述は、この古事記傳を中心として、第三期の研究



の結果の發表、また新しい研究の結果等を合せて、總數十三部十七卷が著された。神代正語、出雲國造神賀詞後釋、美濃家づと、大祓後釋、古今集遠鏡、源氏玉の小櫛等である。また、彼の玉勝間の大部、鈴屋集の大半も、この期の中に成された。

講義も引續き爲されたが、自宅に於ける講義は、第三期ほど規則正しくはなされなかつた。また門弟の家、その他に於ける月次の會も、同様で、本期に入つては寧ろ春秋折々の花見月見の會として催された。これら凡て、他に、社會的活動が盛になつて來た結果である。

註

(一) この願書「傳記」に出づ。その中に「少彦名命社地を、當地の學問所に相定、儒學、神學、醫學、歌學等、何に不寄諸道之學問所と仕り、尙又、有益之諸藝に至迄、惣體之稽古場所と相定、追々興立仕度、書籍をも追々相集め、ゆくゆくは文庫等をも造立仕度奉願事」云々ある。

(二) 日記、寛政七年八月の條に、十三日、松平周防守殿參宮、今夕當所泊、夜分至

會講義、歌

旅館而謁「十六日、周防守殿下向、當所泊、自午時至旅館謁、講釋源氏初音卷四枚、終日至夜雜談、夜四時退出、賜銀十枚、曝布二疋、自此方進物、干菓子牛肥折二重、繪扇一枚箱入也、今夕三井高隆、稻掛大平同拜謁、有獻物拜領物干菓子五百疋四」

(三) の二 蕪齋筆記(南葵文庫藏)五、寛政八年の條に、

「去年、濱田侯松平周防守、伊勢御社參ありけるに、本居中衛達被成候よし、八月十三日の事なり。松坂へ御泊の節、同人より繪扇一柄、菓子等獻す。その時の歌、

石見の國濱田の殿の大御神の宮にまうで給ふに詠みて奉る 宣長

民安くはぐむ君がみてぐらほうれしと神もうけざらめやは

その夜八時過まで、物語りあり。歌など添削いたし、耳きこえかれ候故、小

篠大記返詞いたし候よし。濱田之侯も御歌被下、

音にのみきよし鈴屋のをぢにあひてふるごときくぞ嬉しかりける

この歌添削御乞の所、始は「古事さふぞ」とし給ふを、「きく」と直したり。「きく」と言はれば、徹し不申よし、重言なれども、古體の御歌ゆゑ、苦しからずと申しき。御參宮濟、十六日又々松坂にて御使者被下。」

(三) 日記、寛政八年七月の條に、「八日、行桑名、大平同伴。今日四日市泊。九



日着桑名宿辰巳屋。是松平周防守殿歸國明日於當驛爲謁見也。十日、周防守殿謁見數刻物語、夜八時歸宿、七時發。十一日、津泊小百。十二日歸。自周防殿賜銀五枚、越後縮三端、獻物大形書挾以神山

(三)の二「鈴八」全五の一〇三八

(四)「鈴九」全五の一〇六四

(五) 寛政四年十二月廿日のほどに、古事記の中巻の傳書をへぬることを喜びてよめる。

白雪のふるこまふみのしるべして年つもりぬる跡は見えけり「鈴三」全

五]の九五]

(五)の六)、中巻下巻の傳の完了については日記には、記載がない。

(六)の二「鈴九」に、「寛政十一年古事記傳こまづくに書をへけることを「全五」の一〇五四とあるは誤である。

(六)の七)、同年六月十七日に、彼が友人荒木田久老におくつた文の中に、「命のほども危く存じ候とこる皇神の御恵みにかゝり先存命仕候て、生涯の願望成就仕大悦の至存候儀に御座候」とある。

(八) 縣門の同學加藤千陸(臺、四にいづ)も宣長に手紙を贈つて、學界の爲に

その他の事

十一 その他、本期の間におこつたことは、寛政元年(一七八九)二月、六十歳に、六十賀祝賀會を催したと、同二年(一七九〇)六十一歳の二月四

慶賀の意を述べて、「……一、古事記傳全部四十四卷、當六月に御終業、さて、珍重の儀奉存候。此書皇國の至寶に候を、千歳手をつけ候もの無之候處、誠に御大業、此上も無之候儀有はたく候事奉存候。右に付、御配題を遺、委細承知仕候。堂上へ相勸申候貴人をも交申度、在邑の諸候へ申遣候故、少々手間取年内には取集かれ申候。取集次第、早速進上可仕候。私は事代の主を得申候て、詠置候。廿枚不殘配り申候。其餘も有之候へども、古書など取扱候人に無之ては、難動候故、先廿枚にてよろしく御座候。當年は寒威甚強御座候、御自愛可被成候。……十二月十六日」

(九) 日記に曰く、「十三夜宵曇、深夏月清、今夜於當家月見會、是古事記傳終業慶賀會也」

(十) その歌を集へたるものが古事記領題歌集である。門人、猛彦、信友、則有信、重名、千秋、大平、正明、敏、土麿、重年、俊成、龍麿、その他、學友後輩には經亮、康定、久老、保己、成章、春海等出詠してゐる。



日、孫俊藏が病を見舞に津に行つたこと、同年九月六日から八日まで、  
參宮、及び林崎文庫遷宮祝賀會に出席したこと、同三年(一七九一)六十  
二歳の二月十九日次女美濃の長井氏への婚禮、同五年(一七九三)六十四  
歳の六月十一日、印行の書を獻じたことによつて、紀州侯から銀三枚拜領  
したこと、寛政七年(一七九五)六十六歳の二月十六日から、春庵を中衛  
と改めたこと、同四月九日から十七日まで、參宮し、二見に行つたこと、  
十二月十五日三女能登が門弟安田傳太夫へ嫁いたこと、同九年(一七九  
七)六十八歳の正月十六日長女飛彈が四日市高尾氏へ再嫁したことなど  
がある。

以上で第四期の前期は終る

十二 寛政十一年(一七九九)正月から、享和元年(一八〇二)十月歿するに  
至る、約滿二年間の彼の晩年は、彼が生涯の掉尾の活動期で、殊に歿前  
數箇月に於ける彼の上京は、彼の一生に於いて、最もめざましい活動を

## 晩年

### 七十賀

示した。而してその上京に先立つて、二回の和歌山行があつた。

彼は寛政十一年(一七九九)七十歳の正月十六日、七十賀を祝つた。その  
時に、諸國の知友から祝ひの歌を寄せたものが多かつたが、その中には、  
芝山持豊、加藤千蔭、小澤蘆庵等があつた。

### 和歌山行

賀會を終へて五日目の廿一日に、和歌山に向つて旅立つた。初瀬路  
を経て、廿四日に達した。この行も亦、藩侯の召命によつたので、かつは  
年賀の爲である。二月末まで和歌山に逗留して、その十七日には、侯の  
前で、源氏物語を講じた。二月廿四日、和歌山を立ち、歸途についた。廿五  
日、六田から船で吉野に渡り、まだ春ごもれる櫻の木末から、高嶺の白雲  
をのぞみながら、山路を分けて、水分神社に詣でた。安永元年(一七七二)  
の春以來、廿八年を経た。かくて廿八日歸宅した。旅程卅九日にわたつ  
た。この度、大平また同伴して、丁未紀行を記した。宣長には吉野に於け  
る作歌百餘首を集めて、吉野百首が成つた。

### 吉野詣



三月には、鈴屋社中に、宣長の壽を賀する會があつた(十六日、三井氏の別業にて)。四月中には、參宮し(自三日至九日)また四日市に行つた(自十四日至廿日)。六月には、春庭の妻に長女生れ(十七日)草深氏に嫁いだ長女飛彈に、(二十日)男子が生れた。その他記すほどの事件もなく、一年餘は過ぎた。

遺言

和歌山行

寛政十二年(一八〇〇)七十一歳の七月には、彼は遺言書を記して、歿後、葬儀、祭祀、萬端に關することを、事細かに記し、自ら戒名(後世)を定め、外に諡號をも秋津彦美津櫻根大人と定めた。又その冬には、自ら松坂の近郊で、かねてその風景をめで、折々訪うてゐた、山室山の頂に、墓地を定め、こゝで最後の計は悉く成つた。かくて同年も終に近い十一月、また紀州侯の命によつて、老羈、再び和歌山に行つた。これは彼が生涯第三回の、而して最後の和歌山行である。

例の如く大平を同伴して、十一月廿日家を立ち、廿九日到着。和歌山で越年し、逗留三箇月餘であつた。その間殿の命によつて、源氏帯

木卷、古語拾遺等を講じた。昇格して奥詰の列に加へられ、享和元年(一八〇一)七十二歳の二月十二日、和歌山を立ち、大阪、奈良、長谷を経て、三月一日に歸つた。

註

- (一) 「鈴八」全五の一〇四七
- (二) この一年中の間に、彼の晩年の著は、概ねまとめられたのであると思はれる。
- (三) 「鈴九」に「殿の御前にさもらひて、古語拾遺を讀みまうしけるに、日前大神の御はじめの所をよみ申ける時に、いさもくかしこけれと思ひつゞけ奉りける。」として長歌いづ。(全五の一〇五七)

十三 和歌山から歸つて、家に止ること僅か廿餘日、座席未だ暖かなるに違なく、第四期に於ける、第三回の、而して彼の生涯の最後の、上京をなした。彼がこの京都行は、一つは、その地の門下の乞によつてであるが、また彼自らに於いては、兼て古學の普及の淺かつたのを慨いてゐ

最後の  
上京



た京都の地に、生涯の思ひ出に、古學を布かうとの動機に由來してゐた。彼は已に最後の計をも爲した。仕残した仕事をもまどめた。和歌山にも行つて、その務めをも果した。今や何等の心おきもなく、かねての素志を遂ぐべき時をえたのである。

## 出立

家を立つたのは三月廿八日、松坂から随つたのは、安田廣治、村上圓方、植松有信、青木茂房等で、例の大平は、その妻が病んでゐた爲に、加はらなかつた。途中各地の門弟に送迎されて、卅日入京し、四條大路南側の榊屋某の家に投じた。遠州の門弟、石塚龍麿は、四月八日宣長の跡を追つて國を立ち、十三日入京、宣長の逗留中、始終その許にあつて、この度の旅行の記事を擔當した。

## 成績の概観

京都の地は、前年二度訪うて、舊知も多く、また門弟も少くなかつた。かつ一般に古學の機運も熟して、宣長の名聲も知れ渡つてゐた。宣長の上京を聞いて、親しくこの老大家の教に接しようとして、京都はもと

より、わざわざ遠近から集り來るものも多かつた。而して宣長自らが、殊に目的とした所は、専らその學問を堂上に布植せむとするにあつたらしい。その素地は、已に前年上京の際に成されてゐたので、この度の上京に於いて、實にその目的は、立派に實現されたのである。而して古學普及の目的の爲に、その滞京七十日間になされた彼の活動は、實に目覺しいばかりであつた。講演に、堂上その他知己の往訪に、來客にはた歌會に見物に、一日一時も休むことなく、七十二歳の老翁が絶倫なる精力のほどは驚くべきものであつた。その活動の餘り劇甚であつたため、折柄の大暑に、さすが老體のさはりを得て、五月八日の如きは卒倒さへしたほどである。

## 寓居講演

講演は四條寓居では、四月五日から開講し、殆んど連日に涉り、五月廿九日まで續いた。その講じた書は、源氏、自著玉くしげ、萬葉、古語拾遺、詠歌大概等であつた。講演に列した人々のうちには、蘆庵門下の高足、小川布淑や、小野勝義もあつた。從來の門弟は固より、新たに來り列する



見演

ものも多かつた。而して、堂上の公卿及びその縁故あるもので、來聽した  
ものには、綾小路俊資、富小路貞直、日野資愛、錦小路頼理、外山光實、倉橋忝  
行、東寺佛乘院、奈良清淨院、晃演、同弟因瑋、萩原三位の弟南田次郎、下村長門  
守、谷土佐守、日光宮諸大夫、花山院諸大夫等で、これらの人々は、主として、  
萬葉または源氏の講筵に列した。就中綾小路以下の四人は、特に熱心で、  
その請によつて、宣長は大祝詞、神賀詞をも講じた。

以上は寓居での講演であるが、その外に、特筆すべきは、彼が當時公  
卿中の名家、中山愛親、文化十一年、八一四、改、七四に招かれて學を講じたことである。愛  
親は公卿中の勤王家で、有名な幕府の五箇條の難題の解決の爲に江戸  
に下つて、朝威を傷けなかつたのは、この時を去る九年の昔、寛政五年、  
一七九三で、爾來、愛親の盛名は隆々たるものがあつた。この愛親から  
招かれて、學問を講じたことは、宣長はじめ隨行の門弟が、最大の光榮、  
學問の面目これに過ぎずとした所であつた。さてその講演は、四月廿  
八日に始つて、六回に涉つた。その講じた書は、延喜式八の祝詞で、その

中山家に  
招かる

うち一回は神賀詞を詠じた。講演の席に列したものは、主人の卿始め、  
その息忠頼、花山院愛徳、園基理、東園基仲、大炊御門經久、河鰭正三位、前參議  
實祐、今城從四位、下定成、三條公修、野宮正四位、石定業、下從四位、下定靜、花岡  
正四位、下實章、野宮、花園の息等であつた。廿九日初めて中山家に伺候し  
た時の厚遇、主人の公はじめ諸公卿が、立烏帽子に狩衣の姿雅かに、文  
机によつて、宣長の講義を謹聽した光景などは、宣長及び門弟等の感銘  
忘れなかつた所で、その狀況は、細密なる記載に圖解まで添へて、細大も  
らさず、草松坂の自宅に報じた。宣長がその日感激の情を詠じて、愛親に上  
つた歌に、

ほとゝぎす片山かげの忍び音を高き梢に今日ぞもらせる  
とあつた。門弟龍麿は、賀意を一編の長歌に綴つて、「皇國の正しき道  
の古へに歸かへき時來むかへる、嬉しさを師に述べた。

その他、特に表立つた講義の爲とではなかつたが、舊知の芝山持豊  
を始め、妙法院宮、園家、日野家、富小路家、萩原家、外山家、錦小路家等には、

堂上家との  
往訪



幾度か訪問して、古學を説いた。それらの諸公卿もまた、しばしば宣長を訪ひ、或は寓居の講筵に列し、或はそれらに教を受け、交情が淺くなかつた。就中、芝山持豊とは年來の交りもあつたので、往來最も繁かつた。持豊が一日宣長を訪れて詠んだ歌に、

宿とひて君にけふあふ嬉しさは雲晴れて月を見る心地せり  
恙なき姿は今も伊勢島の和歌のまつばら見るにうれしき

とあつたので、宣長は答へて、

年を経て君をあひ見し嬉しさに老木もけふは和歌の松原  
と詠じた。

日野資愛は宣長の教を乞うて、

和歌の浦に行方をたどる海士小舟今より君を楫とたのみむ

と詠み、奈良清淨院の見演は、

和歌の浦にたゆたふ舟の後波をいかゞ分けなばまほにわくべき

と問ひ、

伊勢の海のをうのうらなしうらなくも語らふ中となるぞ嬉しき

と喜んだ。また富小路貞直は、

山城のとはにかつぎて伊勢の海の玉の光にわれもあはぶや

と詠じ宣長の歸國に臨んでは、限りなき哀惜の情を寄せた長歌一編をおくつた。その措辭の整つてゐることは僅に専門家の域に入つたもので、宣長を自らも京師公卿中に古學の普及した一證として喜んだ所である。

これらの公卿等が、階級思想の勢力が未だ甚しかつた當時にあつて、いかにこの老學者の學問に心服してゐたかは、これらの事實に徴して明らかであると思ふ。

宣長が晩年京都公卿間に古學を普及した活動は、實に彼の生涯の大詰の花々しい一幕であつて、それは公卿間に於ける國家的覺醒に一大動力となり、後年公卿間に多くの勤王家を出す素因となつたものである。かつて宣長が京都在學の際、竹内式部が學を公卿の間に講じたことは、已にその折にも述べた所であるが、爾來、こゝに五十年、當時式部に學んだ公卿で、生存して宣長の講義を聞いたものには、日野資枝がある。

堂上に於ける成功



中山愛親も亦當時十七八歳の青年で、式部とは親交のあつた人である。その他の公卿といへども、或は直接、或は間接に、式部の感化を受けた人の子孫であつた。而して宣長がこの京都市教のことは、亦多少とも、式部が故事に觸發される所があつたと思はれる。而してまた、後年、平田篤胤も學問を京都の堂上及び朝廷に傳へむことを企て、宣長の講義をも聴き、その熱心な學徒であつた富小路貞直の手を経て、その著を朝廷に献じた。

註

- (一) この寓居の有様は、玉勝間十三の巻、「おのが京のやどりの事」全四「の三一〇」に記してある。その中に、「家はやゝ奥まりてなむ有ければ、物のけはひうさかりけれど、朝のほご夕ぐれなどには、門に立いでつゝ見るに、道もひろく、はれぐしきに、ゆきかふ人しげく、いさにぎはやしきは、おなかにすみなれたる目うつし、こよなくて、めまむる心地なむしける。」とある。
- (二) これが即ち、鈴屋大人都日記二卷である。
- (三) 「都日記」に「八日。師風の御心地なほ怠たり給はず。朝のほご、圃にもの

し給ひけるに、いっかし給ひけむ。横さまにたふれ給ひければ、人々胸つぶれて、たすけまぬらせて、おましにものしけるに、汗はしととに流れて、目をのみふたぎ給へれば、せん方なくて、さふらふかぎり、御かたはらにつこそひめて、やうと驚かし聞えつゝ、たゞ神を祈り奉る。まばしありて、御目を開き給ひて、夢の様になむありし。今は心地さはやきぬさ、の給ふに、草の葉の色なる人々の顔すこしなほれり。」(上の三十一)

(四) 四月廿九日夕日付にて宣長より大平に附つた書状の一節に「大平公何卒一日も早く御登り待入候。此方様子松坂社申追々歸園にて御聞可被下、尙又植松より日々の様子申參候由に御座候。京地古學も段々おこり候様子にて悦申候。先頃は園大納言殿へ皆々參り、尙又今日は中山殿より請待被下、晝後より參り、暮前に歸り申候。延喜式祝詞講釋いたし、中山殿御父子、其外花山院殿、園大納言殿、東園殿、右之通堂上方御出にて、御聞被成候。其外諸大夫侍に聞人御坐候。中山殿は當時之英雄有識者にて、上にも殊の外御用ひ、凡て堂上に而、一人の御方に御座候へば、今日の講釋別而致大慶候。道々古學堂上へも弘まり可申候。右堂上方何れも聞出被成、しんか、御聞被成候様子にて御座候。又來る四日に參り可申はづに御座候。」とある。



入門

十四 宣長が、主たる目的であつた、堂上方面に於いては、斯くの如き成功を収めた。その他、地下の學問界に於ける成績も、同様に大きかつた。彼が滯京中、名簿をおくつて正式に入門したものは、和泉眞國、田中大秀以下、約十名あつた。その外、單に宣長を訪うて、或は講義を聞き、或は疑を質したものは、いと多く、その中には、已に一家の學を成してゐた人もあつた。蘆庵門下の二高足が、彼の講筵に列したことは、已に述べた。垂加流の神道を信じた人で、彼の古道に歸したものには、清水幸助、南田次郎の如きがあつた。その他、彼を訪問した人のうち、注意すべき名を擧ぐれば、武川幸伯、幸順の子、畑柳敬、武川幸順の次男で、儒者畑柳安の養子、政文

(五) 四條舍記參照。

(六) 「都日記」上の廿六。

(七) 「都日記」下の卅一より卅二。

(八) 星野恒氏著、竹内式部君、事跡考、明治三十二年七月刊、二十三、二十四參照。

虎

蘆菴

景樹とあふ

一〇年、一八櫻田法印宣長の親友なりし山田孟明、後出の子等の舊知、土佐の學者今村樂、又、成と稱す。後年未詳、文化四、玉木葦齋、元文元年、一の子、同愼齋等があつた。而して、凡て彼が風を慕つて諸國から上つて來た人々は、實に近畿以下、關東關西の諸地方、三十餘國の人であつた、と言ふ。  
 先年上京の折、再會を契つて別れた小澤蘆菴は、なほ岡崎の里に晩年をおくつてゐたが、彼は今度もまた、一日(四月十五日)訪れて、互ひに歌を詠み交した。宣長の歌は、

よろづ代も八百萬代も君も我もともにあふひの齡ともがな  
 と言ふのであつた。かの布淑もまた同席してゐた。伴蒿、隣、加茂季鷹とは、互ひに往訪して、舊交を暖め、彼等は、或は宣長が公卿の家で催した歌會に列し、講筵に連つた。

而して、後年歌壇の一大才である香川景樹、天保十四年、一とも會つた。そは、宣長が滯在の終に近い、五月廿八日、泉涌寺に行つた時のことである。景樹は、彼を出迎へて、互ひに歌など詠みかはした。景樹は當時三十



四歳、未だ後年の聲名はないけれども、己に梅月堂から離縁し、京都歌壇における新進の歌人として、人も許し我も許してゐた。固より宣長に對しては、先輩として出迎へたのであらうが、和歌に於いては、なほ自ら持するところがあつたものから、決して純然たる弟子が師に道を問ふといふ態度でもなかつたらしい。

かくて彼は、逗留七十日、六月九日、諸公卿諸門弟の哀惜のうちに、再會を期しつゝ、京都を立つた。なほ暫く滞在の計畫であつたが、折柄の大暑にさすがに疲労もしたし、かつ五月廿九日、末妹壽方の病死したよしの便を郷里からえたので、些か歸期を早めたのである。旅程三日、十二日に限りなき成功をもたらして、恰かも凱旋の將士の如く、歸宅した。彼が傳を飾るべき終りの一幕は、こゝに閉ぢられた。

彼の晩年は以上の如く、専ら講演によつて、學問を普及した時代であ

## 歸宅

## 著述

つたが、なほ、この期に至つて完成された著が少くない。重要なものは、古訓古事記、神代卷、鬘山蔭地名、字音轉用例、歷朝詔詞解等で、總數約十種である。これらの多くの出来たのは、思ふに先に述べた如く、主として、第二回の紀州行と、第三回のそれとの間なる二年に近い月日のうちであらう。

## 註

(一)「都日記」五月廿八日の條に「香川景樹も出向ひて、御旅居に物すべう思ひわたり侍れど、さやかやくと事繁くてなむ。今日こゝへ物し給ふ事を嬉しく思ひ給へて、ふりはへて物し侍り。若し給へる御書などは、早う見奉りて、御かけを蒙れる事少からず。いさめでたくなむと云ふ。師も何くれと語らひ給ひ、人々酒のみ歌ひ罵り、云々(下の廿)」

とある。又景樹の當時の日記に徴すると、「廿八日丸山左阿彌にて鈴のやゆし、「涼しさに夏もやどりも故里にかへらむこそみな忘れけり」と、詠めるをきいて、「たゞひとめ見えぬる我はいかならむ故里さへに忘るてふきみ」宣長のかへし、「故里は思はずさてもたまさかにあひ見し君をいつか



忘れむ」

また六月の條に「七日 本居宣長ぬし鴨河納涼嵯峨山松てふ題にて歌詠  
ませたるに「川上のたゞすの杜の蔭もよし涼みてを來む夜の更けぬまに」嵯  
峨山の松も君にし訪はれずば誰にかたらむ千世のふるごさ」とある。

最後の會

十五 彼は京から歸つて三月の後、丁度九月十三夜の夜、例年の觀月の會を、大平の新座町の別荘で開き、門弟を集めて、歌を詠みあつた。これをその最後の會として、その夜の作、

長き夜の一夜を千世になづらへてあくれば菊の露も消えにき

及び、月を詠じた一首を、その最後の作として、而してまた、その夜の歸途供した門弟服部中庸が、これから公務も暇になつたから、専ら歌文にいそしめようと、言ふのを聞いて、自分の門弟たちには、どうも歌文の道を好む人が多く、自分の學問の本旨である、古學をする人のないのは、歎かばしいことである。夫故に御身も先にも言つた様に、神世の道を明ら

最後の訓

死

葬儀

めることを専らとして、歌文といふごとき末のことに心をとめるな、神世の學問に深く心をとめる者が<sup>ない</sup>から、これを特に御身に依託しておくと、<sup>その</sup>訓誡を、やがて學問上の遺言として、九月十八日から病床につき、病臥十日、廿九日の曉に死んだ、彼が壯年から書記して暫くも休まなかつた日記は、「〇十三夜會新座町大平宅月甚清明」の次に記した、「〇十四日能登田鶴吉歸を最後の筆となした。

かくて、兼て彼自ら事細かに記しておいた遺言書のままに、入棺葬儀のことなど萬事極めて丁重に、いかも少しも華美虚飾に流れることなく、執行はれて、十二月二日、松坂から約二里隔つた山室山の山上に、葬つた。松坂を立つたのは申の刻の比で、白布をもつて装つた輿の傍には、世嗣の春庭が、白綾の衣の上に藤布のひとへを着て従ひ、ついで養子の大平が、熨斗目衣に麻上下を着て歩み、その後から、親族の人々廿人、その次に親近の門弟三十人が、いづれも麻上下を着て、隨つた。凡て見送つた人は、二百五十人と數へられた。魚町の家を離れて數町、



彼の菩提所樹敬寺に寄り、白粉町、瓦町等を経てまもなく道は野中になる。花岡村の岡をひを行つて、山室山を近くのをじやうになつたころは、日が暮れて、人々が振りかざす松火の光が、星のやうに列つた。山室村に着いた時、村長は麻上下を着て出で迎へて、先立つて案内した。村から數町、木立の深く繁りあつた山道を上る。左は溪河で水音がきこえる。まもなく山の中腹にある妙樂寺についた。こゝから再びその寺の門を出で、右手に山を上つて、なほ二町ばかりで、殆んど頂上に近く、木立をうしろにしつらはれた墓所の岩構の中に埋めた。凡て遺言のまゝに、本居宣長之奥墓とのみ自書された四尺許りの墓石を建て、そのうしろには山櫻の一本を植ゑた。

最後の上京の折にも絶えず宣長に侍して、交りの深かつた名古屋の門弟植松有信は、その當日から九日間、妙樂寺にとゞまり、奥つきの傍に庵をたて、こゝにおきふしよて、朝夕さらず師のもとに仕へた。青木茂房、林利長、川村正雄も、ともに止つたが、一兩日で歸り、有信一人

有信

となつた。彼は、或は夜深き山に一人おきてゐて、

御墓もるよはのたもとに木の間より月も問ひくる庵の寂しさを覚え、或は朝ぎよめする帯の手をとめて、

心なく木葉な散りそちりをだにすゑじと思ふ塚のあたりに

と歎き、追慕の情が限りなかつた。七日には尾張の人加藤磯足、美濃の人高橋義方の二人がおくればせに慕つてきて、有信とともに墓に仕へ、八日曉かへつた。有信は、九日つひに勤めをへて山室山を下り、惜しき別れをつげた。

また別に、小津氏の代々の菩提所で、父祖の墓のある松坂町はづれの樹敬寺にも石碑をたて、これには、高岳院石上道啓居士の名を刻し、妻勝子をも歿後合葬し、こゝを家族が常に詣でる所とした。これらも凡て、遺言書に記したところに随つて、執行はれた。

註

(一)「鈴八」全五の一〇三九

樹敬寺



(三) 玉隱、九卷、四一に、仲庸が文政六年(一八二三)九月廿六日に宣長を祭つた祭文中に出づとして記した。また仲庸が大平に駕胤について書きおろした書(殿響相中書にいづ)のうちにも見えた。

111868

### 第三章 宣長の講義

註 本章の研究に使用した主な資料は、左の如くである。

一、本居宣長日記

二、鈴屋大人都日記

三、鈴屋集、玉勝間等

一 彼は、寶曆七年(一七五七)留學を終へて松坂にかへり、醫業を開業した頃から、傍ら門弟を集めて、歌物語の教授に従つたが、同時に、自宅にて、門弟の爲に古書を講義し始めた。

而してその始めは、思ふに、寶曆八年(一七五八)六月から、源氏物語を開講せしにある。爾後、晩年に至るまで、彼は終始一貫その講義を廢しなかつた。

今、その前後四十餘年間にわたる、彼が講義の成績を概観して來ると、自宅で及び門弟の宅に出張して試みた例、日の講義をその主なるものと

講義の概観

講義の始め



して、外に臨時に、各所に出遊して試みた講演がある。まづ例日の講義の結果をみるに、時々多少の變更はあつたが、大體に於いて、書物によつて、一定の式日を定めて、規則正しく試みた。而してその時刻は、始んど凡て、晩食後に定められた。その學課表は、

二、六、十之夜

源氏物語

四之夜

萬葉集

と定めたのを主なものとして、その他の古典を、その他の日(殊に三、八之夜が多い)に充て、講じた。されば、殆んど隔日には何等かの講筵を開いたのである。源氏の式日は始めから終に至るまで(安永九年、一七八〇、以後、十の夜を關いて古今集に充てたのを除いては)、殆んど變化がない。萬葉集の四を式日としたのも、また同じである。

その講せられた書物の種類について言へば、上記の源氏、萬葉を始め、古今集、新古今集を主なものとして、伊勢、土佐日記、枕草紙、百人一首、神代紀、榮華物語、史記、直毘靈、狹衣物語、公事根源、祝詞式等に及んだ。

講義せし書

源氏物語

源氏は、全部三回の講義を終了して、第四回に入つた。第一回は、寶曆八年(一七五八)六月に始まり、明和三年(一七六六)六月卅日に終つた。二、六、十の三日を式日として、前後滿八箇年間に涉つた。第二回は、明和三年(一七六六)七月廿六日に始まり、安永三年(一七七四)十月十日に終つた。二、六、十を式日として、前後八箇年、三箇月に及んだ。第三回は、安永四年(一七七五)一月廿六日に始まり、天明八年(一七八八)五月十日に及んだ。式日は安永九年(一七八〇)までは、従前の如く、その二月以來、十の夜を關いて、二六となつた。前後約十三箇年半に及んだ。而して第四回は、天明八年(一七八八)六月二日に始まり、晩年に及んだ。即ち、寛政七年(一七九五)四月廿九日、藤末葉巻を終つた。式日は二、六である。

萬葉集

萬葉集は、全部二回を終了し、第三回に入つた。第一回は講義で、寶曆十一年(一七六一)五月廿四日に始まり、安永二年(一七七三)十二月十四日に終る。前後十二箇年半、式日は四の夜である。第二回は、會讀で、安永四年(一七七五)十月廿四日に始まり、天明六年(一七八六)十月十二日に



終つた。前後滿十一箇年で、式日は前と同じく四である。而して第三回は、天明六年(一七八六)十月廿二日に始つて、晩年に及んだ。寛政二年以前は、概ね會讀で、その三月十日から講義に變つた。寛政七年(一七九五)六月三日に、第十二卷を了つた(その後記載がない)。式日は従前の如く、四の夜であつたが、後年三に代へられたやうである。

古今集

古今集は、前後四回講義した。第一回は明和七年(一七七〇)二月廿六日に始まり、明和八年(一七七二)十月八日に終つた。式日は八日の夜で、前後一箇年十箇月に及んだ。第二回は、安永三年(一七七四)二月廿四日に始まり、安永四年(一七七五)十月十四日に終つた。同じく一箇年十箇月で、式日は四の夜である(即ち、萬葉の第一回の終了から第二回の開講の間を補充してゐる)。第三回は、安永九年(一七八〇)二月十日に始め、天明四年(一七八四)閏一月十日に終へた。前後約滿三箇年、式日は十の夜である。而して第四回は、寛政四年(一七九二)十月八日に始まつて、寛政七年(一七九五)五月廿六日に終つた。約二箇年九箇月、式日は従前とは違つて、

新古今集

一定せなかつたらしい。

新古今集は、二回全部講了した。第一回は、明和三年(一七六六)三月廿八日に始まり、明和六年(一七六九)十二月四日に終つた。四箇年九箇月で、式日は八の夜である。第二回は、天明七年(一七八七)一月十六日に始まり、寛政三年(一七九一)十月十八日に終つた。三箇年十一箇月で、式日は六の夜である。

神代紀

神代紀は、明和元年(一七六四)一月十八日に始めて、明和三年(一七六六)三月十日に終つた。二箇年二箇月で、式日は八の夜である。

伊勢物語

伊勢物語は、第一回は寶曆九年(一七五九)に講じたが、第二回は寛政三年(一七九一)十月廿八日に始めて、寛政四年(一七九二)九月廿八日に終つた。約一箇年を費し八を以て式日とした。

職原抄

職原抄は、明和八年(一七七二)十月廿八日に始めて、安永二年(一七七三)十一月十八日に終つた。前後滿二箇年餘で、同じく八を式日とした。

百人一首

百人一首は、寶曆十年(一七六〇)十月に改觀抄を講じたのを、第一回とな



し、第二回は、天明四年(一七八四)閏一月廿日に始めて、同三月十日に終つた。式日は十の夜である。

直毘靈

直毘靈は安永三年(一七七四)十月十六日に始めて、十一月廿日に了へた。式日は二、六、十で、日數は一箇月と十日を費した。

榮華物語

榮華物語の校合會讀は、安永元年(一七七二)二月七日に始めて、安永四年(一七七五)六月七日に終へた。前後二箇年四箇月、式日は七である。狭衣の校合會讀は榮華につき、安永四年(一七七五)六月十三日に始まり、安永五年(一七七六)十月五日に終へた。式日は三の夜で、一箇年四箇月に涉つた。この兩者は、門弟須賀直見の宅で催した、なほ榮華の前には、廿一代集を試みた。

狭衣物語

その他

以上を主なものとし、その他土佐日記、枕草紙、史記、公事根源、及び祝詞式等を講じた。その日取は、後に掲ぐる表に出でた如くである。

臨時の講義

これらはいづれも自宅(たまには門弟の宅)に於ける規定の講義であるが、ほかに、或は紀州侯の囑に應じ、或は松平康定に召され、或は晩

時代的概観

年、上京の折、寓居また堂上家で、試みた講義等、しばしばあつたことは、各期の傳にも述べたが、それらの際、講じた所もまた、多くは源氏、萬葉、古今、大祓詞等で、そのほかには、自著玉くしげ、同直毘靈及び古語拾遺、歌大概等であつた。

二 以上は講義した書物の種類から見た概観であるが、次に時代的に傳の各期について、その成績を觀察すれば次の如くである。

第二期

宣長の講義は、上記の如く、第二期の半ばから始まつたのであるが、第二期七年間の成績は、伊勢、土佐、枕草紙、改觀抄を講じたこと、源氏を開講して(寶曆八年、一七五八、六月)、権本巻を終へた(寶曆十三年、一七六三、十月廿九日)こと、萬葉を開講して(寶曆十一年、一七六一、五月廿四日)、第三巻を終へ(寶曆十三年、一七六三、二月廿四日)、第四巻に入つたこと等である。

第三期

第三期廿五年間は、成績最も大である。勢頭先神代紀を開講して之を終了し、相繼いで、源氏の第一回(前期より引續き)、新古今の第一回、古今の第一回、廿一代集の會讀、職原抄、萬葉の第一回(前期より引つ



第四期

い、源氏の第二回、直毘靈、榮華の會讀、古今の第二回、狹衣、古今の第三回、百人一首、公事根源、萬葉の第二回、源氏の第三回を終了して萬葉の第三回、新古今の第二回、源氏の第四回を開講し、萬葉は三の巻を、新古今は秋の上を、源氏は桐壺一卷を終へた。但し、この期後半の初年に位する、天明三年(一七八三)には、同年全く講義を中絶した。第四期に至つては、前期は専ら第三期を引續き、後期は特に京都その他の出遊の地で試みた。但し本期の終りに於いては、日記の記載が粗で、審らかにしがたいものがあるけれども、なほその成績の大體は、之を知ることが出来る。即ち本期の初めに於いて、前期より引つゝいた源氏の帶木巻と萬葉の巻四とを終へ、續いて新古今の第二回を終へ、また伊勢を始めて終了し、祝詞式を講じ、古今の第四回を始めて終了した。その他紀州侯に召されては、大祝詞、詠歌大概、源氏若菜巻、古今俳諧歌、古今序を講じ、又松平康定の爲に、源氏若菜を講じ、それについて、晩年京都では源氏、延喜式、萬葉等を講じた。

彼の講義に見ついでる意

講義ぶり

三 彼が講義そのものに關する意見については、彼は講義と會讀とをわがち、各々その得失あることを論じ、むしろ講義を功果多しとして、それについて復習下讀の必要を説き、また、開書即ち筆記に抱む弊をのべて警めた。彼の門弟に教授するについても、専ら講義を主とし、たまに會讀をも試みた。第二回の萬葉會讀の如きは、中途から變じて、講義にえたらしい。

彼が講義ぶりの如何については、門弟等の間に特に記したものがなから、知るよしが無いが、彼が第四期、第七回の旅行(寛政六年、六十五歳)即ち和歌山にゆいて君侯の前で講義した際の、聴衆の評といふものに、  
 「講義の仕様、辯の分明なると句切等の甚よろしく、若き時よりよく仕なれたる様子と相見えたり。」とある。殊に老年に至つては、固より熟達を極めたであらう。

註

(一) 玉時問八の巻「こうまくくわいごく、開書」[全四]の一七九



(11) 「傳記」にさす。

講義の表

第二期

四 次に、彼が一生の講義の細密の表を、日記その他によつて掲げる。

第二期

寶曆八年(一七五八)二十九歳

六月より

源氏物語開講

寶曆九年(一七五九)三十歳

三月より

伊勢物語開講

寶曆十年(一七六〇)三十一歳

正月より

土佐日記開講

五月より

枕草子開講

十月より

改撰抄開講

寶曆十一年(一七六一)三十二歳

五月廿四日

萬葉集開講

寶曆十二年(一七六二)三十三歳

正月廿六日

源氏物語開講

二月十九日

源氏物語若菜下畢

二月廿二日

源氏講談柏木巻始

四月廿六日

源氏講談柏木巻畢

閏四月廿四日

萬葉集講談第二巻終

同 廿六日

源氏物語講談續巻終

五月廿二日

源氏鈴蟲巻終

八月 六日

萬葉開講

十月廿二日

源氏講釋夕霧巻終

十一月十九日

源氏講釋終御法巻

十二月 四日

萬葉會講年内之終也

寶曆十三年(一七六三)三十四歳

正月十六日

源氏物語開講幻巻中

正月廿二日

源氏幻巻講終

二月廿四日

萬葉第三巻講終



第三期

- 三月 六日 源氏紅梅卷講終
- 五月 廿九日 源氏竹川卷講終
- 八月 廿二日 源氏橘姬卷講終
- 十月 廿九日 源氏稚木卷講終
- 十二月 九日 源氏會講年內之終也

實曆十四明和元年(一七六四三十五歲)

- 正月 十八日 神代紀開講以後八之夜爲定日且又二、六、十之夜源氏四之夜萬葉如此相定一月期
- 二月 四日 萬葉集第四卷講終
- 三月 廿八日 源氏總角卷講終
- 四月 十六日 源氏早殿卷講終
- 同 廿四日 萬葉集第五卷講終
- 十月 六日 寄木卷講終
- 十一月 十八日 神代紀講說上卷終
- 十一月 廿四日 萬葉第六卷講終

閏三月 十二日

講說年內之終

明和二年(一七六五三十六歲)

- 正月 十三日 開講神代紀
- 二月 二十日 東屋卷講終
- 九月 十四日 萬葉第七卷講終
- 十月 十六日 源氏浮舟卷講終
- 十二月 十日 講說年內之終

明和三年(一七六六三十七歲)

- 正月 十八日 開講神代紀
- 正月 三十日 請給卷講終
- 三月 十日 神代紀講終
- 三月 廿八日 新古今集開講此後以八之夜爲定日
- 六月 廿二日 手習卷講終
- 六月 三十日 夢浮橋卷講終右源氏物語講終始於寶曆八年
- 七月 廿六日 戊寅夏至今夕一部五十四帖終業源氏物語開講自桐壺卷始



八月廿四日 萬葉集八卷終  
 八月廿六日 網垂巻終  
 十月十日 帶水巻終  
 同 廿二日 空解巻終

明和四年一七六七三十八歳

正月廿四日 開講萬葉集  
 二月十四日 萬葉集九卷終  
 二月廿二日 少領巻終  
 四月十日 若葉巻終  
 五月十二日 末摘在巻終  
 七月二日 紅葉實巻終  
 八月十二日 菘葉巻終  
 九月三十日 葵巻終  
 十月三十日 御幸巻終

明和五年一七六八三十九歳

四月三十日 御幸巻終

六月廿六日 明石巻終  
 八月廿六日 池原巻終  
 九月十六日 蓬生巻終  
 九月廿四日 萬葉第十卷終  
 十月二十日 繪合巻終  
 十一月十六日 松風巻終

明和六年一七六九四十歳

正月廿六日 開講萬葉之中也  
 二月六日 源覽巻終  
 二月三十日 權巻終  
 四月廿六日 處女巻終  
 六月二十日 玉葉巻終  
 六月廿四日 萬葉集第十一巻終  
 八月十六日 初音巻終  
 十月二十日 御幸巻終  
 十一月十二日 雲巻終



十二月 四日

新古今集講釋全部終日成日成 日成日成 日成日成 日成日成

明和七年(一七七〇)四十一歲

正月 廿六日

開講自今夕古今集講之

二月 六日

常夏卷講釋終

同 十六日

薪火卷講釋終

三月 十二日

野分卷講釋終

三月 廿四日

萬葉十二卷講釋終

四月 六日

行幸卷講釋終

四月 廿六日

藤袴卷講釋終

六月 廿二日

棋柱卷講釋終

閏六月 十六日

梅枝卷講釋終

八月 十二日

藤末葉卷講釋終

八月 廿四日

萬葉第十三卷講釋終

十二月 二日

若菜上卷講釋終

明和八年(一七七二)四十二歲

正月 十八日

開講古今集戀四

五月 二十日

若菜下卷講釋終

九月 十二日

柏木卷講釋終

十月 二日

横笛卷講釋終

十一月 八日

古今集講釋終自去寅年正月廿六日夕所講也

十一月 廿二日

鈴蟲卷講釋終

十月 廿四日

萬葉集第十五卷講釋終

十月 廿八日

職原抄講釋始

明和九年(一七七三)四十三歲

正月 十八日

年始開講職原抄

二月 十七日

自今夕於直見宅榮華物語會讀後以三夜爲定期

但初三者以會故爲五日夜以前廿一代集會讀終

功因是此物語始之也

二月 二十日

夕霧卷講釋終

四月 四日

萬葉第十六卷講釋終

同 十六日

匂宮卷講釋終

同 二十日

紅梅卷講釋終



安永二年(一七七三)四十四歲

- 八月廿二日 竹川卷講釋終
- 十月十六日 續短卷講釋終
- 十月廿四日 萬葉卷十七講釋終
- 十一月廿六日 雜本卷講釋終
- 正月廿八日 年始開講
- 三月十四日 萬葉第十八卷講釋終
- 四月十日 純角卷講釋終
- 五月十二日 學原卷講釋終
- 五月十四日 萬葉第十九卷講釋終
- 十月廿二日 宿木卷講釋終
- 十一月十八日 職原抄講釋終
- 十二月十四日 萬葉集全部講釋終 兼自去寶曆十一年辛巳五月廿四日夜所始也

安永三年(一七七四)四十五歲

- 正月十六日 開樂原氏東風卷之中

安永四年(一七七五)四十六歲

- 正月十八日 史記開講以八之夜爲定日
- 正月廿四日 古今集開講以四之夜爲定日
- 二月二日 東風卷講釋終
- 四月九日 自今夕於瀧谷氏館開講古今集一月中以兩夜
- 四月十日 浮舟卷講釋終
- 六月六日 續短卷講釋終
- 九月二十日 手習卷講釋終
- 十月十日 夢浮橋卷講釋終 抑源氏物語講釋此度第二度也
- 十月十六日 始去明和三年丙戌七月廿六日夜而終今夕
- 十一月三十日 自今夕直見靈講釋以二六十之夜爲定日
- 直見靈講釋終
- 正月廿四日 開講古今集申
- 正月廿六日 自今夕源氏物語開講自登壇始今度第三度也
- 二月二十日 今夕桐葉卷講釋終
- 五月六日 帶木卷講釋終



五月十六日  
六月二日  
六月十三日  
八月二日  
九月十六日  
十月十四日  
十月廿四日  
十一月二日  
十二月十四日

空蟬卷講釋終  
榮、華、物、語、會、讀、校、合、終、業、  
於直見宅狹、衣、校、合、會、讀、始、之、以三之夜  
夕鏡卷講釋終  
若紫卷講釋終  
古今集講釋終、自、去、年、正、月、所、始、也、  
會、讀、萬、葉、集、始、  
末摘花講釋終  
開講史記中  
紅葉賀卷講釋終  
花宴卷講釋終  
葵卷講釋終  
狹、衣、校、合、會、讀、終、業、  
續卷講釋終  
萬葉集第二卷會讀終

安永五年(一七七六)四十七歲

安永六年(一七七七)四十八歲

正月十八日  
二月六日  
三月廿八日  
五月六日  
五月廿四日  
五月廿六日  
七月二日  
八月十二日  
九月十六日  
十月十二日  
十月廿四日  
十二月六日  
十二月十二日  
正月十六日

開講史記中  
須磨卷講終  
明石卷講釋終  
冷標卷講釋終  
萬葉集第三卷會讀終  
蓬生卷講釋終  
繪合卷講釋終  
松風卷講釋終  
薄雲卷講釋終  
權卷講釋終  
萬葉集第四卷講釋終  
乙女卷講釋終  
萬葉集第五卷會讀終  
開講玉鬘卷

安永七年(一七七八)四十九歲



- 四月廿六日 玉璽卷講釋終
- 五月二十日 初音卷講釋終
- 五月廿四日 萬葉第六卷會讀終
- 閏七月十六日 胡蝶卷講釋終
- 八月十日 螢卷講釋終
- 九月六日 常夏卷講釋終
- 十月十日 野分卷講釋終
- 十月十四日 萬葉第七卷會讀終
- 十一月二日 行幸卷講釋終
- 十一月晦日 羅袴卷講釋終
- 十二月十六日 萬葉第八卷講釋終
- 正 月廿七日 今夕開講
- 二 月三十日 橘柱卷講釋終
- 三 月廿二日 梅枝卷講釋終
- 三 月廿四日 萬葉第九卷會讀終

安永八年(一七七九)五十歲

- 四月廿日 藤基業卷講釋終
- 九月十二日 若菜上卷講釋終
- 十月四日 萬葉十卷會讀終

安永九年(一七八〇)五十一歲

- 正 月十八日 開講
- 二 月十日 古今集開講以後以十之夜爲其期年來二十六者爲源氏物語之處自是十之夜者關源氏而爲古今集
- 三 月六日 若菜下卷講釋終
- 八 月十二日 横笛卷講釋終
- 八 月十四日 萬葉十一卷會讀終
- 九 月十二日 鈴蟲卷講釋終
- 安永十年(一七八一)天明元年五十二歲
- 正 月十八日 今日開講
- 二 月廿六日 夕陽卷講釋終
- 三 月十四日 萬葉十二卷會讀終

安永十年(一七八一)天明元年五十二歲



三月廿二日 御法卷講釋終  
 四月十六日 幻卷講釋終  
 閏五月二日 紅梅卷講釋終

天明二年(一七八二)五十三歲

二月四日 今夕開講  
 三月十四日 萬葉集第十三卷會讀終  
 三月廿二日 竹川卷講釋終  
 六月六日 橘板卷講釋終

天明三年(一七八三)五十四歲

(中絶)

天明四年(一七八四)五十五歲

正月二十日 開讀古今集之末  
 閏正月十日 古今集講釋終、自去年秋以來、去年中、讀書講釋、中絶之處、今年正月再與今夕所終也  
 閏正月二十日 百人一首開講  
 二月廿二日 萬葉十四卷會讀終

三月六日 權姬卷講釋終  
 三月十日 百人一首講釋終  
 三月二十日 公事權源講釋始  
 五月二日 萬葉十五卷講釋終  
 五月廿六日 椎本卷講釋終  
 十一月十二日 萬葉集第十六卷講釋終

天明五年(一七八五)五十六歲

正月二十日 開講總角卷之内  
 二月廿三日 總角卷講釋終  
 三月十二日 萬葉集第十七卷講釋終  
 三月二十日 早殿卷講釋終  
 四月廿二日 萬葉第十八卷講釋終  
 十一月二十日 宿木卷講釋終  
 十一月廿二日 萬葉第十九卷會讀終

天明六年(一七八六)五十七歲

正月二十日 開講東屋卷半



二月 晦日 東屋卷講釋終

十月十二日 萬葉集廿之卷會讀全部終

十月廿二日 萬葉集第一卷會讀始

十一月 四日 萬葉集第一卷會讀終

十一月 七日 浮舟卷講釋終

天明七年(一七八七)五十八歲

正月十六日 開講新古今集始自春上講以六之夜爲期

二月十二日 萬葉集二之卷會讀終

四月 十日 蜻蛉卷講釋終

天明八年(一七八八)五十九歲

正月十六日 開講新古今秋上之内

正月廿二日 萬葉集三之卷會讀終

四月 十日 手習卷講釋終

五月 十日 今夕源氏物語講釋全部終業第三度講釋全部終也

六月 二日 源氏物語開講自發端講之第四度也

第四期

九月 十日 桐壺卷講釋終

第四期

天明九年(寛政元年)二七八九(六十歲)

二月二十日 帶木卷講釋終

三月 十日 空蟬卷講釋終

十月十二日 萬葉集四卷會讀終

寛政二年(一七九〇)六十一歲

三月 二日 萬葉集五之卷講釋終此書初會讀

三月二十日 夕鏡卷講釋終

寛政三年(一七九一)六十二歲

二月廿四日 萬葉集六卷講釋終

四月廿六日 若葉卷講釋終但去年至此卷中雖講之新聽衆有之就所望爾後自桐壺講之仍今夕終也

五月二十日 末摘花卷講釋終

九月廿四日 萬葉七卷講釋終

十月 二日 紅葉賀卷講釋終



寛政四年(一七九二)六十三歳

- 十月十二日 花宴巻講釋終
- 十月十八日 新古今集講釋終自去天明七年未也正月十六日夜所抄也
- 十月廿八日 伊勢物語開講
- 十一月廿六日 葵巻講釋終
- 二月廿六日 柳巻講釋終
- 閏二月廿四日 萬葉八之巻講釋終
- 四月十六日 須磨巻講釋終
- 四月十九日 自今夕祝詞式講釋始、以九之夜爲其期
- 五月二十日 明石巻講釋終
- 九月二十日 冷極巻講釋終
- 九月廿四日 萬葉九之巻講釋終
- 九月廿八日 伊勢物語講釋終
- 十月八日 古今集開講
- 十月三十日 繪合巻講釋終
- 十一月廿二日 松風巻講釋終

寛政五年(一七九三)六十四歳

- 正月二十日 開講
- 正月廿六日 薄雲巻講釋終
- 二月二十日 權巻終
- 十月二十日 處女巻講釋終
- 十一月四日 萬葉十巻講釋終
- 十二月二日 玉璽巻講釋終
- 十二月十六日 初音巻講釋終

寛政六年(一七九四)六十五歳

- 二月二日 胡蝶巻講釋終
- 三月廿二日 常夏巻講釋終
- 四月一日 晝夜講釋(於名古屋旅中)
- 六月十六日 野分巻講釋終
- 十月廿三日 大破講釋(於紀州泊寶船前)
- 十一月五日 大破講釋(同上)
- 同 六日 詠歌大板講釋(同上)



開士月十二日 若菜卷及古今集俳諧歌講釋(於吹上御前)  
開士月十六日 古今集真名序假名序講釋(於吹上御前)

寛政七年(一七九五)六十六歳

正月二十日 開講  
正月廿三日 萬葉十一卷講釋終  
三月十日 行幸卷講終  
四月廿九日 藤末葉卷講釋終  
五月廿六日 古今集講釋終  
六月三日 萬葉十二卷講釋終  
八月十五日 源氏初音卷四枚(於松平展防守松坂旅宿)

寛政八年(一七九六)六十七歳

寛政九年(一七九七)六十八歳

寛政十年(一七九八)六十九歳

寛政十一年(一七九九)七十歳

寛政十二年(一八〇〇)七十一歳

正月廿三日 夜開講  
十二月四日 侍講(紀伊殿にて)  
十二月七日 侍講(紀伊殿にて)

享和元年(一八〇一)七十二歳

正月十三日 古語拾遺講(於紀伊殿)  
四月五日 源氏開講桐壺卷(於四條寓居)  
同日 玉くしげ開講(同上)  
同日 帶木卷講始(同上)  
同日 玉くしげ終(同上)  
同日 古語拾遺開講(同上)  
同日 帶木卷講終(同上)  
同日 古語拾遺終(同上)  
同日 空蟬卷講始(同上)  
同日 延喜式八卷開講(於中山殿)  
同日 空蟬卷講終(於四條寓居)  
五月一日 詠歌大概講(同上)



同	二日	夕觀卷開講(同上)
同	四日	延喜式講釋(於中山殿)
同	六日	萬葉第一卷(於四條宮居)
同	十日	源氏開講(同上)
同	十四日	萬葉第一卷講終(同上)
同	十五日	延喜式八卷續講(於中山殿)
同	上	萬葉第二卷開講(於四條宮居)
同	十八日	出雲國造神賀詞講(於中山殿)
同	十九日	夕觀卷講終(於四條宮居)
同	二十日	若紫卷開講(同上)
同	廿三日	延喜式八卷續講(於中山殿)
同	廿四日	萬葉第三卷初講(於四條宮居)
同	廿六日	大政詞開講(同上)
同	上	祝詞講釋(於中山殿)
同	廿八日	大政詞講終(於四條宮居)
同	廿九日	神賀詞講說(同上)

### 第四章 宣長の學徒及び交友について

註 本章の研究に於いて、著者が使用した材料の主なもの、左の如くである。

- 一、鈴屋翁門人錄
  - 二、本居宣長日記
  - 三、鈴屋集、玉勝間及びその他宣長の著書
  - 四、門弟、友人、各自に關するものは畧す。
- 一 彼に親しく教を受けた門人は、總數四百九十一人と數へられる(外に歿後の門人が二人ある)。これらはいづれも、或は親しく彼の講演に列し、或は書翰によつて教を受けたものである。今春庭をも加へて、總數四百九十四人を國別にすれば、大畧左の如くである。

門人錄に教へられた  
不記教へられた

門人  
國別分類

伊勢  
尾張

二〇一

八八



京	二〇
石見	一九
紀伊、遠江各々	一七
美濃	一四
筑前	一一
近江、三河各々	一〇
肥後	八
甲斐	七
土佐、能登、各々	五
越後、阿波、江戸、伊豫、出雲、各々	四
備中、播磨、肥前、駿河、日向、大和、伯耆、各々	三
安藝、志摩、若狹、各々	二
備前、豊前、攝津、出羽、越中、山城、伊豆、豊後、讃岐、信濃、和泉、陸奥、下總、飛彈、羽後、各々	一

これらの中には、單に國籍をその地に有してゐると言ふのみで、實際は、他地に在留してゐたものもある。また、等しく門弟と稱しながら、

四ノ學ノ國

地理的分布

その學才の上下、その宣長に對する親疎の關係の差、等もあるから、單に人數の多少で考へることは出来ないが、現に飛彈、出雲の如きは、わづか一人及び四人であるが、前者には田中大秀、後者には千家清主の如き有力な門弟が出で、併し、なほ、大體に於いて、以上の門弟數の關係は、以て、彼の學派の勢力の分布如何を知ることを得るのである。即ち、この見地に立つて見ると、彼の門弟は彼の郷國伊勢を中心として、尾張、遠江、三河、近江、紀伊、京都京都に於ける堂上家で、彼に教へられてをらぬから、京都はその實一層上位に来るべきである。をはじめ、概して西國に多かつたので、東國には少なかつた。しかもその國數は、四十四箇國の多きにわたり、西海道から奥羽等の遠隔の地にも及んでゐた。これは一つには、彼の郷國が大神宮所在地への通路で、諸國の人士の湊合する地であつた爲である。

次に、以上諸國における門弟が、増加して來た順序を尋ねて、彼の學問の普及した地理的、年代的關係を見て來ると、勿論、特別の場合の除外例をなすものもないではないが、大體から見て、それは當然、近きから遠

門弟増加の年代的概観



きに及ぶ順序を爲してゐる。第一に來るのは、言ふまでもなく伊勢である。安永の終まで、彼の門人は、殆んど伊勢人に限られた。第三期の終天明八年には、門弟の數も百四十七人の多數になつたが、伊勢をのぞいて他の美濃以下十三箇國の門弟の數は、わづかにそのうち卅七人にすぎぬ。而して第三期の終から、第四期の初めへかけての數年の間に、漸う近國に門弟の數が殖えて來た。その第一に來るものは、尾張である。傳第四期を、上區五年間寛政元年—寛政五年、中區四年間寛政九年まで、下區四年間(享和元年に至る)の三區にわけて觀察すると、尾張には第三期以來殖えてきたのが、上區の終りには七十一人になつた、同時に美濃に十一人、次に遠江、三河といふ順序を示し、中區の終りには、遠江が十一人、三河が八人、京都が十五人となり、近江にも殖え、下區に入りて、近江は九人となつた。愈々晩年に近いて殖えて來たのは、紀伊及び京都の門弟である。要するに伊勢を中心として、先尾張、美濃、遠江等の東隣におよび、それから北にむかつて、京都、近江に、また西隣の

松坂

紀州に及んだのが、彼の學問普及の大畧の徑路である。而してその間に、彼の學問は、山陽、山陰、四國、九州等各地に、飛火的に布植された。而してこれらの門弟が、彼の傳各期の旅行に伴つて、殖えて來た次第は、各期の所に述べた如くである。  
而してこれら<sup>(三)</sup>の諸國の門人は、折々松坂を訪問し、或は他家に、或は彼の家に寄宿して、教を受けた。彼によつて古學的運動の故地であつた松坂の地は、また同時に、賑はしき學問の區となつた。

註

(二) 門人錄により(春庭、篤胤、信友の三人をも加へて)、安永二年末の數、及び、同三年から翌年までに、門人の殖えてきた數を、圖別にして記すと、次の如くである。







(三) 寛政二年(一七九〇)に入門した、安藝の人末田芳麿の書翰(鈴屋祭紀念)に出でた新見吉治氏の論文に引用された)による。當時の状況が明らかである、即ちその書翰に曰く、(これは家郷への便りとおもはれる。その確かな年號は知りたいたいが、寛政二年を去る遠からぬほどのこと、察せられる。)[三月廿一日朝大阪出立それより南都初瀬多武峯吉野へ罷越……田丸へ出廿九日内宮拜参仕候……四月朔日内宮出立磯邊朝熊島羽二見見物同三日晝前松坂着すぐに本居へ罷越候處當日は歌會にてるす中事故たづねて早速對面仕候其夜は本居家にて萬葉講釋承り大慶仕候甚先生も御用多に相見え申候此節は肥後熊本よりも儒者二人寄宿被致候外に紀州遠州尾州阿州皆々學者衆の出會にて不怪事にてキモチツブ申候夫故一向何にても頼ノマレガタク御座候委細は歸國の上御咄可申述候四日夜津谷川へ泊り是又世話に罷成申候夫より關へ出……]

二 彼の門弟は、かくの如く諸國にわたり、約五百人の多きに上つたが、その大多數は、單に詠歌を嗜しみ古文に興味を有して、家業の傍らそ

肥後本傳者  
人等初注可

専門家

を楽しむといふきはの人々で、一個の専門の學者として立つたもの、少くとも何等かの著書を成して、學界に貢献した人々に至つては、もとより、約十分の一にも足らぬ小數である。

春庭傳

それらの宣長の學徒の第一として、述べなければならぬのは、言ふまでもなく、彼の長子の春庭である。春庭は寶曆十三年(一七六三)二月三日、宣長が三十四歳の時、即ち傳第二期の終りに生れた。初めは父宣長の幼名をおそうて、健藏と稱したが、安永九年(一七八〇)、十八歳になつた正月二日に、健亭と改めた。幼少の時から、健康でなく、天明三年(一七八三)二十一歳の九月中旬には、病氣にかゝつた。天明六年(一七八六)二十四歳の春(三月十七日から四月七日に至る)には、吉野に花見に行き、奈良大阪を経て歸つた。寛政元年(一七八九)二十七歳の頃には、已に春庭と呼んだ。同年の宣長が名古屋行、翌年の上京にも同伴した。寛政三年(一七九一)二十九歳の八月十日、宣長に伴はれて、眼病の治療の爲、尾



いさ  
ま  
あ

張の馬島氏へ行き十一月十日迄滞在した。蓋しこの頃已に彼の生涯の痼疾をなした眼病は、漸う端を開いてきたのである。寛政四年(一七九二)三月五日の宣長の名古屋行にも同伴したが、宣長とともに歸らず、一人止つて馬島で治療を受け、四月廿三日に歸つた。併し未だそれ程重くなかつたと見えて、寛政五年(一七九三)三十一歳三月十日の宣長の上京にも同伴した。その後終に失明するに至つた爲、寛政七年(一七九五)三十三歳の四月廿三日、母に伴はれて上京し、五月一日着京、中立賣油小路西へ入町南側健屋又兵衛宅に借宅して、針術を稽古した。止ること二年餘、寛政九年(一七九七)三十五歳の八月六日、歸宅して、これから針術を業とした。而してその年の暮十二月十六日、叔父村田親次の四女伊伎天保十二年、一八四一、歿を娶つた。

宣長歿して、養子の大平が家を継ぎ、和歌山に移住した後も、彼は松坂に止つて、後鈴屋社を組織し、門弟を教へ、研究一日も止まず、文政十一年(一八二八)十一月七日、六十六歳で歿した。樹敬寺父母の墓の近傍に

學問

葬られた。その子に伊豆子寛政十一年、一七九九、生、有樂、嘉永五年、一八、があつた。

春庭は身體虛弱、かつ中年に明を失したが、幼時から學問に志し、家學を承けて造詣が深く、殊に語學に精しく、文化三年(一八〇六)四十四歳の二月には、彼の名著詞のやちまたを著して、宣長の語學的研究を大成し、語學上不朽の功を建てた。けだし彼の學風は宣長に比して狭いけれども、深く、精しく、つて、宣長學の純學問的精神は、彼によつて繼承された。その著には、八ちまたをはじめ、詞の通路、門の落葉、後鈴屋集等があつた。宣長の生前には、彼は絶えずその側にあつて、手助けをしたらしく、古事記傳の清書も、一部分彼の爲した所である。失明後は、妻伊伎子、妹美濃子等の補助及び筆寫によつて、添削著書等をなした。

彼また門人多く、宣長の歿後は、植松有信、加藤磯足、石塚龍麿、夏目斐鷹以下、鈴屋の故參は、多く名簿を彼におくつて、門弟となつた。その他、彼自らの門弟として著はれた人々には、足代弘訓安永三年、一七、石川依平安政六年、一八、鬼島廣蔭明治六年、一八、等があつた。享和元年(一八〇一)から文

門人



政十一年(一八二八)に至る門人入門數は、入門錄に記されたところ四百餘人に及んだ。概ね伊勢を中心として尾張、美濃、三河等の近國に分布してゐる。

註

(一) 殊に、儒學が概して、武士の間に限られて普及したのさや異つて、彼の學問は、一般の平民のあらゆる階級に普及された。彼の學徒のうちには、神官、僧侶、武士等は固より、農夫もあれば、商人もある。而して、宣長自らも必ずしも専門の學者を養成するを目的とせず。一般の人民が、家業に日々いそしんでその餘暇に、古學に心を潛めるさいふのを望み、門弟にもすすめてゐた。所謂鈴屋の門に集つたうれらの人々らび、或は田村や十助と云ふ豆腐屋の主人が、みかへのや大平といふ雅かな名を名のるさいふが如く、等しく、「皇國の古へ」といふ理想にあこがれて、古文古歌を作つたり、古道を説いたりして、互に研究し互ひに楽しんで、當時一般の教養を支配してゐた、儒教とは異つた、而してまた、比較的生命のある學問的思想的運動を成してゐたことは、文明史上頗る興味ある現象である。

(二) 伊伎を娶るについて、當時の宣長の日記(十二月十六日の條)は次の如く記してゐる。「伊伎入家。抑此度縁談事、學賢病中約束相定、今夕引取、内々婚儀相結者也。予只今之身分、自町家縁組不相叶故、爲安田傳大夫縁所迎也。然願相濟迄者、極内々也。」

三 春庭が失明してから、宣長は、その到底、紀伊侯への奉公が叶ひがたいのを思つて、寛政十一年(一七九九)、自分の最も古くしてかつ親近であつた門弟稻垣棟隆の子で、同じく門弟であつた稻垣大平、及びその妻を、夫婦養子とした。大平は幼名は茂穂で、天明二年(一七八二)年二十七年(一七六八)十三歳で入門した。父棟隆は豆腐を商ひとしてゐたが、學問に志ふかく、宣長の爲には最も故參の門弟であつた。その縁故からして、大平は宣長に愛されて、宣長が安永元年(一七七二)の吉野行に、十七歳の少年で、父とともに随つたのを始め、その後、宣長が度々の旅行には、

豆腐屋の主人

大平

傳



例の如く伴はれた。かゝる關係で、終に本居家の養子となるに至つたのである。宣長歿後、本居家を冒し、恰かも二度目に迎へた妻が歿したので、津宮崎氏の女を後妻とした。初めは、松坂に住して、和歌山へ通つたが、文化六年(一八〇九)五十四歳の初め、和歌山から歸ると同時に、六月、改めて出立して、和歌山に引移つた。その後もしばしば、故郷松坂をはじめ、京都に出で、學問を講じたものゝ、主としては和歌山にあつて、君侯に仕へた。天保四年(一八三三)九月十一日、七十八歳でその地に歿し、その地に葬られた。

彼も亦、著書が、少くない。神樂歌新釋(文政元年、一八一八、成)、古學要(天保二年、一八三一、成)、玉鐙百首解(寛政八年、一七九六、成)、山常百首(文化十二年、一八一五、成)等が最も行はれてゐる。彼の學問は宣長の繼承で、その學風は、博い點に於いて、宣長に似てゐるが、宣長のやうな獨創はなく、また春庭のやうな専門家的の深さもない。學者としての彼の功績は、單に、宣長の學問を守成して、普及せしめた點にある。人格もまた、温厚、着實

一方の人であつた。併し本居家の後を承けて、相當に諸門弟の間に重んぜられた所を見れば、自ら人を徳化する力があつたのであらう。門人は非常に多く、入門名簿に記すところ、千餘名に及んだ。その分布は、紀伊、伊勢を中心として、近畿その他に及んだ。門弟中その名著れたのは、加納諸平(安政四年、一八一八、歿、五七)、伊達千廣(明治十年、一八七五、歿、七五)、西田直養(元治二年、一八六五、歿、七三)、近藤芳樹(明治十三年、一八八〇、歿、八〇)、長澤伴雄(安政六年、一八一八、歿、五二)等がある。春庭の門下に於ける、弘訓、廣蔭に比すべき學者はないが、諸平、千廣の如きは、卓れた歌人である。

大平に實子、建正(文政二年、一八一八、歿、三二)、清島(文政四年、一八一八、歿、三三)、永平(文政五年、一八一八、歿、三三)及び女子數人あつたが、いづれも天死した。よつて、天保二年(一八三一)に名古屋の人、濱田健次郎を養子として、家を繼がした。内、遠がこれである。内、遠は寛政四年(一七九二)二月廿三日に生れた。幼時から、古學に志して、植松有信、鈴木明、市岡猛彦等の鈴門の、諸高足について學んだ。文政六年(一八二三)三十二歳で始めて紀州に行つて大平(時に六十八歳)にあひ、そ



學問

の後、大平に就いて學んだ。この縁故で上記の天保二年即ち四十歳の三月大平の三女藤子文化元年一八〇〇と婚して、本居家を繼ぐに至つた。専ら紀伊侯に仕へ、侯の命によつて、風土記の編輯を始め、その他の著述に従ひ、晩年、古學館再建について江戸に下り、終に安政二年(一八五五)十月四日、赤坂に病をえて歿した。年は六十四歳である。内遠は家學を承けて古學に深かつたが、その學風は、父祖と異つて、考證の方面を主とし、かつ文學上には、戯作の趣味も淺くなかつた。少時發句を嗜んで、壯年江戸に出た時には、馬琴、三馬、一九、京山、眞顔、雅望等とも交つた。その著には、小野小町考(弘化二年、一八四五)、成、賤者考、和歌浦鶴および古學本教大意(安政元年、一八五四)、成、をはじめ、有職故實に關したものが多し。門弟は、天保四年(一八三三)から、安政二年(一八五五)に至る門人録に記すところ、六百人に近い。近畿諸國を主として、江戸にも多い。そのうちの著名なものは、小中村清矩明治二十八年、一八九五、歿七四、久米幹明治二十七年、一八九四、歿六七、村上忠順明治二十七年、一八九四、歿六七、千家尊澄明治十一年、一八七八、歿七九等がある。内遠の子が今の豊

門人

本居の家學

顯翁である。

春庭、大平在世當時も、兩者相並んで家學を繼承して、その間に別に忌はしい事もなく、その學問は普及されてゐたが、春庭の方には、適當な後繼者が、いでなかつたので、本居の家學は、養嗣子、大平の系統に傳つて來た。

註

(一) 大平が、文化八年(一八一二)四月五日に記した、荒木田末壽に對する陳狀の文(殿譽相半書にいつに、「大平が故翁のあさを繼ぎて、本居氏を襲れるは、學問博識の秀れたる故には、あらず。只、故翁京より松坂に歸郷して、學問古學の業を始められたる時に、始めて門人となりたるは、大平が父棟隆と、大平がいまこ直見と、此二人むつまじき門人にて、さて大平を歌詠みにしこみたるは、直見なり。大平、十二三の年より鈴屋の門人にて、師を思ふ心の他に比ふなく、歌よみ文章かく事を専ら受習たる一小兒なり。これを幸に、紀州の官人も松坂の社中も、思ひこみての事なり。學才の秀英なるを以て、跡を







鈴木朗

藤井高洲

長瀬真中

橋本稻彦

殿村安守  
常久

○七も、宣長の門下であつた。彼は新古今尾張の家づとの名著を始め、制度通考、名目類牋、以下有職故實に關する書また辛酉隨筆、壬戌隨筆の著があつた。次に鈴木朗（九）、名古屋の人。寛政四年、一七九二、は語學に精しく、雅語譯解、雅語音聲考、言語四種論、また源氏玉の小櫛補遺の著があつた。彼は漢學に達した人で、宣長を孔子に比して、尊信した。次に伊勢物語新釋、三のしるべ、松の落葉等の著者で、歌文の學に精しく、古文をよくした藤井高尙（十）、肥後の人。寛政八年、一七九六、入門。天保十一年、一八四〇、歿。七、萬葉佳調の選者長瀬真幸（十一）、八、一七九六、入門。天保六年、一八三五、歿。神代卷正訓、訂正姓氏錄、紫文海士の轉、紫文製錦を著した橋本稻彦（十二）、安藝の人。大阪に住す。寛政十年、一七九七、は、垂加派の學問から、宣長の學問に轉じた人で、若年で死んだが、前途有望な學者であつた。彼は同國の誼で、頼山陽とも親交があつた人である。又野公臺（十三）、東學。天明四年、一八一四、歿。六、八、が讀國意考を著して、真淵の國意考を攻撃したのに對して辯國意考を書き、宣長の學問の立場から、真淵を辯解した。また宣長と同郷の殿村安守（十四）、寛政五年、一七九三、入門。一七、その子常久（十五）、寛政九年、一七九七、入門。一七、の名も、吾人は無

夏目鑿齋

市岡猛彦

田中大秀

視することは出來ぬ。安守は著書はないが、卓見家であつた。常久には、宇津保物語年立の著あり、また佛法を論じた夜舟物語の小著がある。その他國號神考、吉野若葉を著した夏目鑿齋（十六）、遠江の人。寛政十年、一七九八、入門。安政六年、一八五九、歿。八、七、は、萬葉風の名歌人加納諸平の父である。市岡猛彦（十七）、名古屋の人。寛政十二年、一八〇〇、入門。文政十年、一八一八、は、土佐日記追考、ひもかみうつし詞、雅言假字格等の著者で、語學に精しかつた。竹取物語解、土佐日記解、落窪物語解等を著して、古文の學に精しかつた。田中大秀（十八）、飛彈の人。享和元年、一八〇一、入門。弘化四年、一八四七、歿。七、二、は、飛彈に國學を弘めた學者である。

註

(一) 玉勝間一の巻、あかしとをかしと二つある、こさ（十九）、全四の一五、全三の巻、むろの木（二十）、全四の六三、一鈴四、田中道麿頭もろしぬさきとて詠みて遣はしける（二十一）、短歌、全五の九七四、一鈴五、田中道麿がみまかれるを悲しみ詠める（二十二）、長歌、全五の九九〇、一鈴六、告、田中道麿之靈詞、全五の一〇〇六、一鈴六、田中道麿萬葉名所歌抄序、全五の一〇一〇、等、また道麿は詞玉緒の歌を記した。道麿の死については日記、天明四年、十月四日の條に、「今夜戌刻、



尾張田中莊兵衛道慶入道道全死之由、後聞之六十一歳と出づ。

(二) 天明四年(一七八四)漢字三音考に序す。玉勝間二の巻、「五十連音を和蘭人に唱へさせたる事」(全四の五一)、全十の巻、「出雲國なる黄泉の穴」(全四の二四二)、「鈴四」小篠御野が石見國に歸るに「(短歌)〔全五〕の九七〇」、「全五」小篠御野が石見國に歸るに「(長歌)〔全五〕の九八六」、「全五」小篠御野が江戸にゆく別れに「(長歌)〔全五〕の九八八」等。

(三) 「鈴三」服部中庸が家の庭にいさ大きな楓の木のあるをみて「(短歌)〔全五〕の九五二」等。

(四) 「鈴三」上野介波邊重名が、豐前國に歸るに「(短歌)〔全五〕の九五三」、「鈴五」波邊重名が豐前國に歸るに「(長歌)〔全五〕の九八六」等、又寛政二年(一七九〇)取次備言に序を記した。

(五) 「鈴三」尾張の名古屋に、植松の有信が家に日比やどれりけるを、歸るなりに主人によみておくりける「(短歌)〔全五〕の九五三」等、有信は文化九年(一八一二)に玉勝間の後書を書いた。

(六) 「鈴三」小國秀穂、石塚龍麿など物學びに来ぬたりける遠江國にかへるに「(短歌)〔全五〕の九五三」等。

(七) 前出、「鈴六」石塚龍麿古言清濁考序「〔全五〕の一〇一三」、玉勝間四の巻「古言清濁考の事」〔全四〕の九六等。

(八) 「鈴四」尾張の國人石原將聽、年頃のからぶみ學びの心をかへて、わが古へ學にもむきて、ものをしへににょれりける。おのれ名兒屋より國にかへる馬のはなむけにから文作りておくりける答へに「(短歌二首)〔全五〕の九七三」等。

(九) 答問錄の跋を記し、また寛政四年(一七九二)取次備言に序を記した。

(十) 「鈴九」消息文例の序「〔全五〕の一〇六〇」等、又彼は、宣長の玉の小櫛の序を記した。

(十一) 「鈴六」長瀬眞幸萬葉佳調序「〔全五〕の一〇一一」、「鈴三」肥後の國人長瀬眞幸が、此里に暫し物しける。みな月のついたり江戸に物するによみて贈りける。「(短歌二首)〔全五〕の九五三」、「鈴四」長瀬眞幸、二年つゞきてさぶらひきけるが、肥後國に歸るに「(短歌一首)〔全五〕の九七一」等。

(十二) 彼は葛花の跋、眞曆不審辨の序、を記した。また「鈴九」橋本稻彦が安藝國にまゐるに「(短歌)〔全五〕の一〇五三」等。

(十三) 「鈴九」殿村安守、やまひ十日あまり江戸にゆく時、來む年の春歸らむと



いふに。〔短歌〕〔全五〕の一〇五三等。

〔古〕「鈴九」尾張の市岡猛彦が國の君の嘉の仰こゝを蒙りける喜びに、詠みて  
おくる。〔短歌〕〔全五〕の一〇五四等。

歿後の門人

五 以上の門弟のうちでも、石原正明、藤井高尙、橋本稻彦、石塚龍麿、田中道麿、鈴木朝、田中大秀の如き、いづれも一家の學を爲して、それ〴〵宣長の學問の各方面を繼承した學者であるが、さらに大きな學徒は、著書によつて、彼の教を承けた所謂歿後の門人の間に出でた。その所謂歿後の門人は、二人ある。伴信友と平田篤胤とである。

伴 信友

信友は、若州小濱の人で、安永二年(一七七三)二月廿五日に生れた。少時、學に志してから、宣長の著書を読んで、啓發され、かつそを得ることになり、自寫して、宣長の學風を慕つてゐたが、終に、享和元年(一八〇二)廿九歳の時、宣長の門下で、信友の舊知であつた、村田春門伊勢白子の人。天明四年、一七八四、入門。天保

七年、一八三六、歿七二の紹介で、名簿を松坂に送つた。然るに、それが達した時には、宣長が已に死んでゐたので、乃ち歿後の門人とはなつたのである。彼は弘化三年(一八四六)十月十四日、京都で七十四歳で歿した。信友は近代考證學の大家で、その博識にして、精微な學風は、殆んど倫を絶してゐる。その著書は、數百部に餘り、隨筆には、比古婆衣、語學の著には假字本末、歴史に關するものには長等の山風等、いづれも名著である。彼は一種の見識を持って、門弟はとらなかつた。信友はその學問の本領に於いては、或は宣長の正系を傳へた學徒と稱しえないかも知れぬ。しかし、その學風の廣く、精しい點に於いては、宣長を承繼いであると言へる。

平田篤胤

他の一人の平田篤胤は、自ら宣長の學問の眞の精神を承けて、宣長の學問を大成したことを以て、任じた人で、ある意味に於いては、確かに宣長の最も主な學徒と言へる。篤胤は、秋田の人で、安永五年(一七七



いふに。〔短歌〕〔全五〕の一〇五三〕等。

〔古〕「鈴九」尾張の市岡猛彦が國の君の慕の仰こゝを蒙りける喜びに、詠みて  
おくる。〔短歌〕〔全五〕の一〇五四〕等。

歿後の門人

五 以上の門弟のうちでも、石原正明、藤井高尙、橋本稻彦、石塚龍麿、田中道麿、鈴木朝、田中大秀の如き、いづれも一家の學を爲して、それ〴〵宣長の學問の各方面を繼承した學者であるが、さらに大きな學徒は、著書によつて、彼の教を承けた所謂歿後の門人の間に出でた。その所謂歿後の門人は、二人ある。伴信友と平田篤胤とである。

伴 信友

信友は、若州小濱の人で、安永二年（一七七三）二月廿五日に生れた。少時、學に志してから、宣長の著書を読んで、啓發され、かつそを得ることになり、自寫して、宣長の學風を慕つてゐたが、終に、享和元年（一八〇一）廿九歳の時、宣長の門下で、信友の舊知であつた、村田春門伊勢白子の人。天明四年一七八四、入門。天保

七年一八三六、歿七二の紹介で、名簿を松坂に送つた。然るに、それが達した時には、宣長が已に死んでゐたので、乃ち歿後の門人とはなつたのである。彼は弘化三年（一八四六）十月十四日、京都で七十四歳で歿した。信友は近代考證學の大家で、その博識にして、精微な學風は、殆んど倫を絶してゐる。その著書は、數百部に餘り、隨筆には、比古婆衣、語學の著には、假字本末、歴史に關するものには、長等の山風等、いづれも名著である。彼は一種の見識を持して、門弟はとらなかつた。信友はその學問の本領に於いては、或は宣長の正系を傳へた學徒と稱しえないかも知れぬ。しかし、その學風の廣く、精しい點に於いては、宣長を承繼いであると言へる。

平田篤胤

他の一人の平田篤胤は、自ら宣長の學問の眞の精神を承けて、宣長の學問を大成したことを以て、任じた人で、ある意味に於いては、確かに宣長の最も主な學徒と言へる。篤胤は、秋田の人で、安永五年（一七七



六〇八月廿四日に生れた。初めは大和田氏で、名を正吉と稱して。幼時開塾學派の儒者、中山青枝に教へられた。寛政七年(一七九五)二十歳の時、繼母の虐遇に憤慨して、家を去り、江戸にいでたが、或は大八車の車力となり、或は消防夫となり、或は炊夫となり、非常な困苦のうちに、非常な勉強を以て學問に志した。寛政十二年(一八〇〇)備中松山の城主板倉侯の藩士、平田篤樞の養子となつてから、少しは衣食の煩ひを去つて、學に専らなるをえた。翌享和元年(一八〇一)二十六歳の時始めて宣長の著書に接し、その古道の精神に動かされ、七月、入門の名簿をおくつたけれども、信友と同様に、宣長が生前に間に合はなかつたので、歿後の門人となつた。爾後益々宣長の著書によつて國學を研究し、傍ら儒佛の學から、蘭學に至るまで涉獵した。生活上には絶えず慘憺たる窮乏に苦んでゐたが、その間に追々學問を成して、享和三年(一八〇三)二十八歳の時、太宰純の著書に慨して呵妄書を著したのを初め、鬼神新論(文化二年、一八〇五成)、古道大意、俗神道大意、漢學大意、佛道大意、醫道大意、

入門

著述

上京

中庸にあふ  
和歌山、松坂  
なごふ

歌道大意、玉多須喜(文化八年、一八一―成)、ついで、古史成文、古史微(文化八年、一八一―稿成)成り、靈能異柱を書終へ(文化九、一八一―二)、同時に、古史傳の稿を起した。かくて三大考辨々(文化十一年、一八一―四成)古史傳第五帙(文政元年、一八一―八引續いて成つた。而してその間に、門弟を教へ、神祇伯白川家の命をうけて神職に古學を教授し、漸う學風一世を動かすに至つた。文政六年(一八二三)四十八歳の時、主家から暇を乞ひえて上京し、かつて宣長に教を受けた富小路貞直を介して、古史成文、古史微以下の主著を朝廷に献じた。その時また、彼は偶々當時六十八歳であつた服部中庸に遇つて、中庸から宣長の遺誠を聞き、いよいよ宣長の學問の精神のあるところを理解した。その歸途、和歌山に廻り大平を訪ひ、又松坂に春庭を音信れ、山室山にも詣で、積年の思慕の情を致した。江戸に歸つてから、益々古道の發揚に勉め、或ひは吉田家の師となり(文政六年、一八二三)、或ひは前田、田安、細川、諸侯の顧問となり(天保九年、一八三八)、門弟の數は益々殖えた。著書はこの間に古史傳初代の傳



歸郷

の完結(文政五年一八二二)印度藏志の脱稿(文政九年一八二六)を始め、續々成つて公けにされ、門弟の數は益々増加し、その儒佛を排斥して古道を主張する學風が、いよいよ天下を風靡するに至つたので、終に幕府の憚るところとなり、林大學頭の避忌によつて、郷里秋田に歸された。即ち天保十一年(一八四〇)六十五歳の六月である。かくて、我道の終に伸ぶべきしるしとてしばしかゞまる時もありけりなど詠じて、心ひそかに再舉の時を期してゐたが、まもなく病氣となり、天保十四年(一八四三)九月九日、六十八歳で歿した。その辞世に、思ふと一つも神に勤めをへす今日やまかるかあたらこの世をどある。

篤胤と鈴門

篤胤が自信に強く、卓見のあまり獨斷に流れた學風と、傲岸不屈の性行とは、鈴屋門下中にも、或者は激賞し、或者は排斥し、毀譽相半する有様で、かの中庸の三大考について、篤胤之を補正して靈能眞柱を著した時の如きも、大平及びその派と篤胤との間に論争を生じ、鈴門

篤胤と宣長

のうちにも、中庸はじめ高尙の如きは篤胤に左祖し、之に反して、村田春門、荒木田末壽、城戸千楯等は彼に反對し、爲に鈴屋門下は二派に分れむとする有様であつた。併し、篤胤が博覽卓識の點に至つては、鈴門中何人も之を承認してゐたので、大平も十分彼を敬重し、殊に篤胤が上京の歸り、會見を乞うた時も喜んで承諾し、胸襟を開いて語り、篤胤に與ふるに宣長の遺物を以てした。かくの如くであつたから、篤胤は自ら鈴門中の重きをなし、彼自らも宣長の學問の本義を繼承して、春滿眞淵以來の古道の大成者を以て居り、殊に宣長に對しては、殆んど一種の宗教的とも稱すべき確信を以て、自分の靈が宣長の靈と相冥契し、宣長の靈によつて使役されて、古道の爲に盡すべき使命を授けられてゐると考へた。彼が山室山を訪うた時、捧げた歌に、  
教子の千五百とおほきなかゆげにわを使ひますみ靈かしこし  
わがたまは人は知らずもたまちはふ大人の知らせば知らずともよし



とある。宣長の學問が、篤胤によつて如何に繼承され、如何に發展したかは、別の問題であるが、篤胤が宣長の學徒中最も大人な人であることは、否定するをえぬ。五百餘人を數へた篤胤の門弟中、傑出したものは、六人部是香文久三年、一八 大國隆正明治四年、一八 鈴木重胤嘉永三年、一 佐藤信淵嘉永三年、一八 等である。

その他、宣長の著書を読み、彼の學風に歸まされて、國學に志し彼を師として崇んだ人で、彼の學徒と稱しうべき學者はもとより少くない。國語學の大家たる鶴峯三、戊申安政六年、一八 儒學から出で、後には歌林緊要考の如きを著した岡部東平安政三年、一八 などは、その著しいものである。

註

(一) 卷二、十五の(二)参照。

(二) 篤胤の、當時、鈴屋學徒の間にちける、地位や評判は、比較的中立の態度に立つて批評した、殿村安守の左の文調に、よく現れてゐる。(三)は殿村相

戊申  
春平

牛書に出でたので、安守が人から篤胤に對する見解如何を問はれて答へた文の一節である。

「彼人の著書一覽仕候いづれも古人未發の卓論どもにて面白く心よく世話にいはゆるかゆき所へ手の届くやうな心地實に英雄のわざと感じ入候事に御座候其中貴意の如く古書を自分勝手へ引つけたる處に餘りけやくと論じ定めたるゆゑ古傳は謬誤多きものになり定りたるやうにていかゞと存じられ候但彼人の料簡には古傳うたがはしき事ころ疑をつたふべけれかれとこれと相てらして疑ふまじき事發明したらむに猶疑ひ傳ふべき事にはあらじ體に定めて傳へんぞ本意なるべきこの料簡にて古史成文は著したるにやあらむかの題目より自己勝手と見る所が彼人では確かに考定めたる卓見なるべしげに卓見によりて見る時には古書中の疑氷解せられていかにもさも有げに面白く心よく覽え候その説の當不當は暫く差もき古書をかみ評いて一成文を爲さむこそ實に當時の一人箕田(此處は) 稱譽すきたりとも申すべからず感すべき英雄なりと奉存候……平田は當時鈴門の猛虎なり惜いかなそれをば伏する人なし藤垣内翁春鹿翁などの手にもあひがたし其手に合はぬは箕田がいふ及ばざるにはあらすその學



びの本意たがへばなるべし……兩翁こそ故翁の正しき學風より見候は  
い琴柱腰のそしりあらむか知らず本意の所成べけれ平田の學風故翁の本  
意古學の正學も申がたし奉存候されども奇翫家なり異端なりさうさ  
みそいらむい又ひが言なるべしうさみそしるはいはゆる負惜みなるべし」  
(三) 海西漫錄に曰く、「予十五六の頃……この頃すでに本居鈴屋翁の著  
作をも往々讀みて切りに伊勢路のゆかしく思はれければ。」

(四) 歌林聚要考の始め參照。

學友

山田孟明

七 最後に、宣長の學友について述べる。傳第一期即ち幼時に於ける  
交友については、知るべきものがない。第二期に入つては、京都遊學  
中の詩文稿に、關澤屈、草敬所、巖榮良、松田氏、藤文與、田中允齋等の名が見  
えてゐる。同學の儒生であらうが、如何なる人か審かにしがたい。ま  
た交りも繼續してをらぬ。外に京都在學以來の友人としては、山田周  
藏(又孟明)及び堀正大夫、河原崎周庵等があつた。寶曆十二三年の交に、  
前後して、參宮の途次、松坂を訪うてゐる。就中親しかつたのは周藏で、

彼は宣長遊學中、多少先輩として指導の地位にあつた人で、和漢の學に  
達してゐた。その交際は、その後相續いて變らなかつたが、明和六年  
(二七六九)即ち眞淵が死んだ同年の五月十一日に、周藏は死んだ。宣長  
はその晩年、上京の折に、その卅三年遠忌に當つて、周藏の子榎田法印  
に追悼の歌をおくつた。

註

- (一) 在京日記、九月廿七日の條に、「田中允齋自難波上京矣寄宿先生家」。
- (二) 日記、寶曆十二年三月九日の條に、「晴天○京山田周藏下向、今夜一宿」、  
同じく十日の條に、「山田氏趨山田、已刻半發足」、同じく四月四日の條に、  
「山田周藏自山田還、昨夜一宿、今日回趨京」。
- (三) 寶曆十三年五月九日の條に、「京都、堀正大夫河原崎周庵同伴參宮被立  
寄」。
- (四) 「鈴五」全五の九九三に、「京の山田孟明が許より書をこせたるに、返りこ  
さすまでよみたる。」としてかゝげた長歌に、「思ひいづみの杣人のたづき  
も知らず奥深き書、道の芝打ばらひ、先にたちつゝいゝるべせし、露の恵は今更



びの本意たかへばなるべし………兩翁こそ故翁の正しき學風より見候は  
い、學柱膠のそしりあらむか知らず本意の所成べけれ平田の學風故翁の本  
意古學の正學とも申がたしと奉存候されども奇耽家なり異端なりさうさ  
みそいらむい又ひが言なるべしうさみそしるはいはゆる眞惜みなるべし」  
(三) 海西漫錄に曰く、「予十五六の頃………この頃すでに本居鈴屋翁の著  
作をも往々讀みて切りに伊勢路のゆかいしく思はれければ。」  
(四) 歌林緊要考の始め參照。

學友

山田孟明

七 最後に、宣長の學友について述べる。傳第一期即ち幼時に於ける  
交友については、知るべきものがない。第二期に入つては、京都遊學  
中の詩文稿に、關澤屈、草敬所、巖榮良、松田氏、藤文與、田中允齋等の名が見  
えてゐる。同學の儒生であらうが、如何なる人が審かにしがたい。ま  
た交りも繼續してをらぬ。外に京都在學以來の友人としては、山田周  
藏(又孟明)及び堀正大、河原崎周庵等があつた。寶曆十二三年の交に、  
前後して、參宮の途次、松坂を訪うてゐる。就中親しかつたのは周藏で、

彼は宣長遊學中、多少先輩として指導の地位にあつた人で、和漢の學に  
達してゐた。その交際は、その後相續いて變らなかつたが、明和六年  
(二七六九)即ち眞淵が死んだ同年の五月十一日に、周藏は死んだ。宣長  
はその晩年、上京の折に、その卅三年遠忌に當つて、周藏の子樞田法印  
に追悼の歌をおくつた。

註

- (一) 在京日記、九月廿七日の條に、「田中允齋自難波上京矣寄宿先生家」
- (二) 日記、寶曆十二年、三月九日の條に、「晴天○京山田周藏下向、今夜一宿」、  
同じく十日の條に、「山田氏趨山田、已刻半發足」、同じく四月四日の條に、  
「山田周藏自山田還、昨夜一宿、今日回趣京」
- (三) 寶曆十三年五月九日の條に、「京都、堀正大、河原崎周庵、同伴參宮被立  
寄」
- (四) 「鈴五」全五の九九三に、「京の山田孟明が許より書をこせたるに、返りご  
さすまでよみたる。」としてかゝげた長歌に、「思ひいづみの柚人のたづき  
も知らず奥深き書、道の芝打ばらひ、先にたぢつといひるべし、露の惠は今更



に、かけても言はず、……しきしまや、大和も、こい、數々の、君が言葉の、玉  
い、いげ、あくるも知らず、圓居せし」とある。

(四)「鈴三」全五の九五に、「京より、山田孟明が久しく曾せて、書おこせける  
中に、きむの琴ひきならふよし言へる返り事に、」として、「思ひやれつてにの  
みきく琴の緒の絶えてあひ見ぬ心ほそきを」とある。

(五)(三)に出した長歌のあとに、その長歌をちくちうと思つてゐるうちに、  
病死の報に接したとある。それは日記に徴すると、明和六年(一七六九年)五月  
十一日の條に、「今日京都山田周齋死去之由後日自齋氏被計之」とある。

(六)「鈴八」全五の一〇四六に出づ。又、「都日記」上の廿三、五月九日の條にも、  
「この孟明といひしは、師のきみはやう京におはせしほど、またなくむつひ給  
ひたりし人なりとぞ。子の法印(庵田)は、知恩院の坊官なりとや。」と記し  
てゐる。

谷川士清

八 第三期に入つて有名な諸家との交際が始まつた。第一に述べべ  
きは、谷川士清安永五年、一七七〇の交りである。士清は宣長に先立つ二十  
年に生れた。宣長と同國阿濃津の人である。宣長が彼と交るに至つた

草深士清

のは、宣長の妻の家が士清の家と近鄰の交があつた緣故で、その初め  
て交を結んだのは、明和二年(一七六五)宣長三十六歳の時である。士清は  
當時五十餘歳、すでに日本紀考證の名著が成つて一家であつた。即  
ち宣長はその年の八月二日に、草深氏を介して一書をおくり、自分の  
學問の由來主義を述べて、私かに士清が神典の解釋の未だ留意を脱せ  
ず、その學問の意に滿たないのに疑を挾んだ。けれど、士清は玉木葦齋の  
門人で、垂加流の學風を受け、和歌もまた、堂上家の門人で、宣長が新  
學問の精神から見ればあきたらぬ所が多かつたのである。さればこれ  
を端緒に、相交つて後も、始めは宣長は、士清が儒學的臭味あるを喜ば  
なかつたが、その交が漸う深くなるにつれて、終に互ひに相許すに至  
り、後には和訓栞及び古事記傳の原稿を、出來たことに、互ひに示しあ  
ふやうになつた。而して和訓栞出版の時には、宣長はその序を記した。  
士清は安永五年(一七七六)、宣長が四十七歳の十月十日に、六十八歳で  
歿した。要するに士清に對しては、彼は始め先輩として、後には友人と



荒木田尙賢

同じく近郷宇治の人で、士清と同じ頃から親交のあつたのは、荒木田尙賢天明八年一七である。尙賢は宇治の權禰宜で、和漢の學に通じ、詩歌文章をもよくした。實名を蓬萊雅樂といふ。宣長と彼の交りの初まりは、明和初年のころで、その後も引つゞき交つたが、天明七年一七八七には、尙賢は宣長に入門した。かくて翌天明八年一七八八七月一日に歿した。宣長は哀悼の歌を詠じて、この皇國の學問に熱心であつた學者を失つたことを悲しんだ。要するに、尙賢は宣長に對して、友人で、同時に門人といふ關係であつた。而して尙賢が宣長の友人として注意せらるべき所以は、彼が實にしかも宣長と交りそめた遠からの後とおぼしき、明和四年一七六七に、京都から追放されて宇治に來た竹内式部を寓させて好遇した、注意すべき性行の人物であるからである。

高子  
宣長  
竹内式部

荒木田久老

次に、同じく同郷の、而してまた同じ縣居門の友として、荒木田久老文化元年一八〇四歿五九がある。久老は外宮の祠官であつた。宣長より十六年おくられて生れ、三年生きながらへた。眞淵へ入門したのは、明和二年十二月で、宣長より一年おくられてゐる。彼は神典に通じ、萬葉考槻の落葉、日本紀歌解、古事記歌解等、著書が數十種ある。古歌の解釋から、律令歴史の學にもわたり、宣長と對して、古學に於ける縣門の巨擘であつた。眞淵の歿後、宣長につかないものは、多くは彼に赴いた。故に宣長に對しても、私かに相下らなかつたが、兩者の交りは、決して淺くはなく、殊にその學問上互に益し合つた學友であつたことは疑はれぬ。彼等の交りが何時から始つたかは、定かでないが、思ふに矢張明和初年であらう。而してその交りは晩年まで繼續されてゐた。

以上の三人と同じく、同郷の學友として數ふべき人に、なほ一人がある。即ち、内宮の禰宜であつた、荒木田經雅である。彼は宣長に對しては、



尙賢と同様に、むしろ、師事してゐたが、しかも、宣長の彼に對するは學友といふ態度であつた。彼は文化二年(一八〇五)に六十三歳で歿したので、宣長よりは四年生き長らへた。二人の交際については、委しく知るを得ぬが、彼が延喜式解の著者として、宣長に推奨されたのは、已に安永八年(一七七九)のことであつて、兩者の學問上の交りは、前の三人の場合と同じく、淺くはなかつたと思はれる。

註

(一) 眞淵「學びのあげつるひ」(賀全四)の四七一五の中に曰く、「松坂に本居舜庵さて、若き才子ありて、今はわが弟子となりぬ。かの丹波方の事を、理風學者流にて、煩さしと言ひおこせしことあり。」

(二) 宣長から士清にゐくつた書翰に、「師走の十三日の御文年の暮に参りつき候ひぬ、深四まき見はて候故かへし奉り候おぼしき事例のついまはで申候なりむらゐの即は許し給候へかし次の巻々又見せ給へ……………古事記巻五の巻見給は、いふぼしよれる事つつみ給はで、示し給へさらではいさ木意なくなむ候める……………陸奥、陸奥、陸奥の既ば舍人親王すでに漢籍に溺れて附

會し給へる事なればそをわろしといふ事は書紀をひたすら信ずる人には語りがたし書紀はさにかく事績に似たらむと勉めて實を失ひ古への意にそむける事多しといふ事をささりてわが古への意をよく得たらむ人ならでは承引がたき事なれば強ひては申さずこの事は古へより世に有さある人の邊はぬは一人もなく人の心にあみつきたる病なればおぼるけにてはぬけがたきわざなりあはれ道の事論はむ人もが互ひに論じてこの理りを究めまほしき事なり凡て争なりとて物を論ぜぬは道を思ふ事のおろそかなる故なりたさひ争ひても道を明らかにせむこそは學者の本意にて候はめ又よしあしを互ひに論ずるにつけても我も人もよきことをふと思ひうる物にし候へば議論は益むほく候事なりま候へばこの陸奥乾坤の事なほ申せま候は、いく度もつばらかに申候ひてんそなたよりものたまひてんやこは後の世の爲にも悉しく論らひてきはめおかまほしくかれて思ひわたり候事なりさきにかし給へりし書ども今しばしまてゆるしおき給へ又々も申し候ひなんあなかしこ、本居ののり長、むつき廿二日、谷川君の御許にまうす」(佐々木信綱氏藏)

(三) 「鈴六」谷川士清和訓深序(全五)の10111)



- (四) 日記、安永五年十月十日の條に、「今日津谷川漢齋死之由聞之六十八歳」
- (五) 新撰字鏡天明二年八月三刊本三附録の眞淵が尙賢にちくつた手紙に、「松坂野庵へも御面談の由才子に御座候へども未だ學業不弘候何ぞよくなれかしと存候事也」とある。この手紙が明和初年のものであることは明らかである。
- (六) 「鈴四」全五の九六四には三月一日前山の花見に尙賢のくるのを待ったよし記してある。これは日記及び自撰歌の詞書に徴すれば、(天明二年、一七八二)のことである。
- 又、松坂鈴屋遺跡保存會に藏してある宣長遺愛の古鈴の一つの包紙に、宣長が自筆で、それは神踏山から掘出したのを、「荒木田尙賢より、天明の頃、ちくちる。寛政十二庚申十二月」とある。
- 又「鈴五」全五の九八八に、「荒木田尙賢が江戸に詣て、年の初めのほぎこと申ける事を詠める歌を、歸りて見せにちこせけるに、詠みて送りける。」として、長歌が出てゐる。こはいづの頃か定かでない。
- (七) 入門録、天明七年の條に、「蓬萊雅樂荒木田神主瓢形初藤波勘解由氏願」とある。

- (八) 日記、天明八年七月一日の條に、「今日宇治蓬萊雅樂荒木田尙賢死五十歳」とある。
- (九) 「鈴五」全五の九九一にいでた長歌の一節に、「天地の神し恨めし、皇神の道の學びに、たゆまはずい、まをしかりし、荒木田のはしきわがせを」とある。
- (十) 竹内式部君事蹟考にいづ。たゞし同書に、尙賢を本居氏よりは先輩なりと記したるは、眞淵のこの書狀に誤れたるにて、精しくない。
- (十一) 久老、その著信濃漫錄の巻頭に記して曰く、「享和元年九月信濃の國に下りけるに、神無月善光寺にていたく煩ひけるをりしも、同學本居宣長の身うせけるよしきいて、いよく心細う覺えければ、命まさきくて國に歸りなむ事を、天神地靈にこひのみ奉りて、「天地の神もうつのへわれなくばたれか説かむよあたら古語」と。
- (十二) 藤井高尙が久老について記した文に、「此人は一見識にて、宣長は神道いさしとて被嫌申候、面白き説御座候」とある。
- (十三) 齋齋筆記(南癸文庫藏)第五、寛政七年の條に、四月十六日(日記による)に、丁度彼が參宮した時である。久老が、宣長及び門人を招待して、款待したことを、悉しく載つてゐる。その大畧を記すま左の如くである。



「當乙卯四月十六日夜、伊勢の御師久老さいへる和學者の方へ、同國の本居春庵を招待されけるさきの献立。

客、本居中衛（本居）小篠道冲（本居）三井高隆（本居）澧州白山社人、石州小笹門人。取持招伴、橋村修理之助、喜早山跡、廣田内膳、橋村圖書、主人、久敬、床掛物、賀茂翁の長歌、折紙入、

（以下食事献立あり畢す）

本居ゆしの來ませるに、詠みていたせる歌、

むくらはふけかしき宿もたけそかに君しませれば面たちにはけり

答うた、

たけそかにさひこし我を玉しきてまたれむものと思ひかけきや

（五）の二、その他、兩者の交情を徴すべきものは、「鈴六」の五十槻圖の詞（全五）の九九八、「鈴五」の久老に答へた長歌（全五）の九八一等がある。

（五）の三、寛政十年、六月十七日、宣長よりおくれる書狀（巻二十の註七）等參照。

（七）「鈴三」荒木田經雅、神主の一年のうちには、八冊宣より六冊宣まですまされ

けるよろこびに、詠みておくりける。（短歌）（全五）の九五八

（七）「鈴六」荒木田經雅、神主大神宮儀式解序（全五）の一〇〇六

（五）の二、某年（思ふに安永八年）六月廿四日、宣長から經雅にもくった、次の書狀（爾癸文庫にその寫しを藏す）は、最もよく、兩者の交際を語つてゐるから、抜抄する。客月廿三日の華輪拜見仕候……

一、儀式御解三四敷通熱讀仕候扱々御勤精之御考感心不堪候殊に此巻々宮中殿門等之事共年來不分明奉存候事ども此度御解拜見仕り明らか相分り別而大慶不斜奉存候

一、御解中天竺より佛法渡り候事をあまきよりご御書被成候天竺をアマキと申候事何の書に見え申候哉御知らせ可被下候面白き事に御座候僕未存知仕候事に御座候

一、御解中愚意又々申上候様に仰被下憚を不顧存知より候條々申上候且又御本を汚し申候義甚いかしく存奉候へども（云々）

一、貞觀儀式二冊御許借被下奉奉存候（云々）

一、先達而申上候麻笥鈴の事御不審御坐候はゞ幾度も可被仰下候簡様の事はさかく敷通往復仕り候へば段々よき考へ出る物に御座候へば無御遺慮



幾度も可被仰下候

- 一、國生神の事(云々)
- 一、手力いすゝなどの手も伊も發語に非る事(云々)
- 一、内宮の内の事愚意は古事記傳十四に申候通なり
- 一、鹽船入姫命(云々)
- 一、活目の事久米トハ別ナルベシ
- 一、苗草不敷ト云フ「いかなる意にか未考
- 一、江次第抄御寫シ被成候由追而拜借可申上候其節御序有之候へばその外大神宮記録類何にても御借し可被下旨奉奉存候
- 一、愚作取或旅言御覽被下候由思召之ニ々條御言付被下千万奉奉存候誠に被下仰聞候通り望給ふ事ありて或王を敬ひ給ひしは御禮也又支蕃察の事如仰趣栗山氏が保、健、大、記、にも申置候事也然ルニ此度此論をもらし候事は令ニ支蕃察云々蕃客云々トノミアリテ唐客トハ見えず此支蕃察ニテ唐客ナモマシラヒ候ハモトヨリ「トニテ御國ニテハ唐ヲモ蕃トスルガ本意ナリサレドモ令ニ唐客ト云「見エザレバ蕃客トハ何レノ國々チサストモ文圖ニテハ知レズ義解ニモ此蕃客ト云内ニ唐モコモレル由ハ見えズ然レ

縣門の學友  
掛取魚彦

八 縣門同門中で、その交りが古く、かつ、深かつたのは、掛取魚彦である。彼は、魚彦とは真淵の紹介によつて、他の同門中、最も早く、交を結んだ。真淵の死を彼に報じたのも、彼であつた。又、真淵の死については、

ハ此事ハ唐ヲ蕃トスル證據ニハ引テモ證ナキニ似タリ故ニ漏シメ  
 一、渤海國ノ事取或旅言ニ書申候ハ先年草稿致シ置候まゝを記し候也今にては委細ニハ覺エ不申右ハ唐書ニ渤海國の傳有之先年京師ニテ唐書一見の節抜書致シ置候様に覺申候而書篋中探し申候へども得見出不申候只今此方ニ唐書所持之方無之候故吟味不仕候其御地に有之候は、別傳之内御吟味可被成候右渤海は唐に滅されたる高麗ノ末ニテ即姓モ同シク高麗ナリ高麗唐ニ破ラレテ後ニ東ニウツリテ又國ヲ建タルモノナリ故ニ漏高麗ニ云シナリ

一、蓬萊公へ書狀御届可被下午俾奉願候草々恐惶謹言

六月廿四日

本居宣長

八御願宣機



互ひに追悼の歌を詠みあつた。魚彦は佐原の人で、古言梯、千歌、冠辭懸緒等を著し、古歌に精しく、彼自らも萬葉風の歌を詠じて、縣門第一の萬葉歌人であつた。年齢も宣長に長する七歳である。久老と同じく、宣長に對して同輩として交つた一人である。彼は天明二年(一七八二)宣長が五十三歳の時、六十歳で歿したが、兩者が晩年の交り如何については、精しくするをえぬ。宣長の日記は、魚彦の死を、當然記すべくして記してをらぬ。

村田春海

次に、同門の學友としてあぐべきは、村田春海である。春海は、宣長より若いこと、十七歳であるが、歌文、就中文章に至つては、縣門第一の才で、殊に、漢學の素養があつた。古學一般に於いては、もとより宣長の下流であつたので、春海は宣長に對しては、先輩として仕へ、殊に、眞淵歿後は疑をも正し、眞淵家集刊行のことなどについては、意見をもとひ、親しく交つてゐたが、併し、一つには、その不屈の性と、一つには親し

く眞淵の教を受けて眞淵の學の本旨を知りえたといふ自負と、一つには、實際一家の見識を抱いてゐたので、殊に、歌文に於いては、持して下らなかつた。されば宣長が歌風、殊に古風近風とわけて詠む風などについては、それを攻撃して、宣長の晩年に、大平と筆戦をしたり、また、宣長が美濃の家つこの説に對して、異を樹てたりした。また、宣長が排儒的の思想に對しても、夙にあきたらなかつたが、宣長の歿後、宣長の門弟和泉眞國文化二年、一八〇五歿と論争した時の如きは、随分過激の言を爲して、宣長を非難し、宣長の生前における態度を、殆んど一變した觀をなしたので、その爲、宣長門下からは非常に攻撃された。併し、この最後の一事は、寧ろ行がよりの一時的の現象と見なすべきで、春海は宣長に對して、元來から、自己の見識を没して盲従はしなかつたが、又それは、彼の學識と性質とのないうる所でなかつたが、十分學問上の先輩として、之を尊敬してゐた。春海の宣長におけるは、久老の宣長におけるとや、似てゐる。



加藤千蔭

川人海...  
九歳トアリ

次に述べべきは、加藤千蔭である。千蔭は文化五年(一八〇八)宣長より七年生きながらへて七十五歳で歿した。生れたのは宣長よりは五年おくれてゐる。ほゞ同年輩といへる。彼は江戸の人で、父枝直が眞淵と交りがあつた関係で、寛延元年(一七四八)十四歳で縣門に入り、前後廿二年眞淵についた。(これらの関係は宣長對大平と事情を同じうしてゐる)千蔭は、春海と同じく、優麗な江戸派歌風の代表者で、春海と並稱すべき、また並稱された縣門歌人の第一流である。彼が宣長に交つたのは、寛政二年、三年(一七九〇、一七九一)の頃に始まり、宣長の歿する時まで續いたが、春海が宣長と少くも一度は面會したのに反して、千蔭は一度もその機會を有しなかつた。而して、千蔭と宣長との交りは、けたし、千蔭がその著萬葉畧解を書かうとの志をおこし、會、宣長の玉の小琴の寫本を見て、その卓見に富んで、自分の意見に同じものがあるのを喜んで、その説を採り入れようと思ひ、その事について、宣長の許諾を

不必也

内山眞龍

求めたのに始まつてゐる。宣長は固より、快諾したので、これから、兩者の美しい學問上の交りは成立した。千蔭は絶えず、文通して、宣長に質疑し、畧解の一部分が出来ることに、宣長のもとにおくつて、意見を求めた。而して、兩者の交際は、宣長の歿するまで、繼續し、宣長の歿した時は、千蔭はまごいふかき哀悼の歌を詠じた。要するに、宣長對千蔭の關係は、全く、先輩對後輩の關係で、かつ、性質も温厚で、學識に於いても、春海の如くでなかつた千蔭は、どこまでも、この關係を維持して、その交りを繼續したのである。

以上の三人が主なるものであるが、彼等の外に、縣門の同門で交りのあつた人はなほある。眞淵の他の一人の高足で、出雲風土記註解、遠江國風土記傳、日本紀類聚解等の著のあつた内山眞龍(文政二年、一八の如きは、その一人である。總じて、眞淵の歿後、縣門の學徒等の中には、殊に伊勢の近國の人々には)、宣長に教をうくるに至つた者少くなく、同門から學



徒となつたのであるが、この眞龍をはじめ、同じ遠江の學者栗田土滿(十哲)、天明五年、一七八五、入門。文化八年、一八一、歿七五の如きもそれである。

註

(一) 眞淵から宣長におくつた手紙に、「魚彦先月上道京都へ上りそれより攝津へ下り(云々)伊勢へ参り候は、貴所を御尋可申と申候左候は、御心安御物語可被成候才は乏候へども多年故少しは心得し事も有之候」とある。  
(二) の二「鈴七」加藤千隆が初めて文をこせたるに答へたる「のうちに」いでや、縣居の友とては、一年樹取魚彦ぬしのおふらはれしと、「全五」の一〇二六とある。

(三) 書二の二

(四) (五) 春海が某年六月廿五日に宣長のもとにおくつた書狀に、次の如くある。

炎暑之節に御座候所愈御清榮被成重恭喜至極存奉爾來彼是紛冗に居候而御無音誠に奉背本意候此般小儀大記被參候に付幸便奉呈尺一候御繁多に被爲入候中へ種々申上恐入候へ共御教示奉願候

(一書)

一、續紀の宣命御調點御出來被成候由拜見仕度奉存候一本稱掛氏まで詔詞の抜書指遣し不苦候事に御座候は、御調點稱掛氏より寫し被吳候様に仕度候又詔詞中の不詳語ども別紙に奉賞問候一々御教示可被下候  
一、大被後釋此節拜見仕候誠に御精確之御吟味不堪感服奉存候遠鏡も濱田侯の御本ヲ傳テ以テ拜借いたし候而中分程拜見仕候さてくめづらしき御説ども欣躍仕候事に御座候序中相おひの調のこと嘉慶法師家集に子日の所さいふ題にて

ふた葉よりあひおひしても見てしがなけふ契りつる野べの小松を

此歌のあひおひ全相追の義と見え申候益御説のたしかなる事を奉感服候一、翁の家集も彼是故障有之而今に上木不仕候文の部後便に可奉呈候御吟味可被下候歌の部の御校正一々御尤なる御事と奉存候乍去先狀にも申上候誦翁の誤られし事も悉くあさより改め申候はあしかるべくたゝあまり淺はかなる誤のみを改め候様に奉存候とても翁の時は學問未開貴兄の御發明にて開け候事の多く候へばそれらは翁の集は誤のまゝに仕置可申さならでは翁の心つかれしやうに人存候も如何又さのみは改めにくき筋も有之候……………(以下略)



先達萬葉卷一の離歌御考千隆より傳達にて拜見仕誠に感服仕候右の離歌は御説にて論定り申候様に被存候略解は刻既に成候ゆゑ右の説は入れ不申候追加可仕やなど千隆も申居候

(六) 贈本居大平書(寛政十一年三月)

再贈本居大平書(寛政十一年十月)

(七) 織錦舎隨筆卷下、美濃の家づき離

(八) 「春海眞國問答」中春海の答へた文の一節に、「已れは儒者にて侍るを、かの古へに跡もなき事を言ひ慕りて、そを道なりとて世を欺く、宣長等のたぐひの勞する人さ、おぼしされるもたがひはべれば、」とある。

(九) (一)の二引用文の次に、「村田の春海ぬしとは一度の對面もし侍りつれ」とある。然るに千隆が宣長を悼んだ歌の一首には「わくらにはに同じよにもありへつゝあひも見ざりし事の悔しさ」とある。

(十) 鈴七加藤千隆が始めて文をこせるに答へたる「全五の一〇二六」

(十一) 巻二の十の八に引用した古事記傳終了を賀した十二月十六日の書狀の始めに「一、萬葉略解十七ノ卷御覽被下御丁寧に御書入被成下誠にわざく、飛脚を以て被遣千萬々奈御座を以て追々上木此上も無之大慶仕候又々十

八の卷上候様何ぞぞ御覽之上御書入被成下候様偏奉願候來年全備仕度奉存候とあるなど参照。

(十二) (九)にあげた追悼のうたさきにも三首、その一つは「伊勢の海や二見の浦の二つなき玉にたくへし人をしぞ思ふ」(うけらが花、二編)

(十三) 「鈴五」遠江國人内山眞龍が云々(長歌)「全五」の九七九、「鈴五」内山眞龍が遠江國に歸るに「長歌」(「全五」の九八六)

(十四) 鈴四「栗田土麿が遠江國にかへるにのみておくりける」(短歌)「全五」の九七〇等。

富士谷成章

既、眞州も此し、  
七、後、  
一、後、

九 最後に逸すべからざるのは、彼が未知の學友富士谷成章(安永八年、九段三)の名である。成章は、あゆひ抄、かざし抄の著者で、卓見ある語學者で、かのオヲの所屬については、宣長と同時に、これを明らかにしてゐる。學風も、一種獨特の深いところのある、異彩ある學者である。宣長は四十餘歳の頃、かざし抄、あゆひ抄、六運圖畧を讀んで、その卓見に驚き、これまで、成章の名は聞いてゐたが、世間一般の學者だと思つてゐたのに、



かゝるすぐれた人とは知らなかつたと、驚嘆した。併しその時は、已に、成章は、歿してゐた。もし兩者相交はる期會があつたら、學問上親交を結んだであらう。

その他、橋經亮、芝山持豊、松平康定、小澤蘆庵、伴蒿巖、加茂季鷹等がある。これらの人々については、已に傳で述べた。

註

(一) 玉勝間八の巻、藤谷成章といひし人のこと「全四」の一八七に、「近き頃、京に藤谷事右衛門成章といふ人ありける。それが作れる、かざし抄、あゆひ抄、六運圖、異などいふ書どもを見て驚かれぬ。それよりさき、さる人ありきはほのきゝたりしかど、例の今様の、かいなでの歌よみならむと耳もたざりしを、此書どもを見てぞ、知れる人にあるやうさひしが、此近き程、身まかりぬさきゝて、又驚かれぬ。」とある。

## 第貳編 宣長學の研究

### 序 宣長の學問の概念と研究の精神

一 終始學問の研究を以て一貫した、宣長の長生涯の事蹟と、その活動の社會的結果とは、吾人が第壹編の研究に於いて、明らかにし得たところである。次に、吾人は進んで、彼の學問そのものゝ研究に入り、彼の學問の内容、意義、及び由來等について、理解して見ようと思ふ。而して、こゝにはまづ、その序として、宣長が自ら意識しかつ、理解しかた、その學問の概念を明らかに、かつ、その生涯の研究を通じて有しかた、換言すれば彼の全研究の動力となつてゐた、研究の精神を究め、以て、吾人が次章以下の研究に入る、適當なる準備を成さうと思ふ。但し彼の學問の概念については、固より變遷もあり、發達もある。かつ又、彼がある著書に於いて、意識的に理解し、かつ説明してゐた學問の概